

五年以内の信心で幸福に

北海道第一回總會における

戸田會長先生講演要旨

今社會黨の景氣がいいのは北海道、共産黨の盛んなのも北海道です。社會黨が盛んであつても、また共産黨の思想が北海道に芽ばえても、とれだけ北海道の人間が幸せになつたか。さつぱり幸せになつた者はいない。大體、不景氣な人相をしておる。(笑) そんな新しい思想をはぐむ北海道ならば、少し景氣のいい顔をしている人がいるかと思うが、誰もいない。ところが、その北海道に創價學會員が二萬何千でできた。これから幸せな人間ができると私は確信するのです。(拍手)

自民黨の政策がどうあつても社會黨の政策がどうあつても、共産黨の世の中になつても、個人の幸福というものはつくれない。個人の幸福は正しい信心でつくる以外にないのです。(拍手)

今から六年前、仙台に行つた。仙台にのらくらな親父がいました、私に御指導ねがいますという。なにかと思うと、女房と離縁したいという。もつたない、女房を離縁するのはいいけれど、お前の商賣なんだと聞くと、ソバ屋だという。それから私はいつた。女房を離縁したら、その代りをやとわにやらん。考えてみると、四人の子供を育てて、夜ソバ屋をやるような人を探すと、一萬圓出しても來るか來ないかわからない。ところが、その女房、ただでしよ。(笑) 一錢も

出してない。(笑) 着物を買つてやつたことがないという。(笑) ただの家政婦使つてもつたないじやないか。そんなことやめてわが妻を大事にしなさいといつた。

それから昨年の秋、仙台で總會があつた。ひよつと私はそのことを思い出した。して支部長に、あの男どうしたと聞くと、今開會の辭を述べている人がそうだという。地區部長になつて、シャアシャアとして開會の辭をやつてゐる。偉くなつたと思つたですね。その人が仙台一のソバ屋になつたという。夏の暑い盛りでも、毎日ラーメンが七十も賣れたというんだ。

さあ! そこだ。五年目ですよ、それが、五年でそつたんだ、女房とけんかばかりやつていた、女房を離縁しようと考えていたその男が、新調の洋服を着て、地區部長になつて開會の辭までやつてゐる。(笑) 面白いだろう。そうすると貴方たちも、佛の種を心田に植えたのですから、五年ぐらいがまんしてちやんと信心しなさいよ。(拍手)

そうするとガツカリしちやつて、わあ! 五年か、長いなあなんて。(笑) 今聞いてこれから五年かなんてガツカリしないで、幸福の種は植わつてゐるんだから、これから三年、五年と、札幌に來ることに『先生、こんなに幸せになりました』といつて來てほしい。私は心から眞面目に信心したら五年もかからないと思う。三年も五年も信心して、先生まだ病氣が直らないといつて來る人がいる。そんな人はちやんと信心してないといふのです。御本尊さまをしつかり拜んで信心していれば、三年五年とすれば、だれでも幸せにならないわけがない(大拍手) このことを教えて私の講演を終りたいと思う。(大拍手)

大白蓮華 第七十三號

目次

奉頭寫眞・第十六回春季本部總會及び

第一回北海道總會・秋田支部總會

奉頭言・受持……………戸田 城 聖(一)

方便品・壽量品講義⑥……………一級講義より(二)

「妙法蓮華經如來壽量品第十六④及び觀念文」

見たり聞いたり思つたり……………辻 武 壽(二)

富士の裾野(中)……………石 田 次 男(三)

ブロック座談會に出席して……………原 島 宏 治(六)

學會の息吹・男子青年部の歩み……………池 田 大 作(一八)

三世諸佛總勘文教相廢立の拜讀……………教學研究座談會(三)

昔と今の組座談會……………座 談 會(三)

小説『人間革命』の發刊を喜ぶ……………福 柳 明(四)

福運のある祖國に……………黑 柳 明(四)

候補講義の中から……………正 木 郁 恵(四)

三世の生命と幸福……………土 屋 實(四)

或る日の先生(一)……………小 林 宏(四)

末法の惡比丘……………山 本 雅 治(四)

世界の宗教(第十七話) マニ教……………黑 柳 明(五)

日本の邪宗教(その四) みたけ教……………星 野 豊(五)

小説日蓮大聖人……………湊 邦 三(五)

文永法難の巻(二)

歌壇……………(一五六四) 俳壇……………(二五) 柳壇……………(一五)

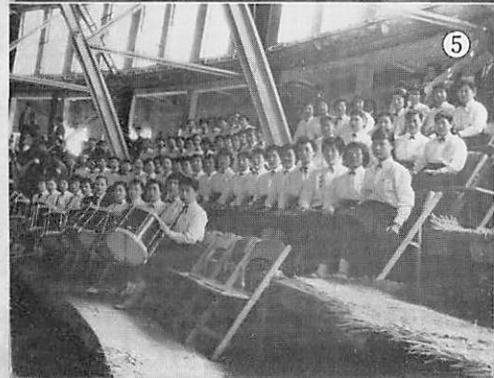
題字 日蓮正宗第六十四世水谷日昇御尊像下



創価学会才十六回春季大総会



①③三万餘の學會幹部を集めた大總會内部の風景。
 ②男子部整理班の目ざましい活躍によつて、整然と会場(國際スタジアム會館)へ急ぐ長蛇の列。



④正面玄関屋上における軍楽隊の演奏
 ⑤憂國の華の香りも床しい女子部鼓笛隊
 去る五月三日正午より、特に堀米御法主上人親下の來臨を仰いで開催された春季大總會において、柏原指導部長より、組座中心の折伏態勢の強化がうち出され、最後に會長戸田先生から、“時に叶う信心、慈悲の折伏に勵んで大功徳を受けよ”とお言葉を賜わり、幹部一同整然たる中にも力強き闘争意欲にもえたつて、盛大裡に散會したのである。



北國の岩は固し

第一回北海道總會（五月十二日）及び秋田支部總會（五月十九日）の状況

⑥二萬三千の同志を集めた北海道總會会場（札幌スポーツセンター）の内外。⑦北海道總支部長に任命された能條康章氏。⑧秋田支部總會 秋田スポーツセンターの場内。⑨小樽から函館から旭川から大型バスを連ねて總會目ざしてくりこむ同志、かくて北國廣布の息吹は熱し。



われわれが大御本尊を受持するにあつて、もつともありがたい御言葉は、觀心本尊抄における次の御言葉ではなからうか。

「私に會通を加えれば本文を讀すが如し、爾りと雖も文の心は釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與え給う」(御書全集 二四六頁)

すなわち妙法蓮華經の五字とは三大秘法の御本尊である。また釋尊の因行果徳の二法という、その釋

卷頭言

受持

戸田城聖

尊とは、權迹本の釋尊の因行果徳の二法である。何らの功もなく、何らの功徳も積まず、何らの修行もなくして、ただ大御本尊受持の功徳によつて佛の境涯を得られるのである。

されば、受持とは何ぞや。これは二應三應にも考えられることではあるが、三大秘法の義によつて、身口意三業の義によつて、拜すべきではなからうか。

三大秘法の大御本尊を信じ、只ひたぶるに南無妙

法蓮華經と唱えることこそ、その根本義であることはいふまでもない。これだけで功徳のあらわれることは論をまたぬことであるが、今少しこれを詳論してみようならば、大御本尊様を受けて部屋にかざつておくだけでは、只一應の受持になる。三大秘法の題目を分かつて二として、一つは信、一つは行となす。行の題目となれば自行化他にわたらなければならぬ。これが末法の題目である。只かざつておくだけでは信じているとはいへ、それは未だ眞の受持

にはならない。大御本尊に向つて、御本山のしきたり通りの化儀によつて、題目を口唱する、その時こそ、口に心に身に御本尊を受持したことになるのである。すなわち、その境涯こそ法華初心成佛抄

(御書全集五五七頁)の、

「凡そ妙法蓮華經とは我等衆生の佛性と梵王・帝釋等の佛性と舍利弗・目連等の佛性と文殊・彌勒等の佛性と三世の諸佛の解の妙法と一體不二なる理を妙法蓮華經と名けたるなり、故に一度妙法蓮華經と唱う

れば一切の佛・一切の法・一切の菩薩・一切の聲聞・一切の梵王・帝釋・閻魔・法王・日月・衆星・天神・地神・乃至地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・一切衆生の心中の佛性を唯一聲に喚び顯し奉る功徳・無量無邊なり、我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて我が己心中の佛性・南無妙法蓮華經とよびよばれて顯れ給う處を佛とは云うなり」

すなわち御本尊に向つて題目を唱えている人それ自身が、本尊の體となることこれ明らかである。この故に、この姿こそ眞の受持といわれるのではなからうか。また他に向つて、この御本尊の偉大な力を讃嘆するは遣使還告の位についた者である。御本尊の使いであること、これまた明らかである。さればこそ、眞に身に御本尊を受持したことになり、權迹本の佛の因行果徳の二法を譲られた者といふのである。三大秘法の義に照らし、御本尊即日蓮大聖人であり、日蓮大聖人即御本尊であると信ずるところに、御本尊を讃嘆する義があるので、この讃嘆こそ身口意三業の讃嘆といふべきではなからうか。

また戒壇に義あり事あり、未だ國立戒壇成らず、この國立戒壇建立こそ遣使還告の役目であり、地涌の菩薩の成すべきことと自覺するならば、化他にわたる題目こそ唯一無二の大事なことになるのではなからうか。そこに折伏の意義があり、學會の使命があるのである。

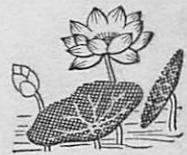
(以上)

方便品・壽量品講義

⑥

〔妙法蓮華經如來壽量品第十六④及び御觀念文〕

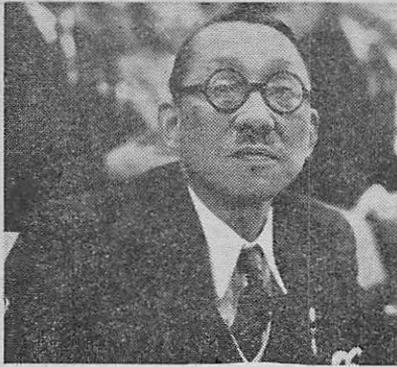
戸田會長先生の 一級講義より



〔妙法蓮華經如來壽量品〕 第十六④

是諸罪衆生、以惡業因緣、過阿僧祇劫、不聞三寶名。

【是の諸の罪の衆生は惡業の因緣を以て阿僧祇劫を過ぐれども三寶の名を聞かず】



總會における戸田先生

苦惱の因は邪宗教

この御文はですね、この前に、憂怖諸苦惱という言葉があるのですよ。憂いとかな、悲しみとか、苦しみとか、悩みがある衆生というものは、阿僧祇劫をすぎても、眞の三寶の名前を聞かないで誤まれる三寶を信じている。だから、この世へ生まれてきて、あらゆる苦しみをしなければならぬのだと、こういうのです。今の日本の民衆というものは、みな憂怖諸苦惱にみちている。生きてるのが嬉しい、生きてるのが楽しいという者はいない。悲しんだり、あるいは愛えたり、あるいは苦しんだり悩んだり、中には怒つたりしている者もある。これはみな、眞の三寶の名を聞かないからなんだという結論なんです。

邪宗は三寶を誤る

その三寶というのはなんであろうか。これは佛・法・僧と申しまして、佛の寶・法の寶・僧の寶をいいます。何を三寶とする

かという、これは佛によつて違ふのです。釋迦が佛だとうきには、法は法華經二十八品になる、僧は阿難——これは小乗の僧寶になりますから、文殊師利菩薩、これが僧寶になる。ところが、天台になりますれば、天台が像法の佛寶だ、摩訶止觀が法の寶になり、僧の寶は、章安大師になります。こういうふうな、みな三寶といえども、佛の位によつてみな變つてきているのです。

末法におきましては、日蓮大聖人をいかに拜するかということにおいて、問題が起つてくるのです。これが邪宗と正宗の分れ目になる。日蓮正宗におきましては、日蓮大聖人を佛の寶とする。

人法一箇の正宗御本尊

なぜかならば、人法一箇という哲學が佛法の中にあつて、人と法とが一致しなきやならない。しからば、日蓮宗という名前のついているもの、なんの宗教でもい、ですが、みな南無妙法蓮華經を唱えることになつています。南無妙法蓮華經というのは法です。それをいつた人はだれかということ、日蓮大聖人です。人法が一箇にならなきやいけないのです。三寶を立てる上にそこを考えていかなきやならない。ところが身延などでは、日蓮大聖人を佛にしないのです。だれを佛にしているかという、前の長行で申しましたが、五百塵點劫の久遠實成の釋迦如來を立て、います。これが大問題なんです。久遠實成の釋迦如來という

人は、四味三教を持つておつたというのです。これは、天台も妙樂もいふておる。四味三教を持つてゐる人が、南無妙法蓮華經の佛であるわけがない。四味三教という教えを持つて方便教、能通・法用の方便を持つてゐる佛はですね、南無妙法蓮華經の佛とはいえないのです。それは釋迦佛法の人たちが證明しているのですから。それを持つてきて佛として、南無妙法蓮華經を法の寶として、そして、僧の寶に日蓮大聖人と、こういうのが身延のやり方なんです。その系統は全部です。こゝに、「日蓮を用いぬるとも、悪しく敬まわば國亡ぶべし」という原理がそのまゝ、出てくるのです。身延を二代でも三代でもやつた者で、満足に榮えた者はありやしない。今も、石橋湛山君が、今度は東京都の都長官になるなんてウワサが出てゐるけれども、身延の權大僧正である以上はダメだよ、あれは。可哀想だけれども、ほんとうの話ですよ。あれが權大僧正を返して、日蓮正宗に歸依する以外に道がないと俺は思う。(拍手) あんな身延の權大僧正が東京都の都長官になつたら、都の下水管なんかが方々で破裂しちやつて、エライ事件が起つちやうぜ。(笑) 知らないよ、その時は……

そのように三寶を間違えちやつてゐるのですよ。これは一番コワイことです。しからば戸田城聖は、いかなる三寶に歸依しているか、いうまでもなく、佛の寶は日蓮大聖人、法の寶は南無妙法蓮華經、僧の寶は、御開山日興上人、これで三寶の名を私は聞

いたことになる。君らも聞いたことになる。だから、愛怖諸苦惱がないわけになるんですがなあ。い、だろ。このところが、各邪宗教と日蓮正宗の相違ですよ。これさえわかればよい。邪宗教と日蓮正宗の違いは、三寶の違いにあります。今日はこゝだけ覚えれば、もう大したものだ、ここでやめてもよいのだよ。(笑) だけど、あんまり短かすぎて、電車賃が損だなんでいわれるとイヤだから、もう少しやります。(笑)

諸有修功德。柔和質直者。則皆見我身。
在此而說法。

【諸の有ゆる功德を修し 柔和質直なる者は 則ち皆我が身に 此に在つて法を説くと見る】

これは、生命論の本質です。あらゆる功德を修するということは、御本尊様をちゃんと拜んで、朝五座・晩三座とちゃんと拜んで、そうして折伏することです。

御本尊に正直であれ

次に、柔和ということ、心が素直ということ、これは世法の柔和じやないのです。これは、御本尊様にたいして柔和ということ、その次の質直というのは、正直ということ、正直にも二色ありまして、世法の正直と、佛法の正直とあるのです。佛法上の正直ということは、大乘に柔順なことをもつて正直ということです。で

すから、御本尊にむかつて、柔和で、正直なんです。他の經文をやらないのです。そういう境涯になれば、御本尊様が、事實この世にあつて、常に法を説いているということがわかるということです。

ところが、「神も佛もあるものか。そんなものはいないワケがない」と、とるのが今の世の中です。ところが、御本尊にむかつて、素直な氣持、正直な氣持になれば、佛がこゝにいます、常に法を説いていられることがわかるから、へまなことをやらんですむのです。それを今説かれています。

或時爲此衆。說佛壽無量。久乃見佛者。爲說佛難值。我智力如是。

【或る時は此の衆の爲に 佛壽無量なりと説く 久しくあつて乃し佛を見たてまつる者には 爲に佛には値い難しと説く 我が智力是の如し】

生命は永遠である

こゝは、なか／＼面倒なところでしてね。

佛の生命というものは、永遠であると説いているのです。經文できちんというておる。佛の生命が永遠であるということは、われわれの生命も永遠だと説いているのです。

ところが、死ぬという事實があるのです。この衆のためには、佛の生命は無量だと説く。佛を見たてまつる者には、佛にあつた者にたいしてはね、佛にはあいがたいの

をあつただぞ、いつでもあえるのじやないぞと教える。佛の智力はこのようである、こういっておるのです。これが面倒なんです。それでは、われ／＼の身の上にあてはめて考えてみると、われ／＼の生命といふものは、永遠なんです。もう一へん生まれてこなきやならないのです。また二度も生まれてこなきやならない。ところが、よく／＼わが生命の永遠ということがわかれば、今度は、死な、きやならんということもわかるのです。そうすると、この生命といふものが、まことに大事な生命になるのです。佛壽は無量であるが、久しく佛を見たてまつる者には、佛にはあいがたいと説くように、われ／＼の生命といふものは、永遠であると教えるけれども、その永遠ということがよくわかれば、この世の中でこの生命を持つていことが大事だということがわかつてくる。粗末にできない。だから題目を唱えるのです。折伏もするのです。この世に生まれたということが、大變なことなんだから。またどうせ生まれてくるけれども、いつ生まれてくるかわからないのだからねえ。

いつも私がいう通り、生まれたときに、いつ死ぬか、わかれば、い、よやなもんだけども、死ぬ日がわかつておつたら楽しみがないですよ。私は今、數え年で五十八ですけれども、六十の三月に死ぬなんていわれたら、二年しかないんだから、講義なんかしていられますか。(爆笑) ほんとうは明日死ぬかも知れないですよ。それがわ

からないところに面白味があるのですよ。またね、いつ生まれてくるかわかつたら大變でしょう。「お前は死んでから三年目に生れてくる」なんていわれたら、「じや俺の家をこしらえていてくれ」なんていうことになる。(笑) そういことがわからないうちになつていけるのですよ。

生命に對する確信

だから、今のこの經文の意味は、佛の壽命は無量である。そして佛を見たてまつる者には、佛はあいがたいと教える。わが智力かくのごとしと斷言しているのです。面白い學説でしょう。こゝを讀んで、これにはつきりわかれば、自分の生命にたいする確信がつくのです。いつ死んでもかまわない。死んでも大丈夫だ。といつても、生きているうちは體を大事にして、世間の人にはよくしてやらなきやいけないということが、わかつてくる。それでい、のじやないのか。そうすると、創價學會の會員といふものは、みな物のわかつたい、人ばかりだということになつてくるのだというこゝになつてくるのだよ。それを折伏に行つて、すぐにケンカを始めてきちやう。相手がいふことをきかないと、「お前なんか一週目にヒドイ罰をうけるから」なんて……(笑) そういふことをいつてくるから、「アイツらはロクなやつじやない」なんていわれるのだから、人とケンカしないようにやつてくれよ。ほんとうに困るんだよ、僕一人が困っているんだよ。

慧光照無量。壽命無數劫。久修業所得。汝等有智者。勿於此生疑。當斷令永盡。

【慧光照すことに無量に 壽命無數劫 久しく業を修して得る所なり 汝等智あらん者 此に於て疑いを生ずることなかれ 當に斷じて永く盡きしむべし】

御本尊の功德は無量

慧光照すること無量で壽命は無數劫なり。慧光とは、御本尊の功德です。御本尊の功德は無量である。また、その佛は、絶對になくならない。なぜこういふふうになつたかといへば、業を修して得たところである。こゝは非常に面倒な讀み方でありましてね、われ／＼の生命は、永遠であるけれども、その永遠の根本は何かという問題です。

人間に生まれてくるならいゝさ。だけど、かならずしも人間に生まれてくるとはきまつていないのです。大聖人様の御書の中でも、はつきりと割りきつているところです。ネズミに生まれたときには、ネコに迫われスズメに生まれたときにはタカに迫われしだ苦しみを思つたら、なんでもないじやないか、大聖人様は、はつきりおつしやつてゐるのだよ。そういう御書を拜するとね、なんだか、ネコに生まれてきそうな氣持ちがして、しようがないのだよ。(笑) どう

だい、同じ生まれれてくるのなら、人間に生まれてこなきやしようがないよ。ネコだのイヌだのに生まれてきたらたまつたもんじやないよ。同じイヌなら上等のイヌにね。ウマなんていうのも、困つちやうぜ。この佛の境地を出せるものは、人間しかないのだよ。ですから、佛の壽命は無量である。久しく業を修して得たるものである。業を修するとは何かというと、題目を唱えることですよ。智あらん者は、疑いを起しちやいかん、永くその疑いを断てよ、そして、題目を唱えなさいというのです。

慧光照無量、御本尊の慧光というものは、無量を照らすものである。そして、佛の生命は永劫である。そのようにお前らの生命も永劫である。なぜ永劫であるかというところ、久しく業を修して得たものである。業とはわれ／＼の行動ということですから、それは、題目と折伏をやつたことによつて永遠の生命を得られるのである。佛法の理論からゆきますと、死んだつて、そう騒ぐことないんだよ。すぐ生まれてくるんだよ。

永遠の幸福の姿

今度も大阪へ行きましてね、「病人の者はこい、相談に乗つてやろうじやないか」といつたら、来たわ／＼、ねえ、まあ一番多いのは、小兒癲癇だよ。こうじつと見てゐるとね、親にはいえないけれども死んだ方が早くおとすと思うような人がゐるのだよ、どうもそう思うけどもね、いうわけにやいかない。「ちやんと信心しなさいよ」

と、それだけしかいえないでしょう。親が熱心に信心するとね、早く死ぬのです。そしてまた、早く生まれてくる。カンタンなんです。今度はピン／＼して生まれてくるのです。それは、はつきりしたもんです。金病缺で死ぬなんていうことをやつちやいけないぞ。(爆笑) これはなおるにきまつてゐるのだから。たゞ、時間がかゝるんだよ。そんなこといつたつて待つてられないなんというだらうけども。(笑) 大丈夫、聖徳太子だつて他にはばかり行きやしないから、君らの方にもちやんと行きます。(笑) 聖徳太子というヤツは實に足が早くてね、あんな男でなかつたんだけどねえ。来たかと思つとすぐ歸つちやう、……札になつたらバカに足が早いじやないか。(笑) まあそのうちに、ゆつくり泊つてゆくようにならるから、それは急いで死ぬ必要ないぜ。

われ／＼は、死んでまたどうせ戻つてこなきやならないのだからねえ、仲間を作つておくのですよ、折伏して、そうすると、今度きたときに便利なんだよ。たくさん仲間がゐるから。僕なんかはよほど折伏しとつたらしい。だから仲間が多いですよ。悪いヤツもたくさんいてねえ、ちよつと都合の悪いこともあるのだけれども。(笑) 君らだつて、こんなに集つて僕の話の聞くからには、前に折伏されたんだらう、きつと。そのときはイヤダ／＼とみんな逃げちやつて一つも信心しないものだから、この世へきてさん／＼困つて、今度折伏されたんだらう。そういうものなのだから、折伏して

おきなさい。間もなくたつていゝ、また來るから。一緒に出てくるのだから、これだけは面白い原理だぞ。佛法でなきやこれはい、切れない。

佛法は迷信ではない

私みたいなことをいう人間は、今日日本にはないのです。こんなことをいうと、迷信だといふのです。「あの野郎、迷信を信じてゐる」といわれるのがコワイから、いかなる佛教學者でも、迷信といわれるのがイヤだからいえない。本人はわからないから。僕だけだ、こんなことをいつてゐるの……日蓮正宗の坊さんでもいわないぞ。よつほど大丈夫だといふときにはいふけども、それ以外はオツカナイからいえない。僕は何もオツカナクはないもの、迷信じやないもの、ほんとうの生命哲學なんだから、生命の原理を教えているのだからして、何がコワイのだ。そんなことはないといつたつて、あるといつたつて、ほんとうのことはほんとうなんだからなあ、ウソを教えやしないのだから、大丈夫だよ。僕は佛敎原理だけはウソを教えないぞ。他はウソを教えるかも知れないから、他のことは聞きにきちやいけなさい。(爆笑)

佛語實不虛。如醫善方便。爲治狂子故。實而在言死。無能說虛妄。

【佛語は實にして虚しからず 醫の善き方便をもつて 狂子を治せんが

爲の故に 實には在れども而も死す
というに 能く虚妄を説くものなき
が如く】

この、釋迦の教典というものを讀みますれば、能通法用の二方便と違ひまして、祕妙方便から入つて、彼がほんとうの學説を説いているときには、生命の永遠というところも、佛の言葉に、いつわりはなから、なぜ死ぬのだといえよ——長行の譬如良醫のたとえを引いてあるのです、こゝは——氣狂いの子供をおさんがために、實は死んだのではないけれども死んだというてなおしたようなものであつて、眞實の生命というものは、永遠なんだぞと、その間にいろ／＼な苦しみをあるいは樂しみを感ずるのだぞと、こういうのです。私がいつも申しあげますことは、生命は永遠なんです。だが、今度生まれてくる場所によるんですよ。子供でも、不幸な子供があります。生まれたときから不幸で、死ぬまで不幸な人もいます。反對に生まれたときから景氣がよくてさ、終りまで樂しみをつくす人もいます。これは、どうにもならない。

生命永遠なる證明

支那に史記という本を書いた司馬遷という人がおります。無實の罪を着て體を斬られたんです。これは有名な人でしてね、漢文やる人は、この史記を讀まなきや漢文やつたことにならないのです。その史記の中

に、伯夷・叔齊という人がでてきます。殷の紂王を周の武王が亡ぼしたときに、この戰爭の總大將が太公望でして、とても偉い人でした。魚を釣りに行くのに、針を伸ばしてしまつて魚がひつか、らないようにして釣つてゐる。どうしてかと思はれてね、「魚が喰いつくと面倒だ」といつたというが、それなら釣りに行かなきやい、じやないかね。そういう面白い男が參謀になつたときに、伯夷・叔齊が、「革命というものはいかん」といつて諫めて、ついに周の武王が天下を取つたときに、「周の粟は食まず」といつて、首陽山という山へ上つて、うえ死にしている。ところがね、名前は忘れてしまつたが、なんとかというドロボーの親分がゐるんだが、無辜を殺すこと三千人というのだ、罪のない者を三千人殺している。それで一生涯、酒と肉には事か、ずに死んだという。「この原理は如何？」とその人は書いていますよ。どうだいわかるかい。伯夷・叔齊は聖人であるが餓死した。ドロボーの親分は罪のない者を三千人も殺して、酒と肉にあきるほど、一生樂しんで死んだという。この原理は、そういう偉い人でもわからなかつた。

それは、漢學ではわからない。儒教ではわからない。それは佛法で説く前世の問題なんだよ。

題目は來世に持てる

この世で、われわれはどうせ良いことなからできつこないのだから、題目を唱えて

ね……題目だけは持つてゆける、金は持つてゆけませぬぞ。題目は持つてゆける、折伏したその手柄は持つてゆける、それが來世へ出てくるのです。だから、今度生まれるときには、いつもいう通り、これくらい（豊島公會堂）の大きさの家へ生まれることにしたらよいと思ふんだが、どうだろう。

そうして、自動車がつく三台もあつてさ、一台でもよいけれど、あまりポロでないヤツさ、（笑）そういう家へ生まれて、一生豊かにくらす、それが成佛というのです。こゝでほんとうに成佛しておればですよ、何代もその福運がつくんだよ。へるといふことがないのだよ。使つちやつてなくなつたなんてことはないのだよ。なんと生まれてもそういう家へ生まれてくるんだよ。四疊半の押し入れの中で生まれるなんてことはないですよ。（笑）生まれるときだつてさ。飛び出るように生まれてくる。母親をイジメて痛い思いをさせて生まれてくるなんてことはしないのです。ポーンと出てきちやう。（笑）それがために信心しなさいというのですよ。その證據は今生で現われる。この世で幸せて死ぬのです。だから、わしが教えることがほんとうかウツか、ためしてごらんなさい。この世で幸せにならなければ、來世も幸せとはいえないのです。この世で貧乏してさ、さん／＼困つてさ、死んだら、西方淨土へ生まれるなんて、冗談いふな、ウツにきまつている。法然や親鸞なんというのはウツツキだから、あんなヤツらのいうことを聞いちやダメだぜ。こ

の世でよくならなければ、……そういうことをいふと、よく私のことを、現世主義だなんていうのですが、この世でよくなることは、來世がよくなる證據になるからいいのですよ。

法によれ、人にはよるな

だけど、御本尊様をマジメに信じなきやダメですよ。よく聞きますとね、やれ組長がどうだとか、班長がどうだとか、地區部長がどうだとか、ゴタ／＼いう人があがるが、そんなことは關係ないじやないか。向うのことでしょうが。地區部長が悪かつたつてさ、班長、組長が悪かつたつてさ、あなた方に何も關係ないよ。自分だけちやんとやればいゝじやないか。御本尊様を拜んで、折伏さえしてれば……人のことをいふ必要ないよ、悪けりや悪いようにさしときやいゝじやないか、佛罰は、そつちがうけるのだから、そうでしょう。それを、アイツが悪いなんていふと、その反應がこつちへきて佛罰をこうむるぞ。人を相手にしてはいけない。自分だけ御本尊様に取り組め、そこに功德が受けられるのだ。

我亦爲世父。救諸苦患者。爲凡夫顛倒。實而在言滅。

【我も亦爲れ世の父 諸の苦患を救う者なり 凡夫の顛倒せるを爲て實には在れども而も滅すと言ふ】

大聖人は我らの父

大聖人様は、このお言葉を非常に強くお用いになっております。我亦爲世父、自分は世の中の父である。もう／＼の苦患を救うものであると。これが御本尊様のお資格ですね。御本尊様のお力をはつきりいつている。大聖人様がお出ましなられたればこそ、われ／＼は大御本尊様にお目にかれたのです。そうならば、大聖人様は我亦爲世父である、だから、もう／＼の苦患を救うものであるということが、はつきりしてくる。

會長になりたくなかつた

私もね、創價學會の會長になりました。私は實は、創價學會の會長になんかなるの、大嫌いだつた、ウソじやありませんよ。初代の會長がおつたときにはね、私はアブナイと思つたのだ。へましたら二代目をやらされると思つたのだ。そんなヤッコシイことやられたらたまるか。ほんとうですよ。それで逃げ歩いてた。いよ／＼初代の會長が亡くなつて僕が出てきた。困つたなあと思つたところが、側近の者が、「先生、會長になつてやつたらいい、なつてくれ」とこういう。「バカいうな、會長になんかなつてたまるものか。そのうち良い會長が出てくるから待つていろ」といつて、七年間引つばつたのです。それが罰を受ける大もとなりましたけれどもね。もうなつた以上は覺悟きめちやつたもの。も

う卑怯に逃げ廻りやしませんよ。我亦爲世父、大聖人様がそう仰せられた以上には、自分も日本民衆の父として、悩み苦しむ者、もう／＼の苦患を救う者だという確信に立つて耐わなきやいかんと、私はこう思つてやつております。(拍手)もう逃げやしませんから、大丈夫だ。困つた者は必ず助け、こういふふうにはなをきめてやつております。

生死の理を顯す

その次の句は生命論です。凡夫の顛倒せるを以てというのは、人の生命は永遠であるにか、わらず、この世きりだと思つてゐる者、それは凡夫の顛倒です。それがために、實在であるけれども死というものを現わすのだと。これは、お釋迦さんも、鳩摩羅什も——釋迦の説いた説法を、鳩摩羅什が譯したのですが——なか／＼苦勞しております。凡夫の顛倒せるを以て、實在であるけれども死というのであると、これは生命論です。

ところが、大聖人様の御書を拜しますとね、こういうヤッコシイことはおつしやつておられない。大聖人様の佛法が徹底してゐるのはそこです。「生死の理を顯わさんのために、あなたの旦那は亡くなつたのだ」と、こうおつしやつています。またあるところでは、われ／＼の生命は永遠である。「ネコに生まれたときはイヌに追われ、あるいは妻子のために、そういうわれわれが流した涙というものは、大海の水は

どだ。佛法のために流して涙なんてちつともない」とおつしやつています。それを聞くと、どれほど女房をたくさん持つたかということがわかるね。何萬人と持つたに違いないな。今一人くらいは女房にオドカサレテたまつたもんじやないと思つてくれども、(笑)それがオツカナイのだよ。どうだ君らは……僕はオツカナイのだよ、すぐあやまちやう。(笑)人間がスナオでからね。(笑)他の者にオドカサレルのなら、なんにもオツカナクないけれどもね。女房というものは、泣くし、カミつくし、ふくれるし、いろいろなテを知つてゐるんだから、敵わないぜ、女房なる者は、亭主なんかオツカナがらず大いに攻撃精神を發揮して、金を持つて歸らなかつたら、うんとふくれるのだ、大い勝利だから。だけど、こう習つたといつちやダメだぞ。(笑)

【常に見るを以つての故に 而も橋恣の心を生じ 放逸にして五欲に著し 惡道の中に墮ちなん】

以常見我故。而生憍恣心。放逸著五欲。墮於惡道中。

すなおに怠けず

この講義は非常にマズイのだよ。なぜかというとな、自分のことをいうみたいで都合が悪いのだよ。いゝか、常に我を見るを以ての故に、御本尊様がちゃんとあるのだ、御本尊様を拜めばいゝ、ということを、

僕なんかちゃんと知つてゐるのだ。放逸にして五欲に著す、五欲つてほどじやないけれどもね、僕はイッパイやる。そうするとね、惡道の中におちると、なんだか自分のことをいわれてるみたいでね、まことに都合が悪いところですから、よろしく聞いておいて下さい。いつも御本尊様があるから、もう安心だと思つてさ、そうなる今度はずラメをやつちやう。五欲というのはね、目の楽しみ、耳の楽しみ、鼻の欲、口の欲、皮膚の欲、この五つです。ところが、みんなそれじやないでしょうか。だが、五欲に著しなきやいゝのだよ。五欲を樂しめばよいのだ。五欲に著すと、ついにそこから惡道におちるといふのだ。ロクなことが起らないといふのだ。あなた方もそうじやないのか。五欲に著して惡道におちないやうに樂しむならばよろしいとこういふのですよ。こゝは僕にも耳の痛いところだから、講義はこのくらいでよさしてもらおうじやないか。君らだつて聞きたくないだろう。

「あまり五欲に著するな」という資格はないけれども、いう分はいうていゝのだよ。これは無量義經にある。「自分は立派にならんでも、人に法華經の原理を教えるならば、教えてもさしつかえない。聞いた人は、そのことによつて成佛する」と、こういうのです。だから、僕がそうならなくても、いくらしやべつてもかまわないことになつてゐるのだから。君らも、自分が偉くなくても、法華經の原理だけはしやべつてもいいのです。知つたカブリはあまりしないよ

うに、また、人にそういわれたら、スナオに聞いてその通りになればいい。

佛法でウソはつくな

支那にね、こ、(手のひら)に刃物をかくして、物をパツと切るヤツがいたのだつてさ。支那人はそんなことが上手だからね。そうしたら、マジメになつて聞いた人がいる。「あなたは どうして、手のひらで物を切るようになりましたか」と。「なんでもない。瀧のように流れる水をな手でパツとやつて、その水が一つも散らないようになれば、切れるようになる」といつたら、聞いた方は本氣にしてさ、三年間それを修行したのだよ。とうとう水が散らなくなつた。そうしたら、ほんとうにパツと物が切れるようになつちやつた。すなおに聞いた人が得でしょう。どうだい。それと同じなんだよ。佛法は、書いてある通りに教えているのだから、その通りに信じてやれば、僕がダメでも、君の方が得するのだよ。といつて、ウソを教えちやダメだよ。佛法だけは、ウソを教えるとは後で罰を受けるぞ。僕は、君らに、佛法だけはウソを教えないからね。

我常知衆生。行道不行道。隨應所可度。爲說種種法。

【我常に衆生の道を行じ道を行ぜざるを知つて 度すべき所に隨つて爲に法を説く】

偉大な御本尊のお力

これは、御本尊様のお力でありませんが、我常に衆生の行道不行道を知つて、度すべき所に隨つて救つてゆく。これはコワイ言葉ですな。行道というのは、御本尊を信じまいらせて折伏すること。不行道とはやらないことです。御本尊様は、それを知らぬして、その人の態度にしたがつて、どうして救おうかと考えられて、罰と利益を出して下さるということです。信心しないからつたつて、憎みあそばしちやいやい、それでおうじて救つてやるのだと、行道、不行道は、ちやんと佛様はわかるだ、こゝういふのです。

願いは絶対かなう

よく質問會なんかで、「あんた信心したのはいつか」と聞くとね、「もう四年もしてさ、それで病氣がまだはつきりなおらない」といふ。そんなインチキをいうなといふのです。これは不行道です。そんなバカな話があるものか。断じてありません。金ができないというのならね。まだ三年やそこらではし方がない。だけれども、五年、七年とやつて、まだ貧乏してるなんて、そんなバカな話もあるものか。やつていないのです。僕には、やつてるかやつてないかわからないが、佛様はちやんとわかるのだから。法眼とい、ましてね。ほんとうの信心を三年も四年もしてさ、よくならないといふのはウソですよ。やつていないのです。

やつていれば、そんなバカなことは断じてないのです。電車に乗るのだつてさ。上野行きに乗つたら、上野驛へ行くにはきまつている、乗つたけれど、いつになつても着きませんでしたなんて、そんなバカなことがあるかい。(笑) オヤジさんだつてさ、「實はちやんと電車に乗つただけだよ、家へ歸るのにずいぶん時間かゝつた」なんて、そんなのウソだよ、途中で、イツパイやつたんだよ。(笑) そんなの信用できまへんてことだ。それと同じだ。こゝういふうに信心も判断してあげなさい。

毎自作是念。以何令衆生。得入無上道。速成就佛身。

【毎に自らは念を作す 何を以てか衆生をして 無上道に入り 速かに佛身を成就することを得せしめんと】

自我偈のしめくり

毎自作是念、これは御本尊様が、常にこゝういふうに念じているといふのです。どうしたならば、衆生をして——佛法に無上道と有上道とあるのです。無上道というのは、この上もない道、それは南無妙法蓮華經です。佛法の最高峰をいふのです。無上道を得さしめて、速やかに佛身を成就させられようか、佛の境涯をどうしたならば、つかませてやれるだろうかといふて、常にこゝういふうに念じているといふので

す。これが、自我偈の最後のく、りです。南無妙法蓮華經の力によつて、みんなを佛の身にしたいものだ、と、御本尊は常に念じているのです。

國柱會の質屋本尊

しかるに、こつちの方がやらないからダメなんです。不行道ばかりやつてるから。だから佛身が成就できないのです。佛身が成就されたならばね、何も心配はないのです。どの經文を見てもね、貧乏した佛様なんて聞いたことないですよ。質屋通いしたなんていうのは。田中智學のところの國柱會の御本尊は貧乏したよ。これはニセモノだ。そうだけれども、向うではニセモノだといわぬ。佐渡賴の本尊といつては。この御本尊をだ、佐渡から持つてきて、東京で開帳をやつたのだ。そうしたら入りが悪くてね、質屋へ入つちやつたのだよ。(笑) 佛様が質屋へ入つたのだから大したものだよ。それをどつか中國の殿様が買つてさ、それが流れて出たのを、國柱會で本尊にしてるのだよ。昔あつた精華會あたりもあれをやつてはいる。それを誰れがいつてはいるかといつてね、國柱會の田中智學の第一の弟子で、山川智應という博士が、ちやんと本に書いてあるのだ。だから、われわれは信用してもいい、だらう。向うの人が書いたのだから。「この本尊はアテにならない、本物だかニセモノかわからない」と。たとえ本物にしてもだ。佛様が質屋へ入つちやつとつとねえ。どうだい、おい、(笑)

それを拜むとみんな質屋へ通うようになるよ。(爆笑)それはダメだよ。佛身を成就すればそんなことはない。

早く佛身を成就せん

だから、みんな一生懸命に題目を唱えて、信心を上げて、速やかに佛身を成就しようじやないか。僕にかまわず、先になつたつてい、のだよ。先生がならないからさ、氣の毒だから俺もならないなんて、そんな遠慮はいりやせんよ。(笑)どうぞ先になつて下さい。お願いいたします。私は後でいいのだよ、急がないのだ、私は、長生きしようと思つたらね。それをマネして、先生がやらないから俺もやらないなんていうのではないよ。

〔御觀念文〕

觀念文というのはね、御本尊に何つて拜んだときの、心の中の状態が觀念になるのですよ。口ではこの通りなんだかんじつてたつてさ、肚の中で、「どうもお味噌汁のにおいがしてくる、早く飯がくいたい」なんて思つていたら、それが御觀念文になつちやうのだよ。「女房のヤツ、俺が勤行してるのに来やがらない」なんて思つてやつていたら、その肚が御觀念文になつちやうのだよ。(笑)觀念文というのは、佛様を拜む心からくるのだから、そのときにいろ／＼とお願ひするのだからね。

初座

生身妙覺自行の御利益・大梵天王・帝釋天王・大日天王・大月天王・大明星天王・天照太神・正八幡大菩薩等・惣して法華守護の諸天善神・諸天畫・夜常爲法故而衛護之の御利益法味倍増の御爲に。

第一座は面白いですね。こういうことをいうヒトがいるのだよ。あつちでもこつちでも、これをやつたらね、梵天・帝釋・諸天善神が急がしいだらうというのだよ。(笑)ヒドイヒトになるとね、朝九時すぎてやつたら、梵天・帝釋がなくなるなんていうのがある。そんなバカな話があるのかい。いつだつているにきまつている。いるわけだよ。われ／＼の生命の中にちやんといるのだから。それを東に向けてちやんと唱えるというのと、大宇宙の中にある梵天・帝釋というものが、ちやんと向うへ並ぶのです。何千人やつたつてかまわないのだ。いくらでも、分身の術といふましてね、佛法でだけ、これがいわれているのです。

諸天善神にお禮

そうして、その人たちにたいして、御本尊を受持したおかげによつて、夜も晝も守つてくれて、まことにありがとうございませと、お禮をいふのです。これが初座だよ。この通りいわなきやならないとはきまつて

ないぞ。これは、安樂行品の言葉をご、に使つていのですが、この通りワケのわからない言葉でいうことないよ、日本語でやればいい。

「梵天・帝釋・大日天・大月天・大明星天・天照太神・正八幡菩薩・總して法華守護の諸天善神、大御本尊様を受持している功德によつて、日夜に加護を垂れたまひ、ありがとうございませ」と、これでい、じやないか。これなら意味がわかるでしょう。

そうして、今度は大御本尊様に向いますというのと、その梵天・帝釋等諸天善神は全部、後に並び、大御本尊に向つて唱える經文をちやんと聞いているのだ。壯嚴な儀式なんです。

二座

南無本門壽量品の肝心、文底秘沈の大法、本地難思、境智冥合、久遠元初自受用報身、如來の御當體、十界本有常住、事の一念三千、人法一箇、獨一本門戒壇の大御本尊、御威光倍増御利益廣大御報恩謝徳の御爲に。

本佛の十號をたたえる

これは佛の十號と申しまして、御本尊様に向つて左の方に、「福十號に過ぐ」とある、あの十號と、この十號とは違ふ。あの十號は、釋迦佛法の佛の十號なんです。釋迦佛法の佛の福運にすぎるそとの仰せなん

です。これは、末法の御本尊の十號になるのです。

①南無本門壽量品の肝心

壽量品の肝心というて經文の心みたいにして思つてしようけれども、大聖人様のお讀みになつた壽量品は生きています。その生きてる生命の中心が壽量品の肝心です。壽量品それ自體が生命だ、その肝心、それが南無妙法蓮華經だということです。

②文底秘沈の大法

我本行菩薩道の本因初住の文底に秘し沈めてあるところの佛様だと、こういうのです。

③本地難思

本地というものは、わからぬものです。私にしても、あなた方にしても、本地があるのです。本地は思ひがたい、どこだかわからぬ。わからぬわけだ、大宇宙それ自體なんだから。

④境智冥合

境と智というものは、冥合しなきやいけない。境とは客觀世界、智とは主觀世界。客觀世界と主觀世界とが、びたつと合つてなきやならない。御本尊様の境は、大宇宙です。智は、本佛の智です。それが冥合している。

⑤久遠元初自受用報身

久遠元初というのは、大御本尊様の本地です。釋迦の本地は久遠なんです。久遠元初とは、そのま、大宇宙それ自體なんです。自受用報身、報身というのは、この前申しましたように、法身如來・報身如來・應身

如來とあるうちの、報身をもつて主にしますから、こういうのです。久遠元初の自受用報身、だれのために生まれたのでもない。他受用報身というのは、人のために何かしてやらなきゃならないで生まれたのをいいます。同じ佛でも、自受用報身とは、そのまんまということです。大御本尊様は、南無妙法蓮華經そのまんまなんです。それで自受用報身ということです。

⑥ 妙來の御當體

南無妙法蓮華經如來壽量品のその如來の御當體で、本體であらせられる、これが御本尊様です。

⑦ 十界本有常住

この本有常住ということ、身延あたりでは知らない。身延では勸請してきたというのでしよう。十界勸請の曼荼羅ということとを邪宗ではいう。冗談じやないよ。十界勸請というのは、早くいえば、釋迦牟尼佛に頼んできてもらつたということです。勸請というのは勸め請う、頼んできたということですから、釋迦牟尼尊も頼んできた、鬼子母神も頼んできた、上行菩薩を頼んできて、そして御受茶羅の中に入れたのだというのには十界勸請です。十界本有常住というのには、十界にそのまま御本尊様がいつしやる。そのまゝ、いらつしやるが故に、ほかの九界も全部そろつていっていること。これが當宗のお受茶羅なんです。邪宗では勸請という。勸請ということが眞實か本有常住ということが眞實か、簡單にわかることです。御本尊の中には修羅界もあ

る。あるいは地獄界もいる。御本尊自體にみなお持ちです。これは本有です。勸請というのが本當なら、御本尊様即我々ですから、先ほど話したように全宇宙が即一念三千、われ／＼の生命即一念三千、しからばわれ／＼の生命の中にも餓鬼道でも畜生道でもあるでしょう。それは誰でも認めなければならぬ。われ／＼が腹たてる。修羅界があるから腹たてるのです。修羅界がなかつたら、腹たちません。腹たてるのに修羅界をやとつてきてから腹たてる。そんなバカなことはありませんか。(笑)三越で賣つていないかなんてね。そんな、十界をヨソからもつてきて、この身體にくつつけるのではないのです。赤ん坊のときからこの十界はもつていっているのです。それが御本尊様の本有常住ということ。勸請なんていう言葉は、あれは、おイナリさんの言葉ですよ。勸請なんていう言葉は、今はやらない。今はやつているのは、兵隊勘定だけだ。(笑)

⑧ 事の一念三千

事の一念三千というのは、御本尊のことです。事とは佛の仰せのまゝ、の行動を事といたうのです。佛のやること、おつしやつたことを、そのまゝ、やるのが事です。それに何だ、かんだと理屈をつけ、變つた形にあらわすのを理といたう。事の一念三千、佛さまのおつしやつたままのお姿が、事の一念三千です。

⑨ 人法一箇

人と法とは離れておらない。大聖人様も

御本尊であらせられれば、大御本尊様も大聖人様であらせられる。人に即して法、法に即して人、これが御本尊様の御姿です。大聖人様がいらつしやらなければ大御本尊様様はないんですから、南無妙法蓮華經といえれば大聖人様なんです。人と法とは離れません。

⑩ 獨一本門戒壇の大御本尊

獨一本門というのは、釋迦の佛法では、法華經二十八品のうち、前の十四品を迹門といひ、後の十四品を本門といひ、この獨一本門も、あわせて迹門に扱うのです。南無妙法蓮華經それ自體が本門になります。獨一本門とは、釋迦の本門とは全然違ふという意味です。

その獨一本門の戒壇の大御本尊と、佛様に十の讚め言葉を申しあげて——しめく、れば南無妙法蓮華經様ですよ——その御利益廣大、御報恩謝徳のためにするのです。

三座

南無本因妙の教主・一身即三身・三身即一身・三世常恒の御利益・主師親三徳・大慈大悲・宗祖日蓮大聖人師・御威光倍増御利益廣大御報恩謝徳の御爲に。

言葉を申しあげてお禮を申しあげるので。なぜ本因妙の教主といたうかという、釋迦は本因妙の教主なんです。釋迦にたいして、末法の佛は本因妙の教主になるので。教主とは、佛という意味です。

一身即三身、三身即一身といつていますが、佛はね、佛法の上で、法身如來の境涯を説いた經文もあります、大日如來なんかそう。それから、報身如來を説かれては、般若經なんかそう。あるいは應身如來を説かれては、阿含なんかはこれに入る。ところが、大聖人様は、法身如來であり、報身如來であり、應身如來でいらせられる。ですから、一身は即三身如來にわたらせられる。また三身は即一身であらせられる。

三世常恒の御利益、過去・現在・未來の御利益を持たれている。

主・師・親、それは、親でもあり、主人でもあり、お師匠さまでもいらせられる、一般衆生に對して三徳を持つていられる宗祖日蓮大聖人様に對して、お讚めを申しあげてお禮を申しあげるので。

南無法水瀉瓶、唯我與我・本門弘通の大導師第二祖白蓮阿闍梨・日興上人師・御威光倍増御利益廣大・御報恩謝徳の御爲に。

二祖日興上人にお禮

これは御開山様だ。法水瀉瓶というのは、茶碗がありますね、この茶碗が、どん

日蓮大聖人に御禮

これは、大聖人様にたいして、おほめの

な形が變つても、この中の水を瀉せば同じことでしょう。ですから、代々の御法主殿下は、お人によつて、いろいろと違ふのです。しかし、中に瀉された法水というものは、變りがないのです。大聖人様の法水がそのまゝ、移されている。

唯我與我的御境涯、我とあなた、大聖人様と日興上人様とは同じであるという御境涯。面白いことですね、御本尊様なんか、お二人の合作がある。大聖人様が途中まで書いてね、後は日興上人様が書かれて、そして大聖人様がサインをなすつています。

飛曼荼羅の不思議

飛曼荼羅ヒマンダラなんていうのは、合作の御本尊様ですな。仙合にね、飛曼荼羅というのがある。これは、ある總代が、御本尊様を寺から預つて、火事になつたのです。そうしたら、その御本尊様がね、風にあふれて出ちやつてね、仙臺公の城の松に引つかつたのです。なんだかヒラ／＼するからというので、上つて見たら御本尊様だつた。それで飛曼荼羅という名前がついた。それが、明治になつてから、どつかへ預けられて歸つてこなくなつて、佛眼寺の和尚さんが一生懸命になつて、このまゝ、佛眼寺へちゃんと歸つてきた。

また面白いのはね、中野教會で、御授戒のとき頭にのせる御本尊様があるだろう、あれも有名な御本尊なんです。大阪のなんかという總代が預つていて、やはり火事になつた。ところが、もう當然燃えなきや

ならないのに、箱だけ焼けて、中味はちゃんと残つた。お曼荼羅が、今、中野教會の御授戒のお曼荼羅になつていたのだけれど、今の和尚さんへ譲られたかどうか、それは知らないぞ。今の法主様、堀米先生が中野教會におられたときには、それで御授戒して下さつた。そういう不思議な曼荼羅もある。

法水瀉瓶唯我與我的御境涯、法主様になると、人間が全然變るのです。不思議なものだねえ。今の法主様なんか、ずいぶんお弱かつたのですよ。今はピン／＼していらつしやる。佛様になられるのだから、速成就佛身だよ。三年くらいすると、全然變れるからな。

南無一闍浮提の御座主・第三祖新田卿
阿闍梨日目上人師・御威光倍増御利益
廣大御報恩謝徳の御爲に。

三祖日目上人に御禮

日目上人、この方は偉い方なんだよ。頭が平らになつちやつてね。なんで平になつたかという、御本尊様へ上げる水を、毎日汲みに行かれたのだよ。桶を頭の上へおせて運ばれたので平になつちやつたのださうだ。そうして、御開山様にもずーっと仕えましてね。天皇折伏のため八十幾つで京都へ向われる途中、垂井まで行かれて、そこで亡くなつたのです。ですから、御開山様が、一闍浮提の御座主、日本中の座主であると、佛勅を下されたのです。

南無日道上人師・日行上人師等・御本山歴代の御正師・御威光倍増御報恩謝徳の御爲に。

これとちやんと揃つたわけなんです。代々の御正師様にお禮を申しあげるので

日布上人序 創價學會會長
日應上人序 戸田城聖監序
富士本智境著 創價學會版

俗 通 内 宗 意 大 答 問

明治三十年に發刊された本書を、読み易く書き下し、小平教學部長が若干の註釋を入れて再版愈々出來目下發賣中……

主な内容

○一致・八品・一品等の各派の所立を破す
○なぜ方便壽量を讀誦するか
○造像法・身延無間を破す
○大石寺血脈相承の正流嫡流なるを明す
○地區一括で秘書部宛申込み送り方法
發行所 精文館書店

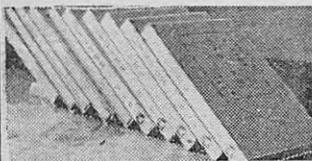
堀日亨 猯下虔修

富士宗学要集

第六回 相傳信條部 頒布中

- 第一回 既刊 疏釋部 日蓮大聖人の相傳書、日興上人及び上古富士門流先師の全著作を中心に宗門の歴史や他宗との問答等すべてを網羅し、邪宗破折の正義が明々とする。
- 第二回 既刊 問答部(一) 當代隨一の碩學・堀日亨上人が半生を打ちこまれ編集された至玉の大寶典
- 第三回 既刊 問答部(二)
- 第四回 既刊 宗史部(一)
- 第五回 既刊 宗義部(一)

申込頒布所、創價學會秘書室、その他發行所、富士宗學要集刊行會(山喜房佛書林)



見たり聞いたり 思つたり

竹 壽

秋田支部總會

五月十九日、秋田市スポーツセンターで
行われた支部總會は大へんにぎやかで、
潑刺たるものを感じさせた。遠く能代や毛
馬内等から集まつてきた大型バスが無慮四
十台、繪に書いたように、そして玩具を並
べたように、はるか彼方まで美しい一線が
引かれていた。伊藤支部長は、何よりもこ
の長蛇のバスが嬉しかつたらしい。大幹部
の顔を見るたびに、得意げに自慢してい
た。『このバスの行列を見て下さい。こん
なに一列に並べられるところは、秋田以外
にはどこにもありませんよ。むこうの方が
かすかんで見えないくらい長いですよ』

『へえ、なるほどね』
と合槌は打つたものの、實のところバスで
は別に感興はおこらなかつた。

『この頭の光つたおじさんは、一萬世帯達
成と、四十台のバスの並んだのと、どちら
が嬉しいんだらうか？』

と思つたが、次の瞬間、

『いやいや、結局同じことなんだ。懐に金
がたんまりあれば、汽車の旅も外の風景も
旅館の寝心地も何もかも楽しいんだ。一身

一念法界に遍しじやないか』

こんなことを自問自答しているうちに、
自分の方がはずかしい氣持になつた。そし
て、あらためて光つたおじさんに、心から
祝福の念をささげた。

支部總會も立派であつたが、その後の宴
會にいたつては他支部に見られない壓倒的
な力を感じた。美しく、のびのびと踊り、
歌い、舞う、秋田という獨特な國土世間か
らにしみ出る雲圍氣の中に、東京や仙台か
ら押しかけた來賓・幹部たちをも、完全に
その中にまきこんで、天界の空氣を満喫さ
せていた。特に女子部が優しい和かさの中
に積極性を持つつも、のびのびと青春を
謳歌している姿は、ちよつと他の部隊に感
じられないような力強い好感を持たされ
た。婦人部もなかなかよい。こんなことを
書くと、女性にばかりひいきするようであ
るが、男性は普通なので他支部に劣つてい
るわけでは決してない。それどころか幹部
陣が粒ぞろいであり變な人が見當らないと
いう點では、参加した本部幹部の異口同音
の感想であつた。秋田は將來性をたつぶり
感じさせる支部であることは間違いない。

もつとも、四月に二千三百も折伏成果を
あげて、鬼の首をとつたような調子するとき
ではあつたが、こんなときはほど警戒し
た方がよい。なぜならば、天界には魔も住
むからである。桶狭間の今川義元みたいに
なつては困るのである。秋田危し、といつ
てくれればよかつたが、ほめつ放しできたば
かりに、五月は三百しか折伏できなかった

らしい。千三百の間違ひであるように祈つ
たが、その甲斐もなくやはり三百がほと
うらしい。今總會をやつたら、この間のよ
うなすばらしい總會と宴會が見られるかし
ら。秋田支部さんよ、がんばつて下さいと
聲援する次第である。

十和田湖めぐり

秋田の帰りに、始めて秋田をおとすれた
I君と時間をつくつて十和田湖めぐりをす
ることにした。伊藤支部長さんと對馬地區
部長さんの肝入りで、十九日の晩はバスで
大湯まで行つて一泊した。對島さんは去年
から今年にかけて、腰の骨を折つたり、首
の骨を折つたり、生死の境を何度も往來し
た人である。コルセットをはめて身動きも
できない状態で、何ヶ月もすごされたのだ
そうである。私にはとてもできそうもない
ようなことをたえぬいて健康を取りもどし
た人である。信心強盛な對島さんが、そん
なことになつて苦闘しておられる間、疑い
を持つて退轉した人がきつといたことだろ
う。奥さんはどんなにつらかつたのではな
かろうか。對島さんの病氣を聞いた前々か
ら、こんなことを考えていたために、奥さ
んの顔を見たときには胸がふさがるような
思いだつた。だが、考えて見れば、信仰が
あつたから生きられたのだ、信心していな
かつたなら、恐らく死んでいた運命の對島
さんだつたのにながいがいい。宿命を打開し
た對島さんなのだ。こう考えると日蓮大聖
人の御言葉が思い出される。

『善につけ惡につけ法華經を捨つるは地獄
の業なるべし……』の御文である。これと
え忘れなければいいのである。

二年ほど前に、一度訪れたときの十和田
湖の色は忘れられない神秘的なルリ色の何
ともいづくせない美しさだつた。それを見
せたいばかりに親友でありかつ参謀室
長のI君をさそつたのだつた。詩的情緒豊
かなI君が何と十和田湖を見るだらうか。
この氣持は酒飲みが一人で飲むのは物たり
なくて相手をもとめて酒汲みかわそうとす
る氣持に通ずる氣持かもしれない。だが、
自分はずつと高尚な清らかな心根のよう
な氣もするが。

あいにくの雨でルリ色の十和田の神秘的
な美しさを觀賞することはできなかった。
だが雨は雨なりの詩情をそえるものであ
る。I君も美しいとほめてくれた。もつと
も深いところは三七八米……年中、湖水の
増減がほとんど見られないという。自分の
信心も十和田湖のように常に變らない信仰
をつづけたいと思つた。有名な高村光太郎
の彫刻になる二人の向ひ合つた女性の裸像
が、静かな湖畔に立つている。顔は奥さん
の顔で、體は奥さんの友人の肉體をモデル
にしたのだとI君はいつた。

青森にぬける途中の奥入瀬の溪流は二度
目ながらまつたく天然の美である。奥深い
八甲田の雪のトンネルをバスで走つたのと
對稱的な忘れられない思い出ではある。宇
宙の不思議さ、人生の妙、考えきれない思
案の中に、長い汽車に乗つたのであつた。

富士の裾野

(中)

聖教新聞社

主幹 石田次男

學會と保田妙本寺

昭和二十三年か四年から千葉縣安房郡で學會の折伏活動が始まった。その最初は現在鶴見支部幹事山本宗司氏の夫人が保田町の出身であるところから、同町の藤平あきさんを折伏したのに始まる。そのころの學



『日蓮正宗・本山妙本寺』の石柱も明らかに、4月26日、報告大法要行わる。

會は全國どころか東京でも微々たる存在であつた。そんな有様であつた當時だから、世間では學會の名はおろか日蓮正宗という名前すら知つていない。そればかりか、日蓮正宗の名前を教へても、聞いた方は身延の一本山ぐらゐにしか受けとらないという有様で、まるきりひどいものであつた。そして保田や勝山では(兩町は隣りあつてゐる)保田の妙本寺が本家で富士大石寺はその分家だなどと、眞面目に信じてゐる者さえある仕末で、その中で學會の折伏が始まつて、妙本寺の檀家である藤平さんが同寺と縁を切つて學會入りをし、町に折伏の息吹きが始まつたからたまらな

い。小さな町ではあるし、噂の傳わり方は早いし、當時指導に行つていた和泉覺氏(現江東總支部長)は、おつむの光で判断されて(?)大石寺の坊さんが洋服着て折伏に乗りこんで来た! ということ

にされてしまつた。『如來の現在すらおんしつ多し、況んや滅度の後をや...』金言空しからず學會の活動に紛然として魔が競い、當時、妙本寺の執事をしていた片寄海照という男が率先して正法誹謗をして廻り、これに池田某という地方の新聞記者が雷同して同町のある場所、どちらが正法か論判するということになつた。しかし、これはもともと新聞記者と片寄氏等の策動から始まつたことで、まともに兩者の意見を闘わすというよりも、片寄派がわいわい騒いで逃げ歸つたといふところまで、かえつてそれだ。こんなことがあつてから、かえつてそれだ。折伏の意欲が燃えあがつて、二三年後は地區を結成するまでに發展した。そして二十八年の初夏に勝山地區の第二回總會が開かれるまでになつたのだつた。

鈴木庄次船長

さて、この總會の後、中村輝世地區部長宅で、當然ながらもやまの話しの花が咲いた。そのころは私(石田)が小岩支部長に任命されたばかりの時、勝山地方には部隊長當時からしよつ中座談會を開きに行つてゐた關係もあつて、顔なじみの人が多く、ずいぶん色々な話が出たように記憶してゐる。その中に話しが妙本寺のことにふれて來、私が中村氏へ『この妙本寺は今邪義を改心して日蓮正宗に歸伏するのが本當なんだ』と答えたが、これを聞いて鈴木

庄次船長が非常に心打れたといふのである。(この話は昨年はじめて聞いた)このころから外國航路の船へ乗つたり、あるいは遠洋漁業の船長などしてゐたが、四十の聲を聞いて肺病をわずらい、不治の床について死をまつばかりといふときに折伏されて入信した館山市舟形町の人で、當時入信して間もなくだつたが(三ヶ月ぐらゐか)自分の體験でどんでん折伏して組を作つていた。船に乗ること以外は何も知らず、文字通り河童の岡上り、また肺を病んで重態の身では何の仕事もできるわけもなく、持前の剛氣を發揮して折伏だけを天分として二百世帯の館山班を建設し、四年間壽命をばして昨三十一年に死んだ。その日の朝『今日俺は死ぬぞ、この俺の死に方を見ておけ』と宣言して立派な成佛をとげたという風格のある人物であつた。今は亡きこの鈴木庄次氏が妙本寺歸入の端緒を作つた功勞者なのである。三十年ごろ鈴木氏は館山を中心にして猛烈な折伏を展開してゐたが、班長としてやつてゐた三十年の秋に、天羽町に妙本寺の末寺があることを聞きこんでこの寺を訪ね、住職鎌倉寛全氏に會つて紹介状をもらひ、鈴木、田中の二組長とともに妙本寺を訪問した。そして『妙本寺が今のようではおかしい、とにかく支部長に會つて話して見ては...』と熱心に説いた。そしてすぐその足で上京し、私のところへやつてきて妙本寺の眞首と會つてくれ

おうかがいして『會いましょう』と返事して鈴木班長に歸つてもらつた。

波亂の歸入經過

こうして十月の末に私が妙本寺を訪ねて貫首富士日照師と談合し、身延の謗法から始まつて廣布實現の時機、妙本寺成立以來の歴史等々順々と話し合ひ、富士門の清流に歸るべきだということまで意見が一致した。もともと同寺は舊本門宗の本山として日興上人の流れをくむ寺である。それが戦時中に日蓮宗統合問題の時流に流されて軍部の壓力で三派合同に加つたので、その當時の青木貫首は謗法の罪深くダビに付した際半分しが焼けず、そのまま埋葬するといふ大騒ぎがあつたことは前にのべた通りである。また近年の身延の亂脈は衆知の通りであり、これには富士師も深くいきどおるところがあつて同寺の現況をいさぎよしとしていなかつた折ではあり、身延と袂を分つて、富士の正義に歸つて妙本寺の行くべき道を開こうということになつたのだが、しかし、このような佛法上の正邪や歴史については何も知らない檀家や末寺の説得、身延と如何にして縁を切るか等々の點が最初から大きな問題として浮び上つてきた。もし、ここで一きよに話を進めれば、檀家の動搖は歸入にたいして大きな障害にもなりかねないし、また、その當時の同寺執事には以前問題を起した反學會の中心人物片寄海照その人が已然としてそのまま役についている、そこでひとまず一應單立と

いう形を取ることになつた。そして、これらの手續を進めようとする、はたせるかな片寄執事が急先鋒となつて檀家や近末の寺を扇動して反對のノロシをあげた。

こうしていろいろうちに、昨年四月、大石寺では堀米日淳院下が六十五世の法燈をお繼ぎあそばして御代替りの大法要が營まれ、ついに富士日照師は總本山大石寺に登山したのである。またこの直前、富士五山(大石寺を除く)で興門會議が開かれ、富士師はこの席で興門の在り方を説かれたという。そして、これに刺戟されて西山本門寺がやがて身延を離れて單立となつた。その後、片寄派の策動ははなはだしく、また身延からも盛んに説得やら妨害やらの手が伸びたが、どうにか六月月上旬に單立届出の手續きをすませるにいたつた。その後も片寄派はますます反貫首の旗色を強めて、御前様にだまされるな、といつて總代を一擧に十數名に増やして對抗したり、はては『竹槍で殺す』と富士師をおどかさすなままで飛び出したが、學會側が檀家の主だつた人たちと會つて、何度も話し合つていろいろうちに、固凝の氷も溶けて、興門の正義にたいする理解も芽ばえ、檀家の人たちの間にも大石寺に歸すべきであるという考えが流れはじめた。

捨邪歸正成る

こうしていろいろうちに、九月八日に正式に縣廳から單立の認承が下りた。想えば御座替りの時にはじめて宗務當局と富士師との會合を持つてから、ずいぶん波亂もあつたが、正義の戦いは必ず開けるとの確信通りになつてきた。これからも、學會と富士師と檀家の三者會談もしばしばあつたが、いつも和やかにわたがいに理解が深まつて行き、こうなつては例の片寄氏も手の下しよらもなく、妙本寺執事の任もしりぞき、替つて鎌倉寛全師がこの職についた。その後は割に順調に處理がついて、今年に入つて三月八日に舊保田系の門末會議を開いた



總本山大石寺に登山され宗務院に赴かれる妙蓮寺の漆畑尊能師(前)と妙本寺の富士日照師(中)

のが最後の結着をもたらした。この歸入問題には九州門末の中心日向市定善寺の小原日悅師が終始一貫努力を惜しまず、遠く九州の地にあつてよく日向七ヶ寺をまとめ、最後の門末會議でも積極的にこれを推進して歸入への大きな力となつた。

越えて三月二十五日、富士日照師は歸入の承認申請書をたずさえて東京に細井宗務總監を訪ね、妙本寺歸入問題もやつと日蓮正宗宗會で正式に取り上げられるはこびとなつた。この間學會側が助力していた半面、總本山でもたまたま先に大石寺に歸入した妙蓮寺の漆畑尊能師が富士師と親類關係にあつたことから、師を通して極力合同へ努力されてきた。こうして昭和三十三年三月二十八日午前十一時、總本山富士學林で開かれた第五十四回定期宗會は、廣布途上にある宗門にとつて畫期的な『本山妙本寺歸入に關する第三號案』が上提されて満場一致で可決した。つづいて翌二十九日に、富士師は檀家總代笹生一氏、川崎周氏、末寺の本願寺住職でもあり妙本寺執事でもある鎌倉寛全師等をもなつて總本山をおとすれ色々々と打ちあわせ、歸入には小泉の久遠寺へ立ちよつて同じく日蓮正宗への歸伏を促した。こうして鈴木庄次氏が最初のいとぐちを開いてから九一年半、同寺は一切の謗法を断ち切つて捨邪歸正の難事をしとげ、ついに日蓮正宗本山妙本寺として、廣布の大道に力強い第一歩を印したのであつた。

この宗會の日、九州定善寺の小原日悅師

は登山して、宗會席上信心の熱誠をのべられたことは先號に細井尊師の筆をお借りして報じた通りであるが、元來小原師は御隠尊堀日亨宛下との縁も浅からぬものがあり、今から約五十年前も前に堀上人が定善寺に寶物と古文書の調査に寄られて約一月ばかり逗留されたことがあるが、當時日悅師は小僧時代で堀宛下に御給仕申しあげたことがあり、以來堀下の御徳をしい奉つて時あることに大石寺にも參詣し、また、そうした關係から堀下の著述された書物も相當頂いているという。また日悅師の先師達も大石寺の遺風を慕う人が多く、したがって一時身延傘下に入つても常に興師の教風を守つて、現在まで六百数十年、清淨に板本尊一輦を持ちつづけて來、小原師の代になつても相當に折伏も進めて成果もあげている。また本山近末、九州の末寺等も引き續いて歸入の手續を進めているが、これに關して定善寺と對稱的な一つのエピソードを紹介しておこう。

正義に盾つくもの

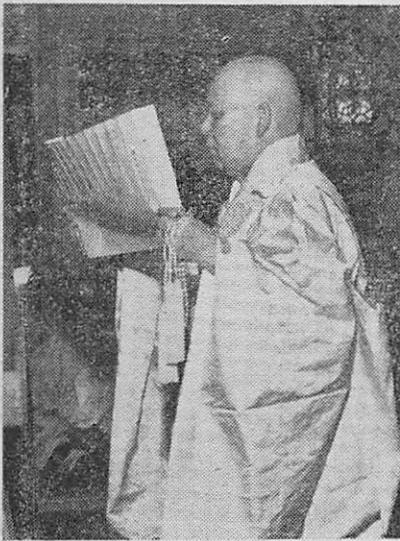
記憶の良い方なら昨年夏、宮崎市でつた身延との法論未遂の報道を御存知であろう。それは昨年七月下旬、宮崎市の上行寺から學會に法論をしかけてきたところ、あわてた身延當局から法論中止命令を出して「……公開法論の如きものは創價學會を相手としては無謀であるとの見解を取つておりますから至急中央の指令により中止すると申入れて戴き度いと存じます、取急ぎ御

返事申上ます。以上」と臭いものに蓋をしたために、立場を失つた住職が身延の態度への不満を理由として日蓮宗を離脱單立するという聲明を出し、法論變じて内紛さわぎとなる笑うべき脱線事故で幕切れとなつた事件である。これは元々上行寺の檀家が學會へ入つたところ、この紙田という人が上行寺住職工道海道氏にそそのかされて退轉し、この御本尊を返却するように矢野班長等三名が同寺を訪ねたことに端を發し、同住職はこれを法論に發展させようとしたものだった。そして各新聞にも宣傳して大々的に書き立てさせたが、結果は内紛騒ぎで恥をかいただけに終つたのだつた。

この上行寺は何と本來は日向の定善寺末だつたのである。ところが日向市はほんの田舎の小都市であり、宮崎市は當地方としては大都市である關係からか、寺の規模と檀家の數では上行寺の方が大きい、それに住職である工藤海道なる人物は佛法より世

法の方が好きのようで市會議員をしていらる。そして寺内は興門の氣風など一かけらもち合せがなくて、鬼子母神など魔の雜物を祭つたりしている有様である。この寺にしてこの住職あり……工藤住職は學會崩しにやつきになつた結果、遂に法論問題で面目玉を丸つぶしにしてしまつて、體面上からも、行きがかりの上からも、獨立聲明を身延にたたきつけざるをえないようになつた譯といつて可からしい。そして、その後、舊本門宗を糾合して大日蓮宗を作る！などと宣傳これ務めていたが、何ぞ計らんと、その當時はすでに本山妙本寺では正宗歸入へ努力の最中だつたのである。

さてこうなると「毒を喰わば皿まで」式にならざるをえないのだらう、妙な處へ騎虎の勢を發揮して謗法に重ねるに謗法をもつてする行爲に出た。即ち定善寺の小原氏が富士正義の根元に立歸ろうとして信心をもつて九州門末に呼かけ始めたところ、上行寺に據る工藤住職は世法をもつてこれの切崩し、および上行寺への統制へ動き出し、結局九州門末は信心中心の者は定善寺へ、不純謗法の者は上行寺へと眞二つに割れたのだ。こうして正宗への歸入を願つた側は年内には正式の歸入法要も終えて學會の良き折伏戦の法城とならんとし、片方は眞向から、これに敵對する



大御本尊様の御前に立つ晴れの富士日照師

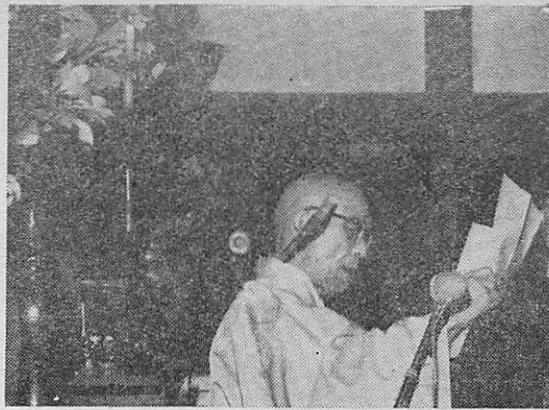
魔の法城たらんとしている。この有様はあたかも戦機をうかがつて對陣している野戰軍の姿にも似てゐるではないか。果して摩梨支天はいずれに組するや!! 誠に興味津々たるものを覚えざるをえない。聞くところによれば、工藤氏は昨年の騒動後罰を受けて何かあつたらしいということだつたが、今は正確な資料もないから、すべては後日の現證を待つこととしたい。

榮の奉告法要

さて筆を本筋へもどすと、こうして正式に歸入がすんで、去る四月六七日に行われた總本山御虫佛法要のとき、七日御影堂では御開山上人會が行われ、その後引きつづいて晴れて歸一の奉告法要が嚴肅に取り行われた。その時、長期にわたつて捨邪歸正の戦さを闘い抜いて大御本尊の御前に立つた富士師の聲は感激にふるえておられた。また續いて四月二十八日、宗祖日蓮大聖人立宗七百五年の嘉日、保田の本山と同じく奉告の大法要が管まれ、總本山からは御法

主上人堀米日淳宛以下宗務三役および第二布教區の御歴々が、また學會側からは會長戸田城聖先生以下大幹部諸氏が參列、それにこの日を期していた千葉縣在住の學會員が本堂はおろか庭にもあふれるほど参加し盛大に式は進められた。妙本寺の檀家の人たちも、この日は目を廻すほどいそがしく、その中でも和氣あいあいと學會員と交歡する風景も見られ、また妙本寺側の御僧侶たちの顔も、この日はかりは感激と喜び

をつつみ切れない面持ちと見うけられた。
式は新たに御安置された眞新しい御開山
上人の板御本尊を中心に進められ、その
後、宗祖大聖人御眞筆の萬年救護の御本尊
の御開扉が行われて無事式典を終えること



慶讃文を読まれる堀米日淳猥下



『万年救護御本尊』を奉掲の富士師

ができた。この發端を作つた鈴木庄次氏は
最後は地區幹事として折伏戦にてい身し
て、この盛儀に参ずる日をまたずにこの世
を去つたが、あの日から丸一年半のこの日
の有様を、きつと靈山會上より莞爾として
ながめていることであらうと信じて止まな
い。

最後に、この日に會長戸田先生ののべら
れた祝辭は、

「前略—その身延を止めたのだから病氣
が治つたみたいなものだ、だが、めでた
い。しかし、私の初代会長は病氣が治つて
めでたいという馬鹿があるか、病氣が治つ
たのは元通りになつただけだといつてい
た。それだから、ここ妙本寺の問題もめで
たいといつていいものやら、元通りになつ
て結構だといつていいものやら（一同爆
笑）まことにどうも言葉使いが悪くて：。
こういう風に私はいたい放題をいつてい
る男ですから、どうか氣を悪くしないでお
聞き願います。以上おわり」

というお話しで、満堂に拍手が鳴りひび
いたのであつた。（次號に續く）

誤字訂正

前號（七十二號）に校正の誤りがあり
ましたので、謹んでお詫び申し上げ、こ
こに訂正をいたします。（編集部）

頁段

誤

正

- 二〇三 伊豆の實成寺 會津の實成寺
- 二〇三 非道子法 非道謗法
- 二一 九龜城下 丸龜城下

大白蓮華



題詠『五月雨』

杉並支部 井上みどり
素晴しき夢と希望は客殿にさみだれの日
も工事は進む

蒲田支部 柿沼 高雄

五月雨の晴れんとしつ、松山の松のみど
りの色みずくし
足立支部 天野 太一

五月雨にぬる、灯佐渡カ島兩津の街も加
茂湖もけぶりて
足立支部 中村 富子

五月雨に背戸の菖蒲の花さきて海から山
から降りつゞきゆく
足立支部 伊藤 貞子

大白蓮華



大白の牡丹を卓に組座の輪
足立支部 高荻 美晴

菜の花やばげしき風に蝶すがり
母の日の娘に新樹濃し初登山
足立支部 海老原利吉

麥笛を吹く子等登山バス迎う
岡山支部 森本黄薇子

春火鉢なでつさすりつ法話きく
第一部隊 栗林 勝治

組座終えなじみの急須新茶さし
足立支部 海老原ヤイ

入信三夏わたまる、程むつまじく

足立支部 大賀 武

手術患者正法を説く花の午后

城東支部 野田勝之助

變毒の利益と臥せる彌生かな

統監のカード作成春燈下

向島支部 牧田 元一

題目に活きて退院木の芽の香

岡山支部 高田 久子

春の霧尾燈の赤さ深く消ゆ

花たわに散らずゆれいる今日一日

蒲田支部 増田 一布

總會の感激はなほ慈悲の化他

大白蓮華



松島支部 戸田 悦子

支部長の慈悲あた、かく胸をつき
信心の壁つき破る御書講義

入信に返り己心の魔を拂い

足立支部 大賀 武

師と膝を交えて組座灯がおほろ

善き教善き妻ありて春の月

母よりも上手で題目ほめらるゝ

獄を出て法難ですと活佛

仙臺支部 門間せい子

ドクン場になつて必死に唱題し

PTAパッチをつけた人があえ

正法と邪法火災でケジメつき

（以上、北條小枝子選）

ブロッツク座談會に出席して

原島 宏 治

ここ五ヶ月ばかりブロッツクの座談會に出席して、一般會員の指導の重要性をつくづく感じました。指導が行き届かないために、いろいろな問題でつまづいている人もかなり多い。ここによく出る問題をいくつかとあげて、参考にしたいと思います。

信ずるといふこと

御書を拜讀すると絶大な御本尊の功德をお説きになつた後に、よく『但し御信心によるべし』とか『叶ひ叶はぬは御信心により候べし』などと、但し書きや條件がしたためられている。

信心しているといつても、實に弱い人がある。こうした人は事にあたるとすぐ現われる。ちやうど、あわてものが誰だかふたんはわからなくても、地震でもぐらぐらつときたときに、すぐわかるようなものだ。目先きの功德ばかり願つている人は、いいときは馬鹿に元氣がよいが、ちよつとわが身に難がくると、たちまちにしまげてしまふ。また特別に何かあらわれた功德でもないと、ぐずぐずして、さつぱり歡喜もなく愚痴ばかりこぼしている人もいる。

大聖人が一生の生命をかけて御建立遊ば

された大御本尊に一點の疑う餘地もあるはずがない。この大御本尊を信じ、わが身にいたたく無量の功德を信ずるならば、たちまちに喜びもわき、勇猛心もわきおこるにちがいない。

現在病弱になやんでいる人も、その根本原因が判明するとともに、大御本尊によつて全治することがすなおに信ぜられるなら、ただちに生命は淨化され、心に大歡喜が生じてくるのは當然である。その力には病魔も抗しきれないのだ。たとい、みすぼらしいあばら家に住んでいても、かならず立派な家に入れることを信ずるならば、その家もすまい家にかわるにちがいないし、實際に立派な家に住めるような福運が積まれるのである。

『正直に方便を捨て但法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱うる人は乃至その人所住の處は常寂光土なり』との御金言のままに、樂しく信心をつづけていたものである。

折伏といふこと

御本尊を信じ自分自身に大きな功德を信ずることができるならば、おのずと困つて

が折伏行という形となつて現われる。また逆いふならば、折伏することこそ、御本尊を信じている證據なのである。元來われわれは御本尊をいたたくまでは、御本尊をけなしつづけてきたことになる。今南無妙法蓮華經と自らとなえることは、そのざんげとともに御本尊を讃嘆したてまつることになるのである。その上さらに人をしても讃嘆せしめることは大きな功德であるとともに、これ以上の大善行爲はないのである。實に折伏は學會の大使命であり、眞の幸福は折伏以外にないといえる。

折伏してもまともまらない

以上のように、折伏は大事なものであるから、常に怠らず行はずべきであるが、よく泣き言を聞く。それは『折伏してもまともまらない』という歎きである。保険の勧誘ではあるまいし、まともまらないからといって自身の損にはならない。むしろ相手は御本尊との縁を結んだのであるから、かならず救われるのだ。信じても誘しても救われるといわれているのだから、自らの功德のためにも、相手のためにも、大いに喜ぶべきことなのである。もちろん折伏の方法については、上手、下手もあろうが、これは研究して上達するように心がければよい。それと根本は折伏することによつて會得する以外にはないのである。

折伏と生活

折伏についてよく問題になるのが、自分

の商賣をほつたらかして折伏に歩いたり、また、そうすることが功德があるように思つている人があつたが、これはもちろんいけない。信心・折伏生活といつたところで一體なものである。折伏にはげむ力が、そのまま生活力の向上となり、生活力の向上が、折伏の原動力となるのである。自らの生活はでたらめで、口先で折伏しようとしても、うまく行くものではない。

このことについて、私はおもしろい話を聞いたことがある。それはある自轉車屋があつた。この人は信心をもつてとでもうれしくなつて、仕事も楽しくできるようになり、能率も上るようになった。毎日楽しく自轉車の組立てや修理をして、いろいろのお客に接していた。その中には、いろいろの人がいる。子供のことで困つている人や、病氣で困つている人、金で悩んでいる人などが愚癡をこぼしたりする。そのとき、その自轉車屋は近所に住んで佛法のことをよく知つている人を紹介する。本人にとつては、自轉車屋の元氣な姿と、その人の話によつて案外すなおに人信する。こうしたことを繰り返すことによつて、多勢の折伏もできたし、自轉車の仕事も繁昌した。こうして簡單で効果のある折伏をつづけたのであるが、やがて、この自轉車屋が、折伏も商賣もうまく行かなくなつた。それは、だんだん自轉車屋もいろいろのことが分つてくると、自分で話をして相手を納得させてみたくなつた。そこで、お客がくると自轉車の仕事はおつほらかして理論め

いたことをいうようになった。相手にとつてみれば、なんとなく不安な氣持がして入信する氣にならぬ。お客はだんだん減るようになった。それで折伏も以前のようにうまくいかないし、商賣がダメになつていつたのことである。

折伏は學會員のだけれども、功德をうけるための根本である。しかしながら、そのあらわれる形は、その人その人の實情に應じて異なるのが當然と思う。皆それぞれの立場に應じて、もつとも自然に楽しく、しかも効果のある方法を、とつていくべきである。形を一定しようとするところに無理が起り、かえつて次第に折伏意欲を減退させる因をつくつていくように思える。

多くの學會員が、それぞれの能力や立場において、勇敢に楽しく折伏行にはげみ、そして、たがいに協力しあつて、困苦にあえぐ民衆を救わんとするの念願に立つならば、廣宣流布の大願も、かならず成就できるものと信ずる。

功德の現われ方のいろいろ

折伏にはげむ者に功德のないはずは絶対にない。ただその人の過去世の宿業、宿縁等によつて、早いものあり、遅いものあり、目に見えるものあり、目に見えないものあり、さまざまである。また體驗等を聞いていると、火事でまわりがみんな焼けてしまつたのに、自分の家一軒だけ焼け残つた話があるかと思うと、自分の家は焼けたのに誹謗している隣りの家はなにことも

なかつたなどと、まるで反對の場合がある。こういうふうには、さまざまであるが、結局、御本尊を護持する人は全部救われるという事は佛の御金言であるとともに、ちよつと長い目で見るときには、いささかのくるいもなく明瞭な事實となつて現われるのである。

過去世以来の長い謗法を思えば、私たちは無間地獄に墮ちるべき罪業の持主である。それが護法の功德力によつて軽くうけるのであるという事は御書のあちこちにお示しになつてゐる。『法華經の信心は冬のごとし、冬はかならず春となる』とお言葉を楽しみに、あらゆる魔に屈せず、將來の大利益を願うべきです。

一家の中の反對

ブロックを歩いて、かならず聞かされる問題は、一家の中に信心に反對な者がいて困つてゐるといふ話である。そのうち、もつとも多いのが、奥さんが信心して主人が反對であるという場合である。こうした問題は御本尊をいただくとき無理があつた場合もあるが、それは今後折伏し御本尊をいただくとき氣をつけるとして、ここでは奥さんの心がけについて考えて見る。

多くの場合、奥さんは、主人のいろいろの行跡にばかり心をとられて泣き言をいっている。やれ主人がちつとも働かない。競争にばかりこつてゐる。他に女がきたなど。したがつて御本尊を拜むにも、自分につごうが悪い點をなおしていただきました

いことのみを願つて、主人の信心を心から御本尊にお願いしようとしなさい。御本尊をいただいたことは、すでに一家が救われる道が開けたのだ。あとは主人が信心をまともにしさえすれば幸福な家庭が築かれるのだ。大事な主人が謗法であつてはならない。早く信心できるように、御本尊にひたぶるにお願ひする以外にないと、心を定めることが大切だ。そして御本尊がかならず救つて下さることを信するならば、奥さんの心も明るくなり主人にたいする態度も自然に變つてくることと思う。

これについて感心な奥さんに會つたことがある。それは大きな機屋を經營していた人が倒産して、一切を人手に渡し、自分たちは昔女中をおいた部屋に住んでゐる人である。その上、主人は右手を失ひ、いらいらした氣持で暮してゐる。自然と奥さんにもあたる。暗い地獄の生活の中で、まず奥さんが信心することになつた。この奥さんが最初に決心した。機屋がつぶれたのも、主人が手を落したのも、現在主人がいらいらしているのも、もとはといへば御本尊がなかつたからだ。幸い自分は御本尊をいただくだけだ。あとは主人が信心さえすれば一家は昔にも増して皆幸福になる。だから自分は小さな願ひは一切止めて、ただただ主人の信心のみを向う一ヶ年間お願いしつづけようといふ決心したのである。生き生きとした奥さんの信心と主人にたいする明るい態度とによつて、願ひ通り、主人は一年以内に救われたのである。御本尊を信じきつた人の

まごころが通じないわけではないということをつくづく感じさせられる。

教學と信心

ブロック講義に出ている人を聞いて見ると、非常に少ないのおどろく。せつかく地域的に講義の會場をもうけて、便利になつたわけであるが、出が少い。これはいろいろの理由はあるが、何のために教學はするのか會員にもわかり、講師も自覺して臨むなら、もつと盛りあがることと思う。どうして出ないかを聞いて見ると、むずかしいからという人が多い。むずかしいといへば誰でもむずかしい。しかし教學はおぼえるためのものではない。信心を深めるためのものである。學會の發展も教學によつてゐることは事實である。

よく會長先生の講義を聞いてきた人が、よかつたよかつたというので、どんなことを聞いたのというと、みんな忘れたが、とにかくよかつたという。おそらく自分の拜んでゐる御本尊のありがたさを、改めて深く感じたためであらうと思う。忘れたといつても、その内容は自然に心にきざみこまれて、その人の信心は深まり、事にあつても動じない確信が、だんだんと高まつてくるものと考えられる。

縦の組織においては、できるだけ教學の必要とその目的を會員に意識させて、ブロックの講義に出席するような心をくばつていただきたい。そうすることが、縦の組織の充實強化にもなることは當然である。

男子青年部の歩み (二)

— 新部隊員の指針のために —



青年部参謀室長 池田大作

◇ 立宗七百年 ◇

意義ある一年の歩みは、十年に優る。かくて、宗教革命を誓う男子青年部二百名の闘争は初登山より始まつたのである。

立宗七百年(昭和二十七年)は、日蓮正宗においても、わが創價學會にとつても、そして、また、男子青年部においても、旭日のごとく大發展をいたす、まことに大事な闘いとなつたのである。



池田参謀室長

古くは、第三十代、欽明天皇十三年に、百濟の聖明王より初めて、わが朝に佛教わたる。建長五年四月、日蓮大聖人立宗を御宣言あそばされるまで七百二年であつた。また、奇しくも宗旨建立より、七百年の今日、人類救済の大折伏法戦に、怒濤のごとく進軍するわが學會の現出は、佛意佛勅といわずして何といえようか。

思うに、在世の釋尊は妙法蓮華經の五文字にのつとり、禪定・解脱・讀誦・多聞・堅固等々、五百年を區切りとして、佛法流布を成したもうか。末法日本國に御出現の日蓮大聖人様は、南無妙法蓮華經の七文字によつて、七百年の區切りをもつて、深祕なる佛法の、廣宣流布の時と成したもうものか。凡夫のわれらには、はかり知ることはできない。

また、大聖人様は、立宗宣言のその日より、二十七年にして出世の本懐たる法體の廣宣流布を成したもう。

今また、會長戸田先生は二十數年にし戒壇の建立すなわち化儀の廣宣流布を斷行すると絶叫あそばさる。單なる理想でなくして、事實の確信であられるのだ。當時の先生の一言一句、耳染に残つて忘れえない。

『廣宣流布は俺がやる。誰にも頼まぬ。もし廣宣流布ができなかつたらば、この身を品川の沖に葬れ』と。

側近の弟子等は、この大確信に、ただただ先生のお側について、未だ廣宣流布せざる間は、身命をとじて随力弘通せんの決意を深めていつたのであつた。

ああ、いづくにか、かく正義にもえて指揮をとる指導者がいようか。

智ある者は見よ！ 心ある人は聞け！ と叫びたい。しかるに、『世皆正に背き人悉く惡に歸す』(御書一七頁)の大聖哲の御豫言のごとく、正しく現實の宗教界、思想界は、企業に走る宗教あり、形式偽善の宗教團體あり、畜生にもにたる思想、そして指導者の世界なのである。

われらは斷じて、會長戸田城聖先生をお護りしなくてはならない。世界に唯一人の大指導者、戸田城聖先生を。

法華初心成佛抄(御書全集)に、『祈りも又是くの如しよき師とよき檀那とよき法と此の三つ寄り合いて祈りを成就し國土の大難をも拂ふべき者なり』と。

良き師とは、日蓮大聖人様であり、代々の御法主上人猊下であらせらる。

良き法とは事の一念三千・南無妙法蓮華經の大御本尊様の御事である。

良き檀那とは施主と約し、これ會長戸田先生のことなのである。

御金言に照し、學會につかずんば成佛の道なし救國の法もなしと斷言するものである。

所詮、會長先生の言々々々を、わが身に實踐し、體得するところに眞の青年の信心があり、建設があり、向上があると信ずるのである。

かつて、北海道大學に教鞭をとりし英人クラーク博士は『青年よ大志を抱け』と不滅の言辭を青年にあたえたのであつた。

今、會長戸田先生は『青年こそ國の柱であり、國の眼目であり、國の大船である』と一國救済の信頼をばわれら青年部員に依存下されたのである。

恐るるな佛の力は偉大なり

若き血潮にたぎらせて立て

これは立宗七百年、先生より青年に下された歌である。この先生の御期待にそうべく、青年部は勇躍闘争を展開するのであつた。

◇ 研究發表會(教學) ◇

二月に入つて特筆すべきは、青年部の劃期的な教學の振興をはかつたことである。

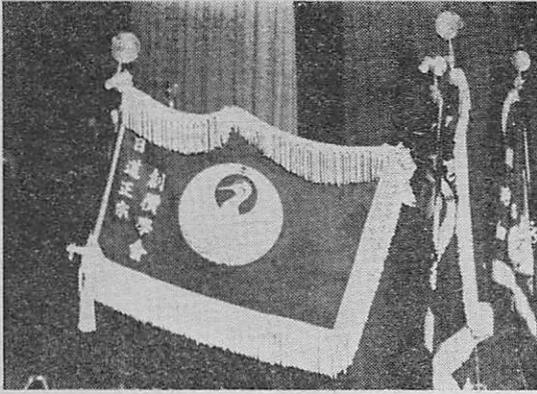
常に會長先生はおおせられる。『教學は信心を深め、信心は教學を要求する』と。また『勉強せぬ者はわが弟子ではない』

と、綱の結束を深めゆくのであつた。そして、それを二倍三倍の推進力として、また未來を夢みて奮進したのであつた。かくて、四月度男子部會においては、四部隊合計二六四名の新部員の誕生を見たのである。

故に三月末現在、部員八九七名となつた。

◇對キリスト教討論會◇

三月二十六日より二十九日にかけて、キリスト教との討論會がもよおされた。これは後日の小樽法論とともに、青年部にとつても異彩を放つ、歴史の一頁となつたことはいふまでもない。



昭和27年4月、學會旗が制定され部隊旗、支部旗が授與された。寫眞は本部旗。

常在寺にて二日間、代々木八幡の教會にて二日間、一對一で連續四日間、青年部よりは石田次男部長、キリスト教側にキヤノン氏が討論に立つた。

石田部長は、次の諸點より破折し始めた。

一、宗教は生命の問題であり、生活の問題である。斷じて精神のみの問題ではない。

一、宗教上の主張は理證を具足しなければならぬ、そして科學的でなくてはならない。これより宗教に淺深正邪がある。

これにたいするキヤノンの主張は、小乗教の見地より反駁し來り、どうしても質問の要點よりはずれて残念であつた。しかし、彼らの云く、

『これほど理路整然と主張する佛教には驚嘆した』と。すべて準備がととのわず、特に報道關係に連絡できえず、外國方面には紹介されなかつた。殘念にも日本に報道されなかつたことは、實に惜しいことであつた。男子部一同も連日應援に會場にいたり、キリスト教信者を壓倒したことは愉快なことであつた。

◇學會總登山◇

四月二十七日、二十八日にわたり、宗旨建立七百年記念慶祝大法要が本山にて舉行された。

會長先生を始め、十三支部、四部隊も大法要に参加する。本部旗、支部旗、部隊旗はこのとき初めて全學會員の眼に映じたのであつた。

宗門の興隆、學會の大發展とともに、前途洋々たる青年部も生氣に満ち満ちて、廣布の誓いを新たにしたのであつた。

數百名の男子部員は、ふたたび牧口先生の墓前に詣で、今ここに、この男子部の進軍の誓いが、幾萬、幾十萬の若人に通ずることを誓つたのである。

この夜(二十七日)戰時中、神本佛迹論を唱え、牧口先生を牢死せしめた、小笠原慈聞氏を發見し、青年部四十七名がこれを強折し、狸祭りを行なつたことは、あまりにも有名なことである。

このことは、その後しばらく一部僧侶との間に紛糾を重ねたが、三大秘法の大御本尊様まします聖域より、謗法者を驅逐したということ認められ、かえつて、僧俗一體の上に立派に變毒爲藥したのであつた。宗旨建立七百年記念大法要中の一大事件として、永久に忘れえざる、破邪顯正の範となつたのである。

◇立正交成會總攻撃◇

明治維新の勳皇の志士は、幕府を敵として、幾多の尊い犠牲を出しつつも、勇ましく戦いつづけた。共産主義はこれまた資本主義を敵として、一大闘争をあらゆるところで戦つてゐる。

われら學會男子青年部は九月ごろより魔の宗教、戦後最大の新興宗教たる立正交成會に、大折伏の矛をむけたのである。

夏期講習會後、各部隊は、指令によつて、交成會支部の攻撃に入つた。支部單位の折伏では要をえぬ段階に入り、ついに本部に波狀攻撃をなした。これまた宗教革命史にのこる多大なる戦績を収めたのである。次に各部隊の状況を當時の新聞によりふりかえつて見よう。

石田部隊 十月十二日、交成會御會式本部折伏、正午本部に行つて二名一組で道場、廣場等で交成會信徒相手に折伏、一時間引きあげ、話しに眞劍な者は中野教會に連れてきて、しつくり話しをするという方針で進んだ。大體豫定通り折伏進行中、妨害がはげしくなり、せつかく話しているものを、幹部がきて連れて行く上、警察へ連絡して中庭に警官が人垣を作るといつた状況。

北條部隊 十月十八日、獨自の立場から交成會の周圍の街路で、歸路につく信徒を相手に折伏を進める。本部内で折伏するのと違い相當効果あり、二名以上、グループとなり行かう。折伏は話しをして、眞劍に求める人は住所をひかえ、後に訪問を約して次の人々に移る方法。しかし本部備えつけのマイクで『魔が來ているから話し合ふな』と放送、歸りの信徒には全部首に珠數を取らせ、幹部總出で自轉車やスクーターで本部近邊をぐるぐる廻つて、信徒をムリに連れて行くといふあわてぶりであつた。

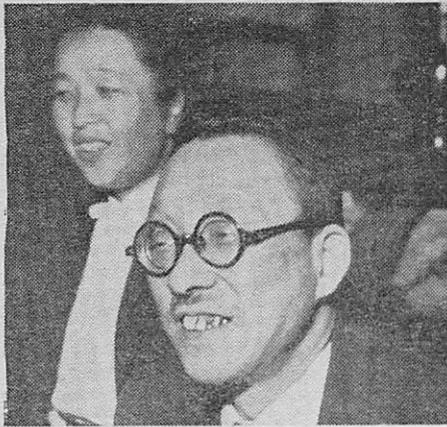
邪宗退治の雄、龍部隊も同じく交成會總攻撃に華々しい戦果をおさめた。森田部隊は同系統の孝道教團を全部隊をあげて強折した。

學會の正義、法力におののく交成會は、卑怯にも警察に依頼、實に恐るべき邪法の實體をさらけ出したのであった。

ここで青年部は、受けるか逃げるか、十月十日、青年部長、男子部長の連名にて、會長庭野日敬へ、法論要求を送付したのである。それは十月三十日までの返答を條件として……しかし最後まで彼らよりの返書はこなかつたのである。

法論要求趣意書（一部抜萃）

惟えば七年前、我が國未曾有の大敗戦を蒙りしよりこのかた、朝野をあげて國民の道義は地に墮ち一國の政治は亂れ……ここに國の前途をうらうる我等、信ずべく尊ぶ



戸田先生と柏原指導部長（御客殿で）

べきは御佛の金言のみ……

唯南無妙法蓮華經の七文字の唱題の聲のみ朝夕に盛んにして日本一國に満ちて、然れば如説修行抄に御教示あるが如く、代は義農の世となりて現在安穩疑うべからず、太平の樂土をこそ見るべき道理なるにも拘わらず現實は之國に加ふるに國民の苦の泰山を越ゆるを見るとは……天下の不思議これに過ぐるものなし、ここに不審を致して再び眞文を拜見し奉るに「文はまつげの如し近しと雖も見るあたわざるなり」と給ふ。

依つて再び現實を觀察するに世は日蓮門流の教義蘭菊たり……

すみやかに誹法の一凶を禁じて天下の静謐を願わんが爲に我等は貴立正交成會に對し法の邪正を決定せんが爲の法論を求むるものなり。貴會に眞の菩提心を期待するが故に來る十月三十日迄に御返事たまわり度く、以上。

法論、要求の趣意了とせられん事を願う
敬具

これらによつて、青年部の大破折を受けた交成會は力をぬかれ、これを頂點として衰微の一途をたどりはじめたのである。またこれが導因となつて、三年後に讀賣新聞の攻撃をくらい、内部の腐敗は、さらに國會の法務委員に糺弾されるにいたるのである。

かくのごとく、正法に敵對した交成會は嚴然と佛罰をこうむつたのである。

（次號に續く）

▽青年部員に與う△

青年訓について(1)

これは當時の「班長に與える」として出されたもので、また青年部全員に與えられたものです。班長は何んといつても中堅幹部であり、班長がわかれば班員に意志をしみこませることができ、戸田先生が班長をみな、將來、東洋の指導者にさせたいと思ふ慈悲の一念であります。

青年訓は青年部員の信心修行、師弟相對全體がふくまれていて青年部員の指針である。従つて青年訓のための青年訓であつてはならない。これを自覺して實行しきる者が眞の先生の弟子・子供であり、親衛隊であるという意味がふくまれていいます。青年訓を實行できないような青年は、戸田先生をけがすことになるのです。師匠が偉ければ、弟子も偉くならなければダメだ。眞の俺の弟子はかく育つてゆけ」と教えられておられるのです。闘争に疲れ、行きつまつたとき、私は青年訓を思い出し、人にもこれを教えている。

さて最初に、「新しき世紀を作るものは青年の熱と力である」とありますが、

「新しき世紀」とは、廣宣流布された時を指し、東洋佛法の眞すいによつてうち建てられた寂光土のことです。また「青年の熱と力である」とは、われわれ學會青年の信心からほとばしり出た情熱、教學で養われた自己の力、また團結の力で

ある。そして第二段には、學會の目的は廣宣流布以外にない。大きく論ずれば、歴史的流れからみても東洋の文化國家の建設、世界の平和も、末法の御本佛日蓮大聖人様以外に斷じてできない。すなわち、個人々々の宿命打開・幸福生活の確立も日蓮正宗以外になく、これを示してゆくのは、われわれ青年しかないのだといわれているのです。

第二段は、佛法の方程式の上から、われわれ青年に自覺をうながされている。在世の法華經流布は、舍利弗等の當時の若き青年部員によつて行われ、末法も大聖人門下、日興上人を中心とした青年によつて弘通されたのではないかと。そして、「東より西に向う大聖人の佛法も云々」とは、實踐の上から化儀の廣宣流布をかながみて、學會青年部の力によつて東洋廣布へ乗り出せということ。第三、第四段は、そのまま自分の身に實行してゆけばよい。

第五段で、「廣宣流布の時は近く」とあるが、化儀の廣宣流布の時は近いのだ。後二十數年後に、廣宣流布をひかえているとは、戸田先生の大確信であり、佛法上の方程式なのです。題目流布が終り、現在本尊流布の眞つ最中です。學會が今年八十萬世帯の折伏をやるうとするのがこれをあらわしているではないか。

（聖教新聞に掲載の池田參謀室長訓話よりの抜萃）

三世諸佛總勘文教相廢立の拜讀

題號について

司會 三世諸佛總勘文抄を今第九期の候補講義でやつておりますが、非常にむずかしくて、講義を擔當して教えている者もなかなかやりにくいという聲があります。この前、どなたかが會長先生に、總勘文抄の講義についてお伺いしたところ、「あまり字句にとらわれて、大綱を見失つていやしないか」とおつしやつていたそうです。今日はお忙しいところお集り願ひまして、總勘文抄の全般にわたり座談の形で研究したいと思ひます。最初に、題號についてお願ひいたします。

石田 三世諸佛は、そのままでもいいでしょう。三世とは過去・現在・未來ですから……。

辻 三世諸佛總勘文とは、三世の諸佛、すべての佛様が、一同に考え、そして決定されたところのものはこれだ、根本は妙法蓮華經の法しかない、教相廢立といつて、方便の法を捨て、眞實の法、價値の高い法を立てるのであると、化他方便はダメで、自

行眞實の法は釋尊の經典では法華經だと――。しかし、大聖人様はそれを通して、三大秘法の南無妙法蓮華經ということをとえず心に置いて説いておられる。あらゆる佛様が、一人も残らずこれだと決定されたものが妙法だと、これを強くいひあらわすために、説かれたんじゃないでしょうか。

小平 三世の諸佛が一同に教相を廢立するといふわけですが、又われわれの立場で拜すれば三世諸佛の一切の教えを大聖人様が教相廢立され三大秘法をお立てになるといふことにもなる……。

池田 兩義にわたりますね。
辻 別々のものではないね。

石田 要するに大聖人様は、爾前を捨てて法華經を取れとおつしやるわけですが、その御意見というものは大聖人様一人の勝手な意見ではない、三世諸佛の總勘文である。それによつて立てられた教相廢立、自行の教と、化他の教との廢立が、こうなんだとおつしやつているのだと思ひます。三世諸佛の萬機一致の公義だといふようなことですね。

司會 この前、「三世の諸佛は全部、始めに化他の教を説いて、後で自行の教えを説くが、大聖人様だけが、化他の教を全然説かないで、最初から、自行の南無妙法蓮華經を説かれるのはなぜか」という質問があつたのですが……。

石田 それは、垂迹の佛と、本佛との違いでしょう。

小平 垂迹の佛はみな、應佛昇進の佛で五時八教を説いて顯本するわけです。

小平 弘安二年の御著作ということとは、心ずしもはつきりしないわけですか。偽書説なんつてもあつたのだけ。

辻 富木常忍に與えられたものだということを主張する者もある。

小平 それに向うの目録にないという……。

辻 宛先は誰れだと、はつきり斷言できないわけですね。

池田 弘安二年十月十二日、大御本尊様の御建立と關係ありますか。

篠原 關係あるように、先生がおつしやつていたら、伺つたことがあります。

石田 恐らく、教相面の最後の決定線でしょう、關係があるんじゃないですか。

篠原 そのときの御境涯を、そのままここに頼むしになつたのだと伺いました。

辻 これを拜讀してわかる人なんていうのは、まあ恐らくないと思ふんだがなあ。

池田 論法がまた、ふつうの御書と違ふもの。

小平 當體義抄の最蓮房とちよつと似たような處があるね、理論的で、天台のことが多くて。

爾前と法華―夢とうた。

司會 次は文段毎にやつてゆきたいと思ひます。

第一段は、始めから、五五九頁の十一行目までなのですが、これは手引き（大白蓮華第六八號）に書いてありますように、一代聖教を、四十二年の爾前經と、後八年の法華とに分けて、爾前經は化他であり、法華經は自行であり、爾前は權經であり、法華は眞實の實教である、爾前は夢で、法華は寤である。爾前は九界の生死であり、法華は常住の佛界を説く。故に無量義經には「四十餘年未顯眞實」と説いてみると、このような大意です。

篠原 始めからやつてゆきますと、始めて自行と化他といふことが出ております

出席者

- 辻 武壽 石田 次男
- 小平 芳平 池田 大作
- 大川 清幸 篠原 誠
- 諸富 文紀

(司會) 多田省吾

が、この場合は、よくわれわれが、自行化他の信心という場合と、非常に違うように思えますが……。

石田 われわれがふつういうときは、行に約しているのでしょうか、ここは教に約しているのです。

池田 教門の上でいう自行化他と、修行の上でいうそれとの違いだな。

司會 そうすると、ここは、六巻抄に、本地自行の南無妙法蓮華經佛と、垂迹化他の五百塵點劫の釋迦なんていう場合の自行化他と同じですね。

辻 釋迦の佛法で分ければ、四十二年の彌前經が化他になつちやつて、法華經が自行になるわけですね。

池田 大聖人様の場合、御本尊の當體たる大聖人様それ自體が、自行化他にわたる振舞になるでしょう。

辻 そうですね。法華經は、正直捨方便だから、それ自體がもうすでに自行になるわけでしょう。彌前經は、化他のためにわざわざ方便を現しているのだから……。

司會 その次に問題となりましたのは、「性・殊なること無しと雖も……」という釋籤の文なのですが、この解釋をお願いします。

石田 要するに、大綱としてはですね、權實ということの問題にしてるわけでしょう。彌前にも權實という言葉があるし、法華經にも權實という言葉があるわけですね。その權實は、名前が同じでも、彌前という權實は、ほんとうの權實ではないとい

うのです。

池田 このところは、「性・殊なること無しと雖も」法性心性というものが殊ならない、十界互具というようにとつてもいいのですがね。權の方を九界にとつて、實の方を佛界にとつて、その九界といおうが、佛界といおうが、權の働きといおうが、全部、法性から縁によつて現われるものであると。

小平 性は殊ならないけれども、幻によつて起きる場合には、幻の佛様と、幻の衆生が說法をし、說法を聞いて……。

池田 幻を權教ととるわけですね。司會 そうすると、能應が實になり、所化が權になるわけですね。

石田 そう、しかし、幻の場合はそれがほんとうの權實じゃないのだというのです。だから次に、「前の三教の四弘・能も所も汎す」といつている。性・殊なること無しと雖もといふのは、幻のような状態を起している心と、覺めているときの心とは、その本體實質には變りはない、だが、その本體實質から起つてきた幻のような状態のとき、幻のような佛と、幻のような衆生とがいてもそれは權實ではないというわけですね。

辻 並びに權實に非ずといふことは、幻のような佛と、幻のような衆生があつて關係しているわけですが、それも、幻とか實だとか分けられないものなのだというような意味もあるのでしょうか。

司會 それは次に、「夢の中の虚事と寤

の時の實事と二事一の心法なるを以て見ると思ふも我が心なりと云う釋なり」と仰せられてゐるのに當るのですか。

池田 妙法蓮華經の本體から見れば、權とか實とかきめられるものではないのだと。四弘の誓願といふのは、藏通別圓に一貫してあるのです。藏教は藏教で、四弘の誓願をたてていたわけですね。

小平 どつちかというところ、主體は菩薩の別教じゃないのですか、もちろん佛教では、こういう誓願がなければ、佛道修行そのものが成り立たないから四教にわたるとしても聲聞なんていうのは、衆生無邊誓願度なんていうのはなかつたわけでしょう。衆生を救うところか自分のことではないだつたから……。

池田 聲聞は灰身滅智ですからね。しかし、一應はあるわけですね、前三教の四弘といふのだから……。

石田 なんでも、菩薩になれば、みな四弘誓願を立てるんでしよう。

辻 舍利弗だつて、釋迦の弟子になるからには、佛になろうつていう氣があるわけだがなあ……佛になれないといわれ、號泣したというのだから。

池田 われわれが信心してゆくべき目的も、四弘の誓願になりますね。

石田 經文に十二願だの、四十八願だのと出てきますね。ああいうのは全部、四弘誓願を基本にして立てられたのじゃないんですか。

小平 そうでしょうね。根本は四つだらうな。四弘誓願が基本になつていて、自分に當てはまるように具體的に立てたものでしょうね。四弘誓願を總願といい、菩薩のそれぞれの誓願を別願ともいつている。

池田 九界を權となし、佛界を實となすといふことは、ところどころによつて出てくる文だから、覺えておいた方がよいですね。

司會 それから、三重祕傳抄なんかに出てくるのですが、十界の因果といふのは、九界を因として、佛界を果とするところの因果であると……。

石田 それは、九因一果です。一應の因果で、再應は、一因一果になるわけですね。その九因一果といふのは、文上の經文にも論じられていて、當體義抄の文段にあつたですね。一應は九因一果、再應は一因一果と。九因一果の方は、九界を因として佛界を果としている。一因一果の方は、信心は唱題の因、唱題は信心の果、これ佛界の因果なりと。また、願意は惡口の因、惡口は願意の果、それは地獄の因果であるとあります。

小平 夢と寤といふのは問題でなければ、俗にいう「夢か寤か幻か」なんていう場合の語は、やはり覺めるときという意味なのかしら。

辻 寤つていふことは、覺めることなんだよ。その場合もそうだ。

池田 寤つていふのは現實ですよ。だから、覺めてるのか眠つてるのかわからない

ぼーとした状態のときに、夢か寤がなんて使うわけです。これはよく質問がありましたね。

實際問題として、信心しなくて、自分の人生観がはっきりしていない生活状態は夢ですか。

小平 謗法時代の生活は夢ですね。

辻 競輪、競馬なんか夢中になつて騒いでる連中は、夢みてるようなものだね。

石田 赤旗をふり廻している連中なんかね。あれは、本人たちは本気でやつているつもりだから、夢の蝶において賣の想いを生ずるか……。

化他の法門の大綱

司會 では、第二段をお願いします。六一頁の十一行までです。

石田 ここは、化他の教の大綱ですね。

司會 大意は、化他の法門の有様を大略して説かれている。修行に約して爾前の有教無人、夢中の權法であることを論じ、爾前權教をもうけたのは、あらかじめ法華經で開會せんがための佛意であつたと説明されておられます。

池田 灰身滅智の處がややこしいな、あんまり、われわれに關係ないことなんだから。

辻 灰身滅智ということは、そういう状態に生きてきたままでなるとだつてね、戸田先生がおつしやつたのだが、灰身滅智の状態にこのままでなると修行をするのだと。

池田 現實には、どういふ姿ですか。

辻 そう、使ひものにならないような人間になるのだから。人が死のうが、何しようが、何んにも氣にしないような……(笑)

石田 そんな者になれるんでしようかね、一體。

池田 絶體になれない。

辻 なれないことを説いたのだ。

小平 日露戦争が終つて、ちよつと經つてから、「日露戦争なんて、そんなのいつあつたんだい？」なんていつた學者があつたそうだが……(笑)

大川 ひどいもんですね、學者なんていうのは……。

石田 金光教の神様なんていうのは、これに近いかも知れませぬ。黙つて坐つていて、一日中、みんなに拜まれてるそうだ。

小平 折伏をされてもね、尻理屈ばかりいつて、自分は學者だとか、自分は商賣やつてどうなるか、そんなことばかりいつてるのもこの部類だね。

辻 罰を罰とも感じないで、しやあしやあとしてる人がいるね、よく。何をいわれても知つちやいなというよう……。

小平 他人のことならともかくたとえ自分の子供が現實に病氣しているのにな、そんなのとつちだつてかまわないなんて信じないのがある。

池田 自分が修行するだけで現實の社會には役に立たない人間になるわけですね。

小平 今、藏教をやつたわけだが、通教

は同じような意味だからいいかね、別教は今度はやりましよう。

池田 別教は華嚴經ですね。

石田 別教には、教道と證道があるわけですね。教道の方には、十地・等覺・妙覺と五十二位が具わつていて、證道の方からいうと、初地に、一分の無明を斷じている。上根の者は初地から圓教へ移ると、中根の者は中間から移つて、下根の者は、七地、八地のあたりから、圓教へ移ると。移つたその引越し先は、みんな圓教の初住位ですね。

辻 それで有教無人か？

石田 有教無人というのは、教の面からゆけば、等覺、佛がいるのですね。上根・中根・下根と、結局みんな引越していなくなるから有教無人だといふわけです。この續きが、當體義抄に關係があると思ひます。五一三頁の一番最後ですが、『法華經に至つて四味三教の方便の權教・小乘・種種の草華を捨てて唯一の妙法蓮華を説き三の華草を開して一の妙法蓮華を顯す時、四味・三教の權人に初住の蓮華を授けしより始めて』とありますね。そうすると、迹門には初住位から始まつてまたず一つと、十住・十行・十回向・十地というように、位が立つてるわけでしょうね。方々から引越してき

たわけですが……。

小平 圓教に立てた六即は、天台が立てたわけですが、その六即を配立した上に、別教の五十二位を當てはめてみたということです。たとえば分眞即は、五十二位のとこ

からどこまでというように……(大白蓮華第七十二號二十五頁參照)

石田 はあ、それではつきりました。

そうすると、この續きはまたこちへくるのですよ。當體義抄の五十小劫のあたりへ。五一八頁ですが、『爾前と迹化の衆とは未だ本門に至らざる時は未斷惑の者と云われ彼に至る時正しく初住に叶うなり』と、今度は、本門の初住ですね。『開迹顯本皆初住に入る』と、みんな本門の初住へ入つてくるわけです。そうすると今度は、初住位からの即身成佛ということになるのですか。

小平 こういふことを論ずる立場では、即身成佛はないしやないですかねえ。初住だとやはり、十住、十行……と上るようになるんでしよう。文底に至つて始めて名字妙覺の即身成佛があるけれども、文上においてはやはり、六即の位を立て、又初住になつてはじめて不退位の菩薩であるなどといつておられる。

石田 そうして今度は、三重祕傳抄が本因初住となつてくるわけです。爾前の初住、迹門の初住、本門の初住、それから五百塵點劫の本因初住となる。この「開迹顯本皆初住に入る」は本因初住です。そして、本因初住の文底に久遠元初名字の妙法があるんだとなる。

小平 この、藏教・通教・別教・圓教について質問があつて、もつと深く突つこみたような質問をされたときには、一大聖教大意(御書全集)これを教えてあげればよい

と思います。これを讀んでおきなさいと。これには、五十二位はもとより、いろいろの悟りの段階が出ていますから。

池田 お山で賣つてゐる佛教讀本も、わりと詳しく出ていますね。

有爲の報佛と無作三身

小平 守護國界章の「有爲の報佛は夢中の權果前三教の無作の三身は覺前の實佛なり觀心の佛」この文で、覺前とは何んだということをよく聞かれます。

石田 覺前というのは、理即のことじゃないですか。

小平 覺りの前、覺りが嚴然と目の前にある實佛だという意味なのか、それとも、修行してゆく覺りの前のということか。

池田 釋迦佛法に關係ない久遠元初の佛であると……。

石田 私はこう思つてゐるのですが、この覺前というのは、覺るとか、覺らないとかいうことは關係なしにね、本然に具わつてゐる佛、つまり、理即の三身じゃないかと思うのです。取要抄の文段の中にあるのですが、日蓮正宗では、「等覺一轉名字妙覺」だということです。天台は、「等覺一轉理即に入る」と釋してゐるということです。その理即の邊が、覺前の實佛じゃないかと思ふ。

池田 はあ……後の圓教の觀心の佛といつて、前三教の修行の佛に相對してゐますからね。

小平 この、覺前の前という字がね、目

の前にあるというそういう意味の前なのか、時間的に、何々の以前という意味なのか……。

辻 有爲の報佛と、無作三身と對照的に書いてあるのですよ。有爲の報佛は夢中の權果、夢の中のかりの結果だと、無作の三身はそれに對して、そうではないという書き方ではないのかね。そうなつてくると、覺前の意味は、覺られたお方という意味になる。結局石田君の、もともと具わつた佛様ということと同じ意味ですが……。

池田 通ずると思ひますね。指しているところは同じですが、前々から持つてゐる佛性というものから論じた場合と、それが顯われた姿から論じた場合との違いであつてね。

大川 その後に、「實教の三身は俱體俱用なり」とあります。

小平 この俱體俱用がですね、さつきの別教のところの、隔歴不融に對照するわけですね。隔歴不融の方は、空は空、假は假で不融だけれども、俱體俱用は、三身具足ですから。

篠原 五六〇頁の六行目、「本覺の窟を忘れ夢の是非に執して冥きより冥きに入る」というのは、どういう意味でしょうか。

石田 冥きとは迷ひのことでしょう。迷ひから迷ひを轉々として歩くということでしょう。

司會 その次に、三三九品ということがあるのですが。三乗の各々に上中下がある

わけですか。

石田 これも調べてみなければ、何んだか少しあいまいなんですがね。三乗は聲聞・緣覺・菩薩で、菩薩が上になり、緣覺が中、聲聞は下になるわけでしょう。その上中下を、更にまた三つに分けるわけじゃないですか。

諸富 それが三三が九品になつて、「此の如く説き已つて後に又上上品の根本善を立て上中下・三三九品の善という」というのはどうですか。

石田 三三九品とは人種をきめるわけで、その一つ一つに對して、善惡々々を立ててゐるのでしよう。だからこの、下下品なら下下品に對して、下下品の惡、下下品の善というものを立てるわけです。三三九品は人間の品分けですね。善惡は人間の振舞の規定になつてくるわけです。

池田 詮じつめれば上上品の根本善とは信心ですね。

大川 その後の、「皆悉く九界生死の夢の中の善惡の是非なり今是をば總じて邪見外道と爲す」というのは……。

石田 今の三三九品に對して善惡を立てるわけですね。その善惡のよしあしなんというものは、總じて、邪見外道の部類だと摩訶止觀の提要記でいつてゐるのだと思ひます。

篠原 そうしますと、根本善とは九品の中、上上品・上中品・上下品というようない意味の上上品ですね。九品には變りはないわけですね。

石田 そうです。

小平 九品佛というお寺があるが、ここからきてゐるわけですね。

石田 要するに、上上品の根本善というのは、その經文の最高の善をすることでしょう。その經文で説かれてゐる本尊を信するのが、根本善ですね。それをそうしておいて、最後に法華經を持つてきて、汝等當信解といつて、スポンととりかえてしまふ。開會してゆく下準備だと、ここに書いてありますね。

司會 圓融相即というのは……。

小平 さつきの隔歴不融の反對だ。三身具足のことだ。

池田 十界互具圓融相即、一念三千ということですね。

小平 空假中の三諦即三諦で九諦になるのですよね、圓融相即するから。それから、「方便と眞實と有りて權實の法關げざるなり」というのは、どうでしょう。

池田 華嚴經なら華嚴經にも、報身というものがあつて、眞實が含まれてゐるわけですからね。分々にみな、方便・眞實・空・假・中の三諦の一つの哲理というものがみな含まれてゐるのであると。

小平 十界常住というようない意味にもなるわけですね。九界を權として、佛界を實として。

池田 法華經の中にだつて方便が入つてゐるわけですからね。御義口傳から拜すれば、この肉體なんか權教ですからね。妙法蓮華經の生命の法體が實になるのです。權

實の法かけざるなりです。

辻 法華經になると、祕妙方便だね。

小平 ええ、絶対妙の立場で、するわけですからね。

迷悟不二、生佛不二

司會 では、第三段、自行の法へ入りた
いと思います。五六八頁の十二行目まで。

ここでは、自行の法を釋したのであつて、
はじめ、夢寤不二の立場から法華開會の妙
旨を示しており、心外無別法、十如實相に
よせて萬法一心、生佛不二を論じ、月の
譬、莊周の古事をひき、十界五具、迷悟不
二を證し即身成佛の義を明かしている。最
後に、わが身即ち天地法界であり、この五
大が永遠の存在である以上、われらの即身
成佛も疑いないことを説いています。

辻 生佛不二ということだね、この中心
は、迷悟不二にも通じるね。

小平 「此の三如是の本覺の如來は十方
法界を身體と爲し十方法界を心性と爲し十
方法界を相好と爲す是の故に我が身は本覺
三身如來の身體なり」という文について。
池田 その處と、五六三頁の二行目と
通ずるのですね。「四土不二にして法身の
一佛なり十界を身と爲すは法身なり十界を
心と爲すは報身なり十界を形と爲すは應身
なり」と。

辻 凡夫それ自體が佛であり、十界常住
の存在であり、我即宇宙であるというよう
なことを説いているわけでしょう。肝心要
めだもの。僕らは聞きなれてるから、そ

んなに不思議に思わなければいけません、不思議
なことなんだなあ。

諸富 五六七頁に弘法文を引いて、
「此の身の中に具さに天地に做うことを知
る頭の圓かなるは天に象り足の方なるは地
に象る……」こういう處を讀むと、自分自
身の生命が宇宙に過じているんだというこ
とだけは感じられるのですが……

石田 要するに玄武たの白虎という宇宙
觀というものは今普通には使つてない。
一いえば、いろいろな議論が出てくると
思うのですけれども、結局は、天地の運
行、天地の構造と、われわれのこの一個の
生命の構造と運行が同じじゃないかといつ
ているのですがね。結論はそれでしよう。
それさえはつきりしていればね。一とら
われる必要はないですよ。ほんとうに青龍
がいるのかとか、その青龍をどう解釋すべ
きとかかね、枝葉末節になるでしょう。

辻 別個のようだけれども、ちやんとリ
ズムに合っているわけだから、赤ん坊が生
まれてくるときだつて、ちやんと潮が満ち
てくるときに生まれるのだから、死ぬとき
は、必ず引き潮のとき死ぬのだから。

池田 宇宙のリズムと調和しないとき
に、病氣になつたり、貧乏したり、氣狂い
になつたりするんじゃないですか。一秒間
だつて、地球の運行が止まつたり、太陽の
動きが止まつたりしたら、大變ですから
ね。自分一個で生きてるのじゃなくして、
宇宙それ自體と調和して生きてるの
が、われわれの宿命ですからね。

大川 肉體の構造をとり上げて、化合
の度合が違つただけで、本質は變らないわけ
ですね。

辻 それを、自分一人で何かやつてい
るような錯覺に陥り易いのだ。孫悟空が
さ、ずいぶん遠くまで走つたと思つたら、
やつぱり佛様の掌の上だつたなんて、あの
話しと通じるね。

池田 宇宙も地水火風空、わが生命も地
水火風空である。それは妙法蓮華經である
と。

辻 それだけならよいのだが、因果關係
をいつてゆくとややつこしくなるんだよ。

小平 それにしても、まあ、大體別のも
のじやないという感じはするね。物を食つ
たり飲んだりすればトタンに自分の物だ
し、出しちやええトタンにまた自分の物で
なくなつちやう。

辻 コヤシになつて、またホーレン草に
なつてくる。(笑)成・住・壞・空ということ
だね。たえずくり返しなが、永遠に存在
している。

大川 このことはどうでしょう。八萬四
千の經典は、ことごとくわれわれ日常の振
舞い、日記文書みたいなものだといふお言
葉がありますね。

石田 煩惱・業・苦の本能があるから、そ
の始末のし方を教えるのが、戒・定・慧でし
よう。それが佛敎の教えですよ。その教
えの通りに、煩惱・業・苦を始末すれば、そ
のまま、法身・般若・解脱に轉じる。だか
ら、戒・定・慧の三業は、小乗から大乘まで

一貫して變らずあるのです。

池田 八萬四千の法藏つていふけれど
も、無盡の法門に對して、なぞらえたこと
ですね。何も八萬四千法門があるという意
味じやないのですね。

小平 そうです。

池田 それから、大通智勝佛・不輕菩薩
を、御義口傳になると全部わが身に當てて
いることですが、先生がおつしやるのは、
『大通智勝佛とか不輕菩薩とか、また舍利
弗とかいふ存在は、たしかにあつたらう』
と。舍利弗なんか御義口傳になると、法報
應の三身になつちやうのだからね。全部一
念三千の當體ですからね。『こういう存在
もあつたけれども、わが生命に當てはめれ
ば、一念三千の法理から照らしてみれば、
わが身のことを説いているのだと、こう讀
むのだ』とおつしやつていた。

司會 では、何も譬え話ではないのです
ね。

池田 そう。釋迦もいたのだから、舍利
弗もいたことは事實です。

小平 舍利弗は、法華經を説かれたとき
には、死んでしまつていなかったという説
もあるという。しかし、死んだ提婆達多が、
天王如來なんて授記されているのですから
問題が別だ。

石田 提婆は、本地は清淨で、迹に天熱
を現わすというのですから。

小平 一念三千を説くのが法華經の目的
なんだから、そこにその、人間がいたと
か、いなかつたとか、不輕菩薩がどこにい

たとかいうような究明しようという目的なんじやないのだから。

辻 いらない舍利弗が出てくるから、法華經はウソだなんていうことにならない。

諸富 そうしますと、舍利弗なんかは、聲聞の代表として説いたわけですね。

石田 そうです。己心の聲聞界だ。

司會 五六二頁の、『月・重山に隠るれば……』というところはどですか。

池田 これは、よく讀めばわかるのですかね。

小平 弘決の文を引かれているから、むずかしいのを一生懸命讀んで行くと、おしまいに上の釋は一往の釋で實義ではないなんて、(笑) がっかりしちゃう。

時間の觀念

石田 それよりももう少し面倒なのはこれですよ。『過去と未來と現在とは三なりと雖も一念の心中の理なれば無分別なり』というところ。

諸富 時というものは、自分の一念だという。

池田 瞬間しかない。永遠を瞬間にはらむ。

石田 一應、われわれの生活では時計が約束になつてゐるからね。これが災いしてゐるんですよ。佛法でいうほんとうの時というのは別問題だ。

池田 人間の晝夜五十年を以て四天王の一日一夜とする。四玉天の五百才を等活地獄の一日一夜とする。(顯勝法抄、四四三頁)

石田 ああそれですよ。佛法で論ずる時間というのはそれです。

辻 夢の一秒、二秒が、ずいぶん永い間のように感じるからね。

司會 相對性原理なんかと關係あるでしょう。早く運動すると、時間が短くなるので、早く動くとき壽命が延びる。

石田 いや、われわれは三次限空間に立ってちやうどですよ。その四本の絡まりが全部直角にできているのですよ。その規定の上から出發してゐるのが、相對性原理なんです。

司會 私たちが、動かないで坐つてるときと、歩いてるときとは、時間が違うのです。ただ非常にわずかな違いです。感しないだけで、それがだんだん大きくなる……。

池田 困つたなあ、これは、しかし持つてゐる時計の速度というのは同じでしよう。

石田 いや、時計だつて違つてですよ。

この出發點は、天體の運行からきてますからね。天體の運行の間でね、あれとあれとは絶対不變だという約束の上から作つてゐるのが今の時計です。ところが、それが不變なものか、變動するものか、本當はわからないのです。それで最近では原子時計を用いてゐる。これもあくまでも相對運動でしよう。

小平 そういわれれば、そうだね。地球の廻るのは二十四時間ときめてゐるが、い

つまで經つても毎日同じかどうかかわからな

いねえ。

石田 今の物理學者にいわせると、地球の回轉は遅れているというのですからね。二十四億年に一秒づつ遅くなるそうです。

辻 それじゃまだ心配ないや。(笑)

池田 佛敎讀本にですね、アインシュタインの相對性原理の論理というものは、華嚴宗の十玄六相というのに、相通するとありましたがね。

石田 だから結局、われわれがこの時計の時間にとらわれてゐるといふのは、九界の一つの執着なんです。ここで仰せられる時間は、時計の時間じゃないのです。業報として受ける時間なんです。業感というものです。それは全部自分の一念の中でですね。昨日があつたといつたつて昨日のことを覚えてゐるからね、昨日の業を今感じてゐるから、昨日があるわけでしょう。明日についても、明日はこうしなければならな

いと未來を感じてゐますが、これは我が業に感ずるのでしよう。過去を感ずるのも、未來を感ずるのも、今の一念の心の働きてあるといふのが、ここなんです。過去・現在・未來の三つは、三つなりといへども、一念の心中の上のことなんです。つまり、一念といふものが本體であつて、空間も時間も迹なんです。空間が廣いか狭いか、これもみな業感なんです。『一身一念法界に遍し』とあるでしょう。

一切法皆是れ佛法

大川 この無分別法とか、無相の極理といふのは同じような意味ですか。

小平 無分別の法とは、法華經のことだよ。分別は爾前だから、無相の極理も無分別法も同じだね。

司會 五六三頁の六行目にまゐりまして、「此れを一切法は皆是佛法なりと通達解了すとは云うなり」といふところについて。

小平 心の外に法はない、そうなること一切法はみなこれ佛法だということになる。

池田 名字即の位だね。

小平 この場合の心は、妙法蓮華經ですね。われわれが實際そうだからね。何んでも、みんな、御本尊様にお願ひしようといふ……。

司會 五六四頁に行きまして「華嚴經に云く『心は工なる畫師の種種の五陰を造るが如く……』この場合の心といふのは、華嚴經は心を中心にしてゐますが、われわれからみると生命ということですか。

辻 一切の現象といふものは、全部一念であるといふことをいつてゐるのでしよう。

池田 そう、三界ただ一心なりという。心の外に別の法はない。

石田 われわれが、いろんな現象を感ずるわけですね。今日は天氣がいいとか、アメリカで原爆の實驗をやつたとかつて、われわれ五官に訴えてくる一切の現象といふものを、こつちが受けるわけでしょう。受けければそれによつてこつちが反應を起して

地獄界から佛界までの心を起す、向うにあるものは、唯一つの現象ですが、受けたこつちは、それから十界を作り出してゆくわけです。ですから「一切世間の中に法として造らざること無し」というわけです。

篠原 このところで、法というものを現象として、あらゆる現象が南無妙法蓮華經によつて起つてくるというように考えていいでしょうか。

小平 諸法は必ず十如で、十如は必ず實相だからね。それからその、妙法蓮華經というものがあつて、それがこう何か動き出すという考えはなくてね、諸法といえは必ず妙法蓮華經、妙法蓮華經といえは必ず諸法というようなことです。

篠原 その大もとに何かを考えるとこのしやなくて？

小平 大もとは大もとだけどね、何か大もとは別のものがフラフラと動き出すのしやない。

辻 この心というのは、華嚴のときには單なる心でいいのしやないか。

篠原 ただ三重祕傳抄では、このところを、「華嚴は死の法門だけれども、法華開會によつて活の法門になる」といつています。

辻 その、一念三千を知つてさ、華嚴經を見た場合、單なる華嚴經と見ないもの、僕らは、妙法を知つての立場で見るから生きてくるのですよ、これが。

池田 一念三千の一念という問題をわかつために、華嚴經でもこういつているしや

ないかと、引かれているわけですか。

諸富 それから、五六四頁の始めの行に、「此の心が善惡の縁に值うて善惡の法をば造り出せるなり」とございます、この善惡というのを、正法と邪法というようにとつてよろしいのでしょうか。

辻 そうとつてもよいし、ふつうの善惡でもいいでしょう。悪人にたぶらかされてワイロをとるといふように。

池田 朱に交われれば赤くなるというように、對境によつて變つてくる。

小平 もう少しゆきまして、この頁の眞中邊ですが、「法華經に云く『如是相一切の相好本覺……』』というところ、三如是から七如是を出生して十如是となるというところはどうかでしょう。この通りでいいですね。相・性・體の三如是が本體で、七如是が用になるわけです。力・作・因・緣・果・報は活動の面ですものね、因果の面ですから。

辻 そう、前の三つが根本ですからね。

池田 しかし、それが本末究竟して等しいのだから、動いておつても、動かなくて十如是しかないわけですよ。

小平 體を説明すると、相性體であり、用を説明すると、力・作・因・緣・果・報、それが別のものではないというわけです。

次に、五六五頁の胡蝶のところは、讀めばわかるね。それを身にしてみても感ずるかということ、各人の信心によつてです……。

篠原 五六五頁で本末究竟等の御説明として「本とは衆生の十如是なり末とは諸佛

の十如是なり」と仰せられていますが、「初の相を本となし彼の報を末と爲し」という日寛上人の御説明と、どういふ關係なんでしょうか。

石田 三重祕傳抄の方は、本末究竟等の本末なんですよ。

小平 今の場合は、本末を衆生と佛で説明している、十界で説明しているわけですか。

篠原 そうすると二通りの立て方があるわけですか。

小平 二つでも十でも百でもあるのですよ。たとえば、お金を拾つたときの本末を究竟等で説明すればできるし……。

池田 信心して佛になろうということに本を立てて、因果具時で、佛にさして下さる方を末と立ててですね、御本尊様としてですね、本末究竟して等しいと。大聖人様は、『聖人知三世事』(御書全集)では、本末をですね、今を本として、末法萬年盡未來歳までを末に御覽になつてですね、本末究竟しての難とか、豫言というものをなさつて見るわけでしょう。本末究竟等だから今を見れば、これからの様子が全部わかるというのですよ。

小平 あらゆるものが十如是だものさ、みんな本末究竟等だ。その少し後で、「本の故にも父子なり末の故にも父子なり父子の天性は本末是れ同じ」といふのは、どうでしょうか。

石田 要するに、諸佛は、衆生の一念の心から出ている、だから、衆生は本で、諸

佛は末だと、こういう一つの本末關係があるのです。今度は化導する、されるという立場からゆけば、諸佛が本で、衆生は末となる。だから、本の故にも父子、末の故にも父子、父子の天性は本末同じだと、どつちから見ても結局は同じだといふのですよ。

辻 一つは衆生から佛が出てきたから、父子なんだね。もう一つは、佛の智慧を父にして、衆生の迷いを子供にするというわけですね。

大川 天性は本末是れ同じとは、見方はその二通りになるが、本質は同じだということですね。

小平 五六六頁の眞中邊ですが、「止觀に云く『無明の癡惑本より是れ法性なり……法性を以て法性に繋け法性を以て法性を念ず常に是れ法性なり法性ならざる時無し』』』というところは、無明癡惑本は法性をず一つと説明してきた結論ですね。このよきな法性でない時がないのに、いつも法性なのにもかかわらず、夢の蝶のような無明で迷わされてはいかんといいことではないか。

我が身即妙法五字

大川 五六六頁の「一切の法は皆是れ佛法なりと通達し解了する是名字即と爲す」といふような言葉は、このまま覚えておくべきですね。

石田 先生がいつか、一切の法を通達解了するのしやないのだと、一切の法は佛法

だと通達解了するのだ、これをゴツチャに
するなどと話しておられましたかね。

辻 つまづいたのも、病氣したのもお金
を拾ったのも御本尊様との関係にあると、
一切を御本尊様と関係づけて、御本尊を尊
敬することが一切法これ佛法と通達解了す
ることだと、先生がおつしやいましたね、
病氣がおつて、「なれる時がきたからだ、
御本尊様のせいではない」なんていうヤツ
は違うのだな。

小平 實際、信ずるといふことは、智慧
があるということになるね、以信代慧だか
ら。御本尊様をほんとうに信ずれば、御本
尊様と同じ智慧なのだから。

司會 御本尊様を信じたら、頭が良くな
るといふことも同じですか。

辻 良くなることは良くなるだろうが：

池田 智慧だから、知識が廣がるという
意味じゃないが、要するに、頭が良くなる
わけですね。

辻 判断が正確になるし、頭は確かに良
くなる。バカが利口になるといふことだつ
てあるもの。具體的にいえば、惱が整頓さ
れてくるといいますから。

石田 ほう。

池田 それは、この次の弘決の文（五六
七頁）から判断してもいえますね。宇宙の
リズムに調和するのですから。

辻 頭が七つに破れているというのは、
整頓されていない状態をいうのですかね。

われわれは、困った問題にぶつかると、

ヒヨイと智慧が出てくる、我ながらうまい
ことをいつたものだと思うことがあるでし
よう。ふつうではいえないことを、御本尊
様を拜んでいるといえるものね。

小平 牧口先生がおつしやつたけれど、
バカにつける薬ができたわけだ。（笑）

池田 智慧第一の舍利弗や、文殊師利菩
薩が、信心すれば働きの出すのだから、利
口にならないわけはないな。

小平 この弘決の文は、そう詳しくやら
なくていいでしょう。何に法とり、何に法
とりというところは、やつていたらキリが
ないから略しましょう。

司會 この中に五音なんていうのがある
のですが……

池田 五音はね、支那の音楽の基本なん
です。西洋のドレミファソラシドと同じよ
うに。

司會 お琴の先生で信心した人が感激し
ちやつて、『大聖人様はこういうことまで
教えて下さる』なんていう投書がありまし
た。

辻 五音、五感、五大、五字、五とい
うのは、意味が深いな。

小平 要するにこのところは、地水火
風空の五大が、我が身の地水火風空であ
り、また妙法蓮華經の當體であるとい
うとですね。

五百塵點劫の當初

司會 その次に第四段で五六九頁の五行
目まで。大意は、久遠元初に妙法を悟つた

釋尊が化他の爲に世々番々に出世成道し、
最後に印度へ應誕して一切の化導を終り、
末法の爲に壽量品の文の底に三大秘法を沈
めて地涌の菩薩に付屬した。

小平 この「釋迦如來・五百塵點劫の當
初……」というところは、このところ
（當流行事抄二二頁より）に日寛上人が詳
しくお述べになつてゐる。

石田 これを、境智行位に拜すると……

小平 「我が身地水火風空」は境です。
「知る」が智であり又行である。「凡夫」
が位です。

辻 この解釋ですが、堀米宛下にこの
前、突つこんで伺つたのですよ、そうした
ら「久遠元初に悟りを開いたのは釋尊自體
であり、出てきたのも釋迦だ。日蓮大聖人
には日蓮大聖人の衆生があり、法がある。
釋尊には釋尊の衆生があり、迹の法がある
わけでしょう。我が身を知つたのは同じこ
とをやつたのである。だけでも、釋尊の佛
法においては、本因は説かないから、本果
の面からだけしか説かないから、だから本
佛とはいわれないのだ。大聖人様は本因から
説いているから本佛とおつしやるのだ」と、
宛下は御説明になつていました。要する
に悟り自體は同じだとおつしやるのです
よ。

池田 そう、佛ですからね。

小平 釋迦佛だつてそれがわかつていな
ければ、文底に祕沈すべき何ものもないか
らね。ですから、このところで、釋迦如
來というのは誰れかといえはですね。日蓮

大聖人様と一體の佛ということですよ。
辻 日應上人もね、他宗との問答におい
て、いつでも、釋尊と一體の佛といわれて
いるね。

小平 ええ。ここでいう釋迦如來とは印
度のお釋迦さんじゃないことは事實なんで
すよね。五時八教の釋迦に關係ないことは
はつきりしている。「凡夫にて坐せし時」
なんていうのは、壽量品には全然出てこな
いわけですから。そうなつてみると、凡夫
位で直達正觀即身成佛なさるのは、日蓮大
聖人様であり、また大聖人と一體の佛様に
ほかならない。大聖人様が本佛でしょう、
その本佛に従つて修行した人たちがたくさ
んある。われわれも一體なんだから「所化
以て同體なり」……

池田 大聖人様と釋迦とは一體の生命な
のか、違う生命なのかという點は……

小平 それはね、法身に約した場合は同
じなのです。

辻 そう、宛下もそうおつしやつた。
小平 法身の上でいえば、體も用も同じ
なんです。化導の上からいえば、體も用も
違うのです。一體であつて、一體でない。

池田 化導の上からという……
小平 衆生を導く導き方も違ふし、相手
も違ふ。

石田 法身が同じだということとはね、あ
なたの法身も僕の法身も同じでしょう。そ
ういう意味です。わが身を知るのが佛法で
すからね、わが身はこうだと知つた内證は
同じでしょう。それで法身は同じというこ

となる。

辻 五百塵點劫の當初、凡夫にてわが身は地水火風空なりと悟つた釋尊と、後の化他のために、世々、番々に成道した釋尊は同じだけれども、本果の佛だから、經文の上では久遠元初のことは説かないのだ。とどのつまり本佛と同じだ。大聖人様は本佛として堂々と説ける立場なんだね。釋迦は説けない立場で、そこで資格が全然違うというわけですよ。

小平 生命論から見た場合はね、同じだといえは同じですしね、違ふといえは違ふのです。空といえは空、假だといえは假です。中諦と見れば中諦だ……。

辻 五百塵點劫の當初に悟つた方を日蓮大聖人ときめて、後に化他のために世々、番々の成道を唱えた釋迦というものはですね、日蓮大聖人が垂迹したのですかと、こういう質問ですね。そうすると、それを否定するわけにはゆかないし、またそうだとはいえないというのです。こうだとどつちかに決定はできない。そういうものなのだと伺いましたかね。

小平 要するに以上をかんたんに説明すれば、釋迦佛法で凡夫の時なんていうのは説いていないのだから、これは大聖人様の佛法の中でなければ論じられないことだ。大聖人様は名字即で即究竟の立場であらせられる。我が身即等と悟られた佛は、その大聖人様と同じ立場の名字即究竟の佛様なんだ。それが釋迦という一つの使命を持つて、化導のために世々番々に成道してきた

のです。

石田 大體その、五百塵點劫の當初というところを、ずつと昔のように考えてしまふ、ここにも一つの問題があると思いがね。

大川 説明する場合には、五百塵點劫の當初を、その前というように説明したいと、ピンとこないようですね。

小平 當體義抄には、類せばとなつていからね、「類せば劫初に萬物名無し！」(五一二頁)と、類推していえよというようにおつしやつていますね。そうでないと、キリスト教と同じようにならないか、というような質問も受けるのですよ。天地・宇宙創造の神が、ある時に名前をつけたというようにね……。

自行と化他の力用

司會 次は第五段、五七二頁の九行目まで。自行と化他との力用の優劣得失を、譬えや經釋を引いて説明されている。しこうして末代凡夫の修行を勧め動まされているのである、これが大意です。

諸富 五六九頁の、「然も圓頓の教は本と凡夫に被むらしむ若し凡を益するに擬せざんば佛・何ぞ自ら……乃至一心凡に在れば即ち修習す可し」凡夫と佛様とは一心同體だから、一生懸命やりなさいというような意味ですね。

石田 そう、一心凡に在ればの心は、信心です。圓頓の教は、凡夫のために設けたものである、だから、凡夫に信心があれ

ば、それが受けられるのであるというのが結論です。その中間の個所は、要するに、法身の菩薩のためではないぞといつてはわけです。ですから、自分も凡身で現われ、化導されたと。

小平 次の弘法が生きるわけですね。「一切の諸佛已心は佛心と異ならずと觀し給うに由るが故に佛に成ることを得る」と已上、此れを觀心と云う」と、これを信心というわけだね。

石田 一つ問題のところがあつた。五七一頁の真中頃、「後心の菩薩とは等覺の菩薩なり但し迹門には生身及び生身得忍の菩薩を利益するなり本門には法身と後身との菩薩を利益す但し今は迹門を開して本門に攝めて一の妙法と成す故に凡夫の我等穢土の修行の力を以て淨土の十地等覺の菩薩を利益する行なるが故に化功廣大なり」というところで、凡夫の我等以下の意味がよくわからないのですが、「凡夫の我等穢土の修行の力を以て」までは、われわれが南無妙法蓮華經を唱えることだと思いますが……。

辻 淨土の佛法で、十地、等覺まで上つた連中でも、われわれの南無妙法蓮華經に及ばないというような意味ではありませんか。

池田 そういう意味らしいですね。報恩抄の一番最後の方の、「極樂百年の修行は穢土の一日の功德に及ばず」という文と同じようなことではないでしょうか。

小平 われわれの信心がすばらしいもの

であつて、非常な功德を受ける信心であるというようだが、基本になつていようですね。

池田 淨土の十地、等覺の菩薩といつたら大變な菩薩ですからね。それ以上に非常に力があるということでしょうね。

篠原 今の四行前のところで、「爰に凡夫の我等が此の穢土に於て法華を修行すれば十界互具、法界一如なれば淨土菩薩の變易の生は損し佛道の行は増して變易の生死を一生の中に促めて佛道を成す故に生身及び生身得忍の兩種の菩薩増損生するなり」とあるのと同じではないでしょうか。

池田 そうです、これが結論ですね、やはり、追善供養なんか含まれますね。地獄界から菩薩界まで追善供養できるという……。

小平 どこへでも響く、われわれの題目によつて、あらゆるものを救うことができるといふことでしょう。

石田 事實こつちの己心の菩薩なり修羅なりが功德を受ければ、宇宙法界のそれに全部関連があるのですから。

司會 五七二頁の五行目「已前の八教」という場合の八教は、法華經以外の八教ですね。

石田 そうです。法華は超八の意味ですから。

池田 最後の、「經に云く『三世諸佛の說法の儀式の如く我も今亦是くの如く無分別の法を説く』とは、五佛同道の儀式と解釋されるわけですね。

石田 はあ、五佛つてどういふものでし
たつね。

池田 總諸佛、過去佛、現在佛、未來佛、
釋迦佛。總諸佛に全部含まれちやうように
思いますがね。

一代の總の三諦

司會 では第六段に行きます。五七四頁
の九行目まで。一代聖教の總の三諦に約し
て開會の成佛と分別の不成佛を論じ、別し
て圓教の妙法を信する功德を示している。

石田 徵佗學の決の内容は、言葉が面倒
なだけで、單語がわかると、そう面倒でも
ないです。

司會 これは結局、智證が天台の教えを
そのまま書いたわけですか。

石田 こういふ關係なんですよ。徵佗學
の決とは、一つの間答の形體ですよ。そ
の間答のやり方は、天台宗の相傳で傳わつ
てきているのです。それを自分がまとめた
だけです。書いたのは智證ですけれども、
大聖人様はここに先徳大師の所判といつて
おられる元意は傳教のことです。

池田 徵佗學というの、他を責めると
いふ意味で、一つの折伏論だね。

石田 折伏教典だ。南都六宗との問答を
やりましたね、一同みな歸服したわけが
が、そのとき述べた論義が基本になつてい
るのじやないかと思うのです。他宗を破折
するときは、こやればよいと、傳教が弟
子に教えたわけですよ。

池田 ここではちやんと眞言を破つてい

ますね。

辻 二代目義真まででしょう、傳教の正
義が保たれたのは。

篠原 「第二の座主・圓澄大師までは此の
義相違なし」(御書全集)とあるのですが。

小平 圓澄が半分くらい眞言にかぶれた
ということも書いてある。(報恩抄三二〇
頁)

辻 半分かぶれたら、全部かぶれたも同
じことだ。

司會 總の三諦というのは簡單にいえ
ばどうなんでしょう。

小平 三身即一の本覺の如來だよ。

池田 一切の佛敎が、即法華經に全部含
まれているという見方ですね……。

辻 一代聖教を總括した立場から見たの
だからね。頓が空、漸が假、圓が中だ。

小平 この場合は、一代佛敎を頓・漸・圓
として空假中に配しているわけですね。で
すから、總の三諦といえは、珠と光と財と
を具えているように、その三徳を分別して
兩前經のように別々に立ててはダメだと。
總の三諦とは三身即一の本覺の如來です
から、空・假・中の三諦を、圓融圓滿に具えた
三諦である。

辻 別々なら別の三諦だ。

池田 法華經それ自體、絶對妙の立場か
らになりますね。

小平 空は空だけ説いた經があるのです
よ、般若なんかのように……。

石田 法華經では空・假・中の三諦を相即
して説いている。兩前經においては、空な

り、假なりの特徴をヤカマシク説いている
のですよ。ある部分には、但中の理によつ
て中道の特徴を詳しく説いたりしている。

小平 「二聖二天十羅刹の擁護を蒙む
り滞り無く上品の寂光の往生を遂げ」と
いうところは、大白蓮華の二十號三頁に會
長先生の解釋があるから、それを引いてみ
ましょう。

これは大利益論(下)のしめくりの段で
す。會長先生はこの文のほかに成佛の御文
として、前の部分の總勘文抄も引いておら
れます。(以下、その引用文)

この成佛のことについて深く思索して見
るために、次の御文を引いてみよう。

三世諸佛總勘文敎相廢立の御書に「三世
の諸佛の御本意に相叶ひ二聖二天十羅刹の
擁護を蒙り乃至三世諸佛の勘文是の如し秘
すべし秘すべし」。

三世の諸佛の御本意に叶ひとは、大御本
尊様を信じ題目を唱えることである。二聖
二天十羅刹の加護をこうむるとは大御本尊
様の御利益をこうむることである。上品
の寂光の往生をとげとは成佛のことであ
る。須叟の間に九界生死の夢の中に還り來
つて身を十方法界の國土に徧じ、心を一切
有情の身中に入れとは、即ちまた生命が再
び還つて人として或は目的を持つている生
命として活動を起す状態である。かくの如
く成佛といつても特種の所に生き長らえて
いるのではなく、絶えず九界の世界に遊戲
していることを仰せである。内よりは勸發
し外よりに引導し内外相應し因縁和合して

とは、再び大御本尊様にお目にかゝること
をいふのである。自在神通の慈悲の力を施
し廣く衆生を利益すること滞りあるべから
ずとは慈悲の境涯より大御本尊様の一分の
御目的を頂戴し、生まれて來た所のその生
命の目的に對して充分なる價值活動をなし
て、自らも樂しみ他も利益して自在無礙の
生活を感ずることである。かくの如き幸福
こそ眞實の幸福といわねばならぬ。この成
佛の境涯を得んと希うことを更に重ねて吾
人は願うものである。(以上、引用終り)

必ず開悟すべし

司會 第七段は終りまで、諸佛出世の一
大因縁を述べ、末代凡夫は善知識にあつた
ことを喜び、妙法蓮華經を修行して、必
ず開悟すべきであると激勵なさつていら
れると。

小平 最後に、どういふ態度で勉強して
いつたらよいかについて。教えてみてど
うですか。

石田 やつぱり、候補ですから、細かい
ことはわからなくてもよいと思うのです
よ。大綱さえ間違えなければ。

司會 言葉だけ覚えて、大綱は全然反對
のことを覚えちやつたなんて……。

池田 そういう傾向がありますね。

小平 初めてこの御書を聞いては一番難
解でしょうね。

辻 むずかしいよ。
司會 ではこの邊で、お忙しいところ有
難うございました。

昔と今の組座談会

理事長、指導部長を圍む座談會

まえがき

學會において、その目的である折伏活動を推進するには、座談會という形で、一人々々に正しい信心の道を教えてゆくのが最も価値的であることが、発足以来の長い闘争體験によつて實證されてきた。新人の折伏ばかりでなく、指導も、教學も、すべてこの場で行われ、學會とともに生れ、學會とともに育つてきたのがこの座談會であ

司會 今日ほんとうにお忙がしいところをお集り下さいまして、ありがとうございます。折伏の大闘士の方々に、組座談會の、いろいろな内容と傾向について、お話し

していただきたいと思ひます。

初めに、みなさんが入信されたころの座談會、初めて出られた座談會などについて、良かったこと悪かったことを體験として話していただきたいと思ひます。古い頃です。最初に、學會の座談會の發生の姿と、いま小泉先生・柏原先生の入信された當時から、今の大幹部の方々が活躍さ

る。一頃、各種の會合がふえて、座談會の意義が忘れられる傾向があつたが、昨秋、組座一本に切かえられ、更にこの五月の大總會で、組單位の折伏強化がうち出されて、全幹部が組座談會に總力をあげて、おい／＼活氣を見せてきてゐる。ここで、座談會の發生期から活動されてきた大幹部と、各年代組織の各分野にわたつて活躍されてきた闘士の方々に、座談會についての豊富な體験意見等をうかがひ、今後の發展に寄與することにした。

れた座談會について、お願いいたします。

牧口先生の時代

小泉 まあ一口に昔といつても、牧口先生時代・戦争當時・それから戦後の學會再建當時というように分けられるわけだが、僕

らが入信した昭和十五年ごろの座談會はいつも牧口先生が中心だった。僕は原島さん（統監部長）から折伏されたわけだが、まだ入信しない前に原島さんが、『實に愉快な集まりがあるんだ』とその内容を話し

てくれたことがあつた。

定刻嚴守の牧口先生

いつか戸田先生がおつしやつたように、牧口先生は定刻にちやんとおいでになつていて、あと一人でもくると話し合つて自然に座談會が始まりだん／＼増えて、遅れてきた人は自然に参加してゆく。そして、『もう九時になつたからやめようか』で終るんだ。今みたいに皆んなのくるのを待つていて、開會の辭だの歌だので始まるようなんじやなくつて、早くくる者が得をするような座談會だつたね。牧口先生時代はあんまり新人なんかたくさんないで、いつも同じような顔ぶれでね、まあ幹部養成という感じだつたなあ。

司會 當時の座談會で話された内容はどうでしょうか。

柏原 牧口先生が價値論と御書の話をいつもなさつたわね。先生は價値論を使つて折伏なさつたわけだ。

司會 體験談なんかあつたのですか。

小泉 あつたね。あのころは、大善生活實験證明座談會と銘うつたんですよ。實験證明なんだから、これはどこまでも體験で。それを法門に照らして説明した。だから、非常にこんせつていねいな座談會でね、今こうして僕らが話してるみたいに、膝つきあわせて説明するんだよ。それをどこまでも、理論的にも究明してゆくというやり方で、今は大分違ふ。

先生が牢屋に行くまぎわになると、會員

も急激にふえてね、原島先生なんか、先生がいなくても司會ができるようになって、僕は脇士になつてた。最初は幹部養成で、あるていど説明できるようになつてきて、後には個人的にもジャンジャン折伏するようになってきた。折伏は、二三人で組んで、いろんな役目を分たんして出かけていつて徹底的にやつて、座談會はその仕上げというか、ほとんど、初信者を連れてゆくことが多かつたね。

體験と理論を交互に

柏原 一般の人が體験を活すと、その理論的面を牧口先生が話して下さるというように交互にやるんですよ。あのころは體験も少なくなくて、特別な話は、牧口先生が何度も話して下さつた。價値論でね、われわれの理想は大善生活だ、それをするには法華經を信心する以外にないというわけなんです。悪いことしないのと、いいことするのと同じか、違ふか、高等精神病および治療法……（笑）

小泉 當時の人は、戦時中で一等國民の襟度をもつて人間がマジメなせいりか理論闘争をジャンジャカ／＼やつた、今とはまるで違ふ。そして罰論一點バリエでね、牧口先生はよく『信心しても罰はある、善惡とも何か變化がある』といわれた。

司會 戦争が烈しくなつて特高が座談會に入つてくるようになったのはいつごろですか。

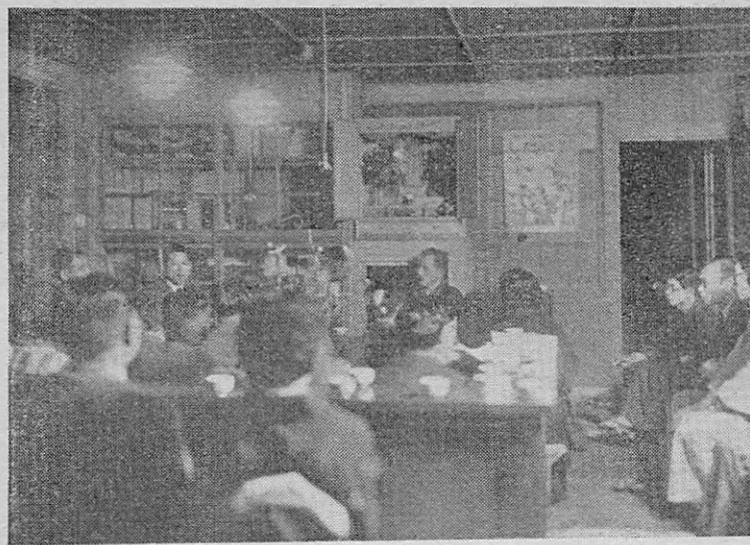
退転防止に開目抄拜す

小泉 先生が入牢されたのは、十八年の七月だったから、十七年の末頃から刑事がくるようになった、座談會が届出制になつて、届けるときなんだ。そして、先生が入牢されてから、座談會は自然解散みたいになつてしまつた……だけど、僕と原島さんと辻さんとはしよつちゆう會つて、退轉防止委員會を作つて、指導者がいなくなつて

しまつたから、大聖人様に直接伺おうというわけ、御書を読んだんだ。一晩に開目抄上下讀んだんだから早いだろう。(笑) まあ三人だけの組座談會というわけだね。和泉さんの奥さん、柏原さんもいたが、こちの方とは交通がとだえていたから。

學會の再建當時

司會 では、再建當時の座談會について



牧口先生時代の座談會風景 (正面は牧口先生)

小泉 疎開から歸つて、まず蒲田の僕の家で始めたわけだ。まだ、先生から座談會をやろうというお話のないうちに二人三人で始めたんです。だんだん人数がふえてね、當時東京中一支部みたいなみんな集つてくる。酒井さんの所でやるようになったところには、二百人も三百人も集まるようになってね、一つの企画性を持たなければ、どうにもこうにもならないというので、僕らと辻君なんかで案を立てて、戸田先生の法華經講義の話もしたり、罰論は誰れ、十界論は誰れ、體験は誰れというように擔當をきめたりしたんですよ。戸田先生は十界論から始つたんだから、十界論はとつても

ていねいにやりました。まあそのときの形を、どこでもここでもマネするようになってね、形式じゃあダメといいながら、形式になつちやつたわけだ。

戸田先生が陣頭で

當時は戸田先生が、折伏の先頭に立たれて、どこの座談會にもおいでになつた。先生が中心になられて、小理窟いうようなやつをみんなで折伏して激論になつたりしてね、『今日の座談會は活氣があつた』なんてね。(笑) そうして戸田先生の折伏を見て、一生懸命覚えて、今度は、自分たちが方々の座談會でかせげるようになったわけだよ。

始めは天井裏で

柏原 この間も、北海道總會で話したけれど鶴見の森田さんの家の中二階、というと聞えはいいけれど、天井裏ですよ。また向島の星生さんの家は、床が斜めになつていてね、窓の方にフトンを敷いて寝たのに、朝起きてみると身體が縁側の方へきてる。(笑) 小岩では、小岩の町でも有名なポロアバートの四疊半で座談會を始めたし、足立の藤田さんの家は、とつても不便な所でね、歸りに驛まで五十分も歩かなきゃならない、そういうところにも戸田先生はおいでになつて、一しよに歩いて歸られたんです。まあ今、大幹部になつてはいる人々でね、そういう貧しくして世間からあんまり相手にされないような家々でね、あり

出席者

のままの姿で、自發的に座談會を開いたわけなのよ。何んとかして、自分の信心で、自分の手で、自分の家で座談會を開きたい、戸田先生や幹部にきてもらつて一人で多くの人を救いたいという熱意にもえて

昭和十五年入信	理事 長	小泉 隆
昭和十六年入信	指導部長	柏原 ヤス
昭和二十四年入信	教學部長	小平 芳平
蒲田・地區部長	赤荻 助次郎	
杉並・地區部長	小田 垣いと	
昭和二十五年入信	杉並・地區擔當	森 下 尚
第四部隊參謀	細川 弘之	
昭和二十六年入信	本郷・常任委員	永井 光子
昭和二十八年入信	第一部隊長	園部 恭平
足立・地區幹事	迫田 參雄	
蒲田・班長	齋藤 才治	
昭和二十九年入信	蒲田・地區部長	加藤 祐三郎
第四部隊區長	新木 好子	
昭和三十年入信	第一部隊區長	石黒 和子
(司會)	多田 省吾	

いましたね。

始めは二、三人で

また人数の點もね、初めは二人三人、たまに八人くらいきて喜んでいると、次にはまた三人くらいに減つちやう、何回開いても同じ顔ぶればつかりという状態が、半年、一年、二年も續いたわけです。私たちは、何んとかしてこの座談會を大きく盛り上げたいという熱意で夢中で東京中かけ廻つてやつているうちに、だんだん集つてくる人がふえて、その部屋をいつばいにするようになったのです。そうするとね、『なんとかしてもつと広い部屋が欲しい』という願いが切實になつてね、いつのまにやら、広い部屋ができ、一間が二間になり、二階ができ、バラックのようなアバラ家から、ささやかながら新しいゆつたりした家が建てられるようになってね、座談會を開いた家の生活が功德に満ちあふれるようになってきたのです。この姿を見て、信心に反対だつた人が、信心するようになりましてよ。まあそんなふうにして、學會員がだんだんふえてね、人数によらず中心者がいるとそこに支部が結成されて、東京に二十五支部ができたんです。

小泉 そのころだなあ、折伏の競争がそろそろ始まつたのは……當時支部長がね、御本尊下附紙を十枚づつ豫かつたんだよ。これだけ今やつてこいつて。柏原さんが十體やつてきてほめられてね、僕は一世帯。(笑)

司會 内容ですが、戸田先生の座談會になつて、牧口先生時代と變つた點は……

小泉 さつきも云つたように、牧口先生は、價值論によつて説明されたが、戸田先生は頭から佛法で、生命論なんです。十界論をくわしく説いて下さつた。生命論で折伏なさつたわけです。

昭和二十四年ころ

司會 次に二十四年に信心に入つた蒲田の赤荻さん。

もつと座談會を多く

赤荻 一番初めに行つたのが、戸田會長先生の家の座談會なのです。矢島先生(大宮正因寺住職)とか、小泉先生とかのお話を聞きまして、信心とはこういうものかと思ひました。座談會が終りましてから、青年部の人たちが、こつちがほんとうに納得するところまで、一生懸命話してくれて、ああ座談會に出てよかつたということが感じて歸つてきたのです。ところが、歸つてきて、しばらくすると、また眠つてくる。

月に三回くらいあつて、會長先生の家と、小平先生の家と、矢口の酒井さん(男子部隊長待遇)の家とでありましたが、一回ぐらい抜かしてしまふ。でも、誘われてまた行くのです。そうして先生の話を聞いて歡喜してくる。眠ろうとすると起される。だから、もつと座談會が多くあれば、自分が

眠らないで済むと思ひました。現在はその點では幸せではないかと思つております。

司會 では次に、同じ二十四年の信心の杉並の小田垣さんにお願ひします。

大好きだつた座談會

小田垣 山浦先生(教學副部長)の西荻のお宅で入信したのです。山浦先生と、柏原先生と、小島先生(今の石田參謀)とがいらつしやつて、お話を聞きました。とても強いんですね。これは共產黨じやないかしらと思つたんですよ。私そのとき靈友會をやつておりましたね、靈友會が悪いということは自分でも感じておりましたので『靈友會が悪いことはわかりませんが、念佛が悪いということはどうしてもわかりません』と申し上げたのです。そうしたら柏原先生が、『あなたの家はお祖父さんの時代からやつたのか、いつ念佛やつたのか』といわれ、わからなかつたら、『そんなわかりもしないものをやつていて幸せになるわけはない』といつて、善導和尚の首くくり話しをして下さいましたので、あ、そうかなと思つて、入信を決意したわけなんです。

信心するといつてもその當時は、なかなか受けさせていただけないので、三ヶ月間待つたわけです。信心しましてからすぐ『座談會を開きなさい』といわれ、あのとこの座談會のような座談會を開いて、だれかに一つこの話しを聞かしてあげようと思つてやつたわけです。柏原先生、小島先生

にきていただきまして、私が夢中で集めて新來者六人集めたわけです。ところがみんな逃げちやつて、一人も入信しなかつたのです。それを毎月一日づつ自分の家で開きまして、先生方にきていただきまして。その當時の座談會は實にその豊富なんです。先生方の話は何んともいえない魅力があるのです。そしてまた、その席上で『先生はこの次、どこの座談會へ行かれますか』と聞いて、その豫定をうかがつては、あつちこつちの座談會へ先生を追いかけて歩いたやうなぐあいでした。戸田先生のお宅にも、うかがつたこともありませぬ。

座談會がとにかく大好きでした。その當時は、新聞も何もありませんから、新來者を求めて方々の座談會を歩いたものです。司會 次に二十五年の入信で森下さん。

怒られるのがイヤで

森下 小田垣さんとはお隣同士です。座談會のあるたびに、こいこいとさそわれ、行かないとオコラれるし、口もきかないし、(笑)隣の奥さんにオコラれるのがイヤで座談會のたびにでたのです。

たびに、柏原先生や山浦先生、樋口先生(教學部教授)等がいらつしやいました。が、なんて罰ばかりいう信心なんだろうと思つたり、南無妙法蓮華經は下品で嫌いだなどと思ひながら、イヤイヤひつぱられて三ヶ月くらい出ていました。ところがあるとき、柏原先生が、新來者に向つて、『真

言亡國だッ！」とドナツタ聲が耳に入つて、それが強く自分の身に感しまして、自分の過去をふりかえつて、寒氣を感じて入信を決意したわけです。

入信してからは、夢中で小田垣さんにつついて一しよに歩きまわっていました。たまに休みたくなつても、小田垣さんにジロリとにらまれるのがイヤで（笑）ひつばられるようにして座談會へ出ていたわけです。苦しいときには、何もわからず、ただお題目をあげきつて問題を打開してききました。

司會 では、同じ二十五年の入信で細川君。

生命力溢れる雰圍氣

細川 學校で神尾先生に英語の授業をうけていたのですが、先生の英語が非常におもしろく、私のように英語のできない者にもよくわかるし、先生と生徒との間でなんとなく個人的な親しみが持てたのです。そこで先生のお家を訪ねたところ、ちょうど座談會でした。「お前何しにきたのだ。學校の英語の點數をまけてもらいたくてきたのか」という頭からの話なんです。そして座談會へひつばつて行かれたのが、西萩の山浦先生のお宅なんです。真中にデンと柏原先生がかまえていられて、今の女子部の大幹部その他、大勢の人でいっぱいになつていました。その内容というと、私自身、念佛の害毒で非常に臆病なので、會場へ入つただけでもうビックリしてしまうほ



当日の座談會風景

たわけです。初めて座談會でうけた感じは、とにかくコワイということ。しかし一面、ああいうふうに自分の主張を堂々といきなりたくましい人物に自分もなりたいたいと思つたわけなんです。

司會 二十六年の入信で永井さん。

聲をかけてくれ た婦人部長

永井 私の場合は、母が下種をうけ、その晩に座談會へ出て入信し、御本尊送りのときに、女子青年と婦人部の方が見えて、非常にいいお話しをうかがつたのです。若くビチビチの女子青年の人から「この信心すると、現在の世の中の幸、不幸というものが全部わかるのです」といわれた言葉で入信したわけなんです。

當時、月に一回の座談會を楽しみにまつていたわけなんです。その當時は、本郷も小さな所帯で、支部長宅にいつばい程度の座談會でした。婦人部長が非常に情熱こめて指導なさると、それを楽しみにして歸つたのです。私は氣が小さいものですから、いつも黙つて小きく聞いていました。婦人部長が私を見つけて、

さん、どう？」いわれました。「とにかく御本尊様をいただいて、ただ嬉しく、生活が安心した」と申し上げたら、「折伏しなさいね」とおつしやつたのです。それから、何もわからないながら、何か責任を感じて、一生懸命折伏し、非常に歡喜しまして、以來コツコツと折伏をやつてきました。

昭和二十八年ごろ

司會 次に二十八年に入りまして、關部さん。

爆發するような盛り

關部 まあ、入信のときというのと、私は非常に生命力が弱くて、人前に出るのが嫌いで、無口ですから、みなさんのように座談會に出て、大幹部に接して感動して入信したという動機ではないのです。母のところへある人が折伏にきた話を、四半半ですから聞かざるをえず、その中に、「絶対幸せになる」という一言がピンときて、何もいわずに信心したわけなんです。座談會へ出なさい出なさいといくらいわれても、生命力が弱いので、どうしても出なかつたところ、組長さんがきてくれて、家で座談會のようなものをやつたのです。初めて出た座談會の雰圍氣は、何かこう爆發するような、明るいたくましいものが盛り上つていて、班長さんが二人で、ものすごい議論を飛ばしているのです。その片隅で小さく

つて聞いていたのを思い出します。今にくらべると、何か同志的な結合というような息吹が強くなりだしたようです。

借金取先で入信

追田 私は、借金取りに行つた先でこの信心をやつていた關係で入信したわけです。あるとき、『お宅は何宗ですか』と聞かれたので、『浄土真宗だよ』とい

答へたら、『イキナリ『念佛無間だよ』といわれ、肚を立てて逆にトッチメようと思つてそこへ坐りこんだのが運の始まりで、(笑) ああでもない、こうでもない、ねばつたのですが、『願いとて、叶わざるなし』と強くいわれて、『願いが叶わなかつたらどうする?』といつたら、『生命をかける!』とその二人のバアサンにいわれて信心することになつたわけです。とにかく、貧乏で、御本尊様をおうけする御供養のお金も、空ビンを賣つて作つたようになつてした。御本尊送りのとき、『今夜座談會があるからきなさい。なんでもわからぬことは質問しなさい』といわれ、まず、勤行のやり方から指導を受け、指導通りにやれば樂だという體驗をしたのです。

子をおんぶして出席

女房が信心に反対なので、座談會へ行くのに、子供の一人をおんぶし、一人をだつこして出たわけなんです。前へ行くと、開

會の辭をやれとか、學會歌を歌えとかいわれる。子供が泣くと、班長が『あなたの心がきちつとすれば、この子供が泣かなくなる。泣かなくなるまで子供をつれてきなさい』といわれるのです。ところが、そうして、何回も座談會に行くうちに、初めは何かとぐずつていた子供が、兩方から膝にもたれて、スヤスヤ眠るようになったので

折伏はこうしてできた

借金の悩みで、入信して三ヶ月目くらいに、會長先生の御指導を受け、『世法も佛法も勝負だよ』といわれたお言葉で、はじめて眞剣に題目を上げたのです。それからどうにか信心らしくなつたわけです。折伏すれば、解決するといわれて、何もわからぬながら、夢中で歩きまわり、自分と同じ念佛の家におつくと、『念佛無間だよ』といつて、『その話を知りたければ、よく話してくれる人がくるから』といつて、座談會に何人か集めては、幹部にきて折伏してもらつたわけです。しまいには、『もう應援なんかしないから、自分でやりなさい』と班長にいわれ、自分でもやれるようになったのです。

今の座談會で感じることは、自分自身が、いろいろな悩みが解決して少しなってきたというわけです。今度の總會で、幹部自身が折伏するんだと決意して、早速折伏し、その體驗を通してその歡喜でみんなと話すと、座談會が盛り上つてくることを痛

感しました。
司會 同じ二十八年の齋藤さん。

マメにさそつてくれた

齋藤 勤行が長いのは、はずかしいのと、なんだかんだ文句をいい、出たり引つこんだりしながら、ひつぱり出されてやつてい

るうちに、だんだん座談會が面白くなつてきたのです。ところが、體驗發表をやれといわれて、すつかりイヤになつてしまつた。あれやらされるのが、どうもつらくてね、頭を下げてかくれているのに、伸び上つて探していられるのです。そうして體驗がすむと今度は學會歌をやらされる。

人材だといわれて

『青年部だからやらなきやダメ』という。まあ、だんだんなれて今日まで来たわけですが、とにかくまあ、よくマメにさそつてくれたということで、眠る(退轉)ひまもありませんでした。

司會 では二十九年の加藤さん。

加藤 二十九年の一月から、私は猛烈な神經衰弱で入院しておつたのですが、その留守に家内が入信したので、退院してきても、頭がポツツとしていて、今までの生活の自信というものが、根本からなくなつていたときで、家内のいうままに、御本尊様を拜んだわけです。最初勤行するとき、神經痛の痛さで、涙が出るほどだつたのが、一週間くらいでなおりましたし、氣持ちもよくなつて、二ヶ月くらいして初めて

座談會へ出たのです。女の人ばかり大勢で、私には別に何の話もありませんでした。が、歸りに何んとかなく、来てよかつたなあと感じたのです。そして題目がよく上げられたのです。

そんなことで二、三回座談會へ出ておりますうちに、佐藤班長が非常に懇切丁寧な指導をしてくれましたが、急に、『あなたは人材になる人だから座談會によく出なさい』といふのです。なんにもわからないのにやらされたのです。班長の奥さんが班長で脇へ坐り、私の家内との間に私がすえられてしまつてやらされたのです。

そのうちに、『どこそこの座談會へ私の代理でいらつしやい』といふのです。信心したばかりでどうしようもないのに、いんですから代理でいらつしやいという。質問があつたらマサカ答えないわけにも行かない。そうすると班長が傍で教えてくれるのです。そんなふうにして、座談會でやらされ、また支部の班長會や、會長講義に引張り出されて、會長先生や理事長先生に接して、非常に歡喜したわけです。そのうちに、座談會に、伊藤監英さんがきまして、折伏のやり方も見習うことができ、私は座談會へ出て、感動しなかつたことは一回もありませんね。

司會 次は新木さん。

嬉しくて嬉しくて

新木 初めて出た座談會は、足立の地區

部長の家であつたのです。みんながさかんに話しているのを聞いたら、『ニワトリと卵とどつちが先だ』なんてやつて居るのですよ。折伏すれば功德が出る、功德が出れば折伏するというのが、ニワトリと卵の関係と同じだというわけなんです。折伏という言葉も初めて聞いたし、變なことを云つて居るなあというのが、そのときの感想でした。その後、座談會へ出てゆくと、

『あなたは女子青年だから何かやらなくてはいけない』といわれ、當時は、司會とか學會歌とか、いわゆる型通りの座談會だつたわけで、全然わからないのに、三法律を説明してくれなんて、やらされたのです。また、なんにもわからないのに、折伏して下さいなんてやらされて、座談會とい

うのは、ほんとうに折伏を覚えるために出たようなものでした。そして、非常に嬉しくて嬉しくて、歸ると反對している父親に、聞いてきた體驗をペラペラしやべつたものでした。

司會 最後に三十年の石黒さん。

入信前ホーキを立てた

石黒 その當時、私は信心に無關心で家で座談會がありますと、障子の陰で聞いていて、時にはホーキを立てたりしたのです。二年間くらい反對しながら、眞言宗の害毒を知り、宗教の正邪が生活を左右することを感して入信したのです。

當時の座談會は形式的で、班長さんが、次は體驗發表やいなさいというふうで、生

命力がなかつた私は、ガタガタふるえた状態でした。この信心に反對すると歸りに何かにつかる。ドブに落ちるかも知れない、というふうな指導だったので。最初とてもこわかつたのです。

現在の組座について

小泉 今までのお話を聞いていますと、

地域的にいつて大分違ふと思うのです。昔活氣のある座談會へ行つた人は、昔の方がよいというし、バカに殺氣立つたところへ行つた人は、どうも昔のは押しつけだつたということになる。今の組座にしても、形式的だというのが、場所によつて大分違ふと思うのです。

小平 みなさんが信心したころ一しよに信心して、退轉していつた人がたくさんあるわけです。みなさんのようにのびてきた人は、よい指導者がいてのびてこられた。今も同じことがいえるのじやないのですか。

形式的の時もあつた

加藤 私感じますのは、二十九年の暮ごろの状況は、卒直に申しまして、一般に座談會がマンネリズムになつておつたと思うのです。ほとんど積極的な發言がないのです。机をちやんとおきまして坐つて居る。實に形式的で、司會とかなんとか指名する

のです。これではほんとうの感激を受けて歸らないと、當時の班長にも申し上げたの

です。どうしてこういうことをする必要があるのだろうか。會合などで支部長の話を聞くと、どうもこういう趣旨じやないようなんです。机なんかとつ拂つて、圓くなつて心から話し合つて、歡んで歸るようになりたいと、しばしば申し上げたことがあります。その後、三十年の第一回の文化闘争のあつたころから、私の方では、そういう形式がなくなりまして、變つてきました。

時間をきちんと

ただ以然として困りましたのは、時間がルーズなことです。六時半というのに、七時半に三人寄ればよい方です。終るのが遅くて、十一時にもなる。そして必ず茶菓子が出るのです。まあ茶菓子などは、家でやるだけでやめるようにしましたが、この時間のルーズな點が、マジメに出てこようとすると人をずいぶん遠ざけてしまいました。

まだまだずい點は、よい話しばかりして、邪宗破折が弱いために、最後の謗法拂いでつまづくことが多いです。今の學會の方針も、初めは、ちよつとまとつたのです。それは、大きな座談會に慣れていたので、五人六人じやどうにも淋しいと、大勢集つてやりたいという氣分が私共の地區ではありましたが、二、三ヶ月間でそれがなくなりまして、最近では、組座のほんとうの氣持ちを擱んできているようです。マンネリズムを打破してだんだん良い方向つて居ると私は思うのです。

小田垣 二十四年ごろは、形式ばつた感じは少しもなく、ただ嬉しくて歸つてきました。時間の點は、大體七時ごろまでには集つており、終りはやはり十時ごろになりましたね。一應閉會してから、先生を圍んで話をすることが多うございましたから。赤荻 私の方も、七時から初めて九時半ごろまででした。閉會後はやはり同じよう

今は一年の信心で中心者

小泉 今その、座談會へ行つて感激したとかいろいろな話が出ましたが、だんだん昔とくらべると、學會員の密度が變つてきていますね。それから昔にかえれば、僕らが信心したころには、牧口先生がいなければ座談會にならなかつた。それから終戦後も、戸田先生がこなれば座談會にならなかつた。そのうちに、五年も六年も修行して、大體のみ込んだ人が、お前ら一人でやつてこい、ということになつたのです。また當時(昭和二十四五年ごろ)座談會の中心になつた人というのは、そうとうの闘士なんです。昔から千軍萬馬でやつてきたのです。だから、たしかに、ピンとくるころがあつたでしょう。その點にゆきますと、今はね、去年信心してもう班長や班擔になつていて、その人が中心になつてやるという状態です。大部違ふでしょう。信心年令が、それは氣分が違ふと思うので

自分の成長を忘れてる

また、こういうこともいえるのです。自分が成長してきますと、バカに下が幼稚に見える。昔と比べたら成長した自分というのにはね、昔と比べて成長した自分であるということに気がついていない人はいない。元つから、自分はこうだつたと思つてゐるのです。(笑)だから、人があんまりダラシないと思つて、叱りつけてしまうのです。自分は非常に成長したのだ、まあ慣れたのだという頭がないとまずいのです。

「この話は、俺は何遍もやつたから、いつも同じ體驗じやつまらないから」なんて思つて、そうたくさん體驗持つていないから、そこで、理くつてもいわなきや間に合わないと理論に走つてしまふ。そういうところから、今の觀念的なゆき方になつてきたのです。

數多く座談會に出よう

何よりも「場を踏め」というのです。この間も、秋田で話してきたのですが、まあ、たくさんの人から話しを聞くとする、『いい話だなあ』と思つて聞く。その次のも、『全くだいなあ』と聞く、そして前のをもう忘れちゃう。(笑)そうして終つて、全體に『あ、今日はよかつたな』と思つても、何がよかつたのか、サツパリわからない。みんなそれなんですから。ですから、小田垣さんなんか、さつきの話の

ように、盛んにひつぱつて行かれたり、ひつぱつたりした體驗があるでしょう。そして、座談會に出てよかつたと思つた、なんていつているが、何がよかつたんだかわからないのだよ。今でこそ、昔の座談會は、とても活氣があつたとか、なんとかいつていますけれどね、みんな忘れてゐるのです。(笑)どんなことがあつたのだと聞かれても、こんなことだといえないでしょう。タマに一言くらい覺えている程度でしょう。だけどその一言で信心したわけじゃないのだよ。たくさん言葉で信心してゐるのです。だから、どうしても、數多くひつぱり出さなきやならないということがいえるのです。やつぱり年取なんだよね。結局、座談會には、數多くムリにもひつぱり出してやらなきやならないことですよ。

集つた人を根本に

もちろん今日の座談會は活氣があつたとか、なかつたとか、良かつたとか悪かつたとかはね、中心になる人物なんかのいうべき言葉じやないと思う。そこへ来た人の感じだと思つて。こつちが感激しないつたつて、向うが感激していればいい。今日の座談會はよかつたなんていうので、よくあることですが、變なヤツがきていて、テールをたたいて盛んに論争する。そうすると片つ方では、『イヤになつちやう、またアレだから』と思つているのに、(笑)やつてゐる當人は『今日のは良かつた』なん

て。(爆笑)そういうことがずいぶんあるのですから、悪かつたなんて、きめるわけにはゆかない。なるべく、ほんとの茶のみ話でもいいから、そういう場面に一回でも多く出るようにして、つづけてゆかなきやならないと思う。

一人でも立派にやれる

森下 お互いに心ゆくまで話し合えるということが、組座のよいところですね。この間私が、深川の方の座談會へまゐりましたら、組長一人しかいないのです。深川まで行つて、何か話してわからしてこなければ困ると思つて、私も惱んだのですよ。そうしたら、組長の御主人が歸つてまいりまして、その方は拜んでいないのですよ。自動車の運轉手をしてゐるのですが、給料ももらえないし、ひどいアバラ家にいるんです。信心を疑つてゐるわけなんです。私が『絶対なんだから、とにかく拜んでごらん』といつたら、『あなたは非常識だ』と怒るのですよ。會社がツブレかけてみんな給料ももらつていないのに、俺だけ給料ももらえるわけがない、というのですよ。『できなことを可能にするのが御本尊様のお力なんだから、とにかく理窟抜きで拜め』といつて歸つてきたのですよ。そうしたら二日目に、『今まで一錢ももらえなかつたのに、九千圓もらつた』といつて飛んできたのですよ。それからその御主人が、奥さん以上に一生懸命信心するようになつたのです。わずか一人の組座でしだけれど

もね、一人でもわかつたということは、組員全體にわからせられることだと思つて、とても嬉しかつたのです。大勢集つたのばかりがいいということしやないのですね。

小泉 座談會で一番要望したいことはね、學會そのものにたいする不平、信心にたいする疑問を、ありのままにいわせることです。そういうことが出たときに、『ああ良い質問だ』といつてやらなければならぬのだよ。それをね、『ナニツ』なんて(爆笑)これがコワイのです。だれだつてあるんだもの、だから、ほんとうの實狀を知ればよいのです。組員は、ほんとうは何を考へてゐるかを知ることです。怒つたり押えつげずに聞いてやらなきやいけない。向うのいい方がとがつていても、こちらは柔らかく入れてやつて、そこで解明してやれば、恐らく十人の人が集つていけば、一人が不平を出したとすると、みんながそうなんだ。一人にたいしねいに説明してやれば、みんながわかるのです。

しかしまた、どういつてもわからない人がいるものな。(笑)説明の要のないのがありますよ。それは、そのときの狀況があると思つて。

自分の家で開きたい

柏原 昔と今との違いで感ずることの一つはね、今は、班長さんは組長さんと相談で座談會を開かなければならぬみたいになつてゐるのです。昔は、開きたい人が中心になつて開いてゐるのです。自然的な

のね。その家の人が、一番真剣なんです。どうしても自分の家で座談会を開きたい、こういう新しい人を集めたい。その中心になつた人の友だちとか、仲間がいるわけでしょう。いわゆる今の組員ですね。そういう人たちがみな協力して、ここで開きましょうという気がそろつているわけなんです。集める方も一生懸命だし、誰かにきてもらおうという気持があるのね。今は、班長さんがくるだろうとかね、それもありアテにもしていないのよ。くるからよく見せなきゃならないというふうな気持があるでしょう。昔は、そうでなくて、きてほしいと願つているのよ。ですから、行く方もそれに應えようという気持で行く、そういうところがとても違つているのじやないかと思ひます。形式的になるとか、マソネリズムだとかいうことは、そういうところから、生まれてくるのです。昔は、何回その家で開いても、空気が生き生きとしていて、司會者なんていうのはなかつたわね。そのやつてほしいという人が、司會者になるわけなの。

班長・地區部長は組長の ためにある

柏原 支部長のために地區部長があり、地區部長のために班長があり、班長のために組長が必要みたいな感じでしょう。そうではなくて、組長を立派にするために班長があるんでしよう。その班長の及ばないところを何とかするために、地區部長が必要

なんでしよう。それをまた統率してゆくために支部長があるんでしよう。組長あつての支部長ということになる。

小泉 組織なんていうのは、一番末端のためにある。このごろ信心した人のためにあるのだよ。われわれはもう組織はいらないのだ。さそれなくても出てゆくのだから。(笑) それを考へてやればよい。そうならば座談会で出席が悪いといつて、ちやんと出てきている人に向つて怒るようなことはなくなる。きている人に、きてない人の文句いつたつてしようがないじやないか。(笑) 二人でも三人でもいいですよ。僕も、月に四回や五回くらいは組座談会へ出るのですよ。行つてみると、組長や班長しかない所もあるんだよ。これはとても氣樂でいいんだよ、多くの者がいいないから。(笑) 充分に話しができる。そうすると、『ああこういうのだつたら、みんなムリにも呼ぶんだつた』と、そういう氣持ちが起るでしょう。それを起こさせればいいのだよ。それを、『今度くるときには、連れてこいよッ』なんてね。(笑) そうすると、『なんだ、イパツテやがつて、あの野郎のために集まるんじやないぞ』ということになる。自分で、擔當者の自分を立派にしようなんて考へて行くから、少ないと面白くないのだよ。僕なんか行つても、奉つてゐるからね、どんなにかコワイ人かと思つたというのだよ。(笑) こうして話してみたら、別にオツカナイ人ではないとい

指導は體驗で

古い人なんか自分の體驗だけだつていいですよ。ものをいう場合は、必ず體驗を入れて、その言葉を裏づけなきゃならないし、また體驗を言葉で裏づけるのです。そうしないと、人は何んだかわけがわかりませんよ。くどい體驗も面白くないなあ。こゝろ云つたああ云つたという問答式の體驗なんかダメですよ。よく要點をとつて、餘計なところは取つて、話してやつて、模範を示さなきゃならないと思う。地區部長、班長ともなつたら、その邊まで心掛けた方がいいんじゃないかと思う。

今後の組座に望む

司會 今までも、いろいろのお話しが出ましたが、將來の問題として、特にこゝろが注意したい、徹底してゆきたいということがありましたらお願いします。

入信決定は自然に

小泉 座談会で入信決意させるわけですが、その決意をさせるには決意をさせるものがあるんですからね。ほんとうに邪法というものは、いけないのだ、正しい佛法がここにあるのだと、それがはつきりして向うで決意ができるのだからね。ですから、決意したときすでに、謗法なんかあつてはならんということがわかつていなきやならない。認識なんていうとムズカシイけれど

も、物事をわかるには、比較しなければわからないのだから。正法と邪法との比較をしながら認識させてゆくことから、一しよなんですよ。よく、こつちのことばかりズーツとやつて、只今より邪法の話をしますなんて(笑) そんなのではダメだ。最後に謗法拂いについて一言なんていうことになる。決意したときには、そんなことをいふ必要のないようにわかつてゐるはずだ。體驗にしたつて、前にはこんな信心して、生活がこゝろなつた。そして、この信心してからこゝろなつたというのが、形式とはいへ、認識させる上に必要でしょう。過去のことがわからなくちゃダメだ。邪法の害毒正法の功德が一しよに並ぶわけなんだ。

流れたなんていうのは、大ていそこが徹底していないからだ。そして家族の反對なつていう問題が起る、あんまり早く入信決定をあせつて、家族の構成も何もこつちで掴まないでやると、問題が起ることがある。

柏原 まあ今日は、いろいろと話しあつてみましたが、最後に望みたいことは、私たちの一軒々々の家庭、末端に至るまで、御本尊様がありお題目を唱える人がいるなら、必ずその家で座談会を開けるようにしたいということですよ。幹部も單に座談会を擔當するとか、廻るとかというのでなく、自ら折伏の先陣に立つて、組座談会を盛り上げてほしいと願ひいたします。

司會 それでどうも遅くまでありがとうございました。

戸田先生の人生録

小説『人間革命』の出版を喜ぶ



すでに五月十九日號(二七九號
五面)の聖教新聞紙上に紹介され
ているように、今度いよいよ戸田
先生が自ら執筆された、先生の精
神的實録ともいふべきで、小説
『人間革命』が近く發刊される運
びとなつた。一讀して讀み終るま
で書をおくあたわずという本はめ
つたにあるものではないが、この
『人間革命』こそあらゆるイミで
われわれ學會員はもとより日本の
あらゆる人人に讀ませたい本だと
思うのである。これは先生自身が
質問會でニコニコ微笑されながら

『これは學會員にうんと買つても
らつてうんと賣れたら私恥だか
ら、全國的に賣つてやろうと思つ
たね、ベストセラーというのがあ
るだろう』とおつしやつていろと
ころでもある。

しかして、その内容について
は、ここでつたない紹介の筆をと
るよりも、戸田先生の『人間革
命』後記が内容のすべてをわれわ
れの眼前にあらわしてくれま

で、ここに再掲させていただきます。
(これより『人間革命』の後
記)

人間革命の真髓

今日の創價學會は北海道から九
州にいたるまで、日本全國にわた
り六十數萬世帯の會員が廣宣流布
の大願のもとに日夜闘争をつづけ
ている。しかし、このように世間
の注目をあびるにいたるまでに
は、ある時には順風帆をあげ、あ
る時には嵐に打ちひしがれ、ある
時は冷たい氷雪に堅くとざされ埋
れた永い永い闘争の歴史があつ
た。これらの期間を通じて一貫し
た『學會闘争の精神的支柱』を小
説として表現したのが、この『小
説・人間革命』である。すなわち
本書は小説で表現した『生きた折
伏教典』である。

登場する人物にはそれぞれのモ
デルはあるにしても、もとより小
説であつて、實在した人の列傳で

はない。前述のように、この小説
の中から『學會活動の骨髄』『人
間革命の真髓』を讀み取つてほし
いと念願する。また本書が廣く世
間に流布して、學會の根本精神が
認識され、ともするとありがちな
世間の誤解を一掃する助けともな
らんことを願うものである。

草創時代における初代會長牧口
先生の御努力廣宣流布への御確
信、どんな裏町までも、どんな家
庭までも折伏の陣頭に立つて進ん
で行かれる御姿、八軒長屋の一軒
々々の家庭がいかに革命し、一人
々々の人間がいかに宗教革命を押
し進めて行くか、それは二十數年
後の今日においても、全国各地に
おいて實踐され闘争されつつある
現實の姿でもある。しかしして大御
本尊様の偉大な功德と、峻嚴なる
罰は、また、われわれの一人もも
れることなく體驗するところであ
る。

一方において、國家の勢は、
昭和十二年の支那事變勃發、十六

年の太平洋戦争の勃發とめまぐる
しい轉變をつづけるその中で、國
民は稀有の大戦果に熱狂し歡喜し
ているうちに、牧田先生の折伏
活動は黙々とつづけられて行く。
しかし、その大戦果も静かな折伏
活動も永くは續かなかつた。國難
の嵐はひたひたと學會活動の前途
を襲い、露骨な迫害となつて表わ
れてきた。

合同問題と國家諷曉——軍閥の
權力を背景として、日蓮宗各派を
身延に合同させようとする隠謀、
これらの陰謀に應じて大石寺の内
部に動く笠公の策動。戦局は日々
に敗色を濃くしつつあるとき、牧
田先生は決然と國家諷曉をおおせ
出された。『一宗の安泰を願う
か、それとも、國家の安泰を願う
か、一宗一派の興亡は問題じやな
い、私の心配するのは國家の破滅
である』との牧田先生の御精神こ
そ、宗祖日蓮大聖人の大折伏精神
に他ならないと確信する。

さて戦況は日増しに悪化しつつ
ある民族の危機、彈壓による創價
學會の危念を眼前にして、學會の
内部にすら動搖の色が濃い。この
時において、會長に殉ずる決意を
示し一歩も引かない處理事長。し
かして處理事長は大折伏闘争とと
もに、國家の危念を救わんがため

の經濟闘争の布陣まで一歩々々押
し進めようとする。折も折、當局
の不當なる彈壓は、たちまち會長・
理事長を始め、學會の幹部十數名
に襲いかかつた。

處理事長は、高輪警察署・警視
廳・東京拘留所と、冷たい留置場
を轉々とする。留置場の不潔や、
食べ物不足や看手の暴力と闘い
ながら、日夜家庭を思い事業を思
い、恩師の牧田先生を思う切々の
文字——それは單なる涙の集録で
はない。その間にいよいよ眞の人
間革命と、宗教革命の基磐が培か
われて行く。

最後に法華經の涌出品におい
て、絶対の確信に立ち、『ぼくの
一生は決つた。この尊い法華經を
流布して生涯を終るのだ』と叫び
孔子に比べて『彼(孔子)に遅る
ること五年にして惑わず、彼に先
立つこと五年にして天命を知る』
と叫んで終る。

このようにして育つたのが現在
の創價學會である。會員諸氏の多
くは八軒長屋の家庭革命と、處理
事長の經濟的な成功を見て、日夜
そのような功德を願つてゐるわが
身に氣がつかれるであらう。しか
しそれは大御本尊様の大利益のわ
ずかな一面にすぎない。眞の人間
革命はまだまだこれからである。

三類の強敵と闘い抜き、三障四魔を断破して、眞の大利益・人間革命の眞髓を把握されんことを希望する。

それがためには平素の信心が第一である。創價學會にたいする世間の注目は、一時は好奇心の上から紹介・批判・悪罵等がつづけられていたが、今後はますます根強い除敵な迫害となつて表れるであろう。一日一時もゆるがせにすることをなく闘い抜くに當り、せめて本書が會員諸氏の心の糧ともならば幸甚である。

さらに日本國民の一人一人が本書を手にして、眞の佛法と眞の幸福はどこにあるかにめざめられんことを念願するものである。

昭和三十三年六月十日

創價學會々長

戸田 城 聖

折伏の仕方を満載

『まあ読んでみてくれ、折伏の仕方を全部書いてあるんだから』とおつしやるとおり、初代牧口先生時代の折伏のやり方が、戸田先生が直接に長屋の一軒一軒に飛びこまれて、一對一で折伏や指導をなされている姿が随處におりこま

ている。(以下、その一、二)

『御本尊さまを、紙に字が書いてあると思うの！そりやいけないわ！紙でも字でもない、佛さまじやないの！』

おつやの顔が眞赤になつていらる。

『正一君、牧田先生は、こんな風に仰言つていたよ』

嚴さんが姿勢を正して話しはじめたので、正一も箸を持つていらなくなつた。

『紙に書いた文字に力がないと思ふのは、浅はかだ。紙に文字が書かれていれば、それは紙でもない文字でもない。ある力の表現……あらわれになる。たとえ、森田正一の馬鹿野郎と紙に書いてあつたとする。君は、……(中略)……』

『社長！ そういう風に話していただくのとよく判りますね！御本尊さまは紙でも文字でもない、佛さま……もう、疑いません！』

正一が眼を輝かしてというと、嚴さんは嬉しそうに微笑んで茶碗を取つた。

小説『人間革命』Ⅱ B6版

四百八十頁・二百八十圖Ⅱ東京

都千代田區神田神保町二丁目三

九番地 精文館書店 發行

『人間革命』を読んで

彼の有名なデューマーの嚴窟王

は、十數年にわたる牢獄生活の中から莫大な財寶を手にして、自分を陥し入れた者にたいする復讐の念にもえて出獄したのであります。小説『人間革命』の結文において『彼(孔子のこと)に運ぶること五年にして惑わず、彼に先立つこと五年にして天命を知る』と叫んで出獄の日を待つ嚴さんは、身に地涌の菩薩としての確信を最上の財寶としてつけ、日本および全東洋民衆救済の大慈悲心に立つことを誓つております。前者は金銀財寶によつて個人的復讐を果そうとしたのであり、後者は同じ牢獄の苦惱の中から自らの生きべき天命を悟つて、私怨を離れ崇高な民衆救済への大願に起とうとしていたのであります。

の人間革命をなしとげた嚴さんの精神は全篇に一貫して流れ、脈々として讀む人の胸をうつものがあります。その結論にいたるまでの森田正一、福島政雄の更生や邪教によつてドン底生活におちたおとらバアさん、キツネつきの母親に死ぬ思いの鈴木一家等々の挿話や事にあたつての人々の心の動き等は、みな私どもの身近な、むしろ私ども自身の疑問や喜びを物語つていようようにさえ思われるほど、信仰へ向けられる庶民の心を如實にほりさげております。その具體的な登場人物の生活によつて、宗教によつてなぜ不幸が起るのか、なぜ御本尊に題目を唱えることによつてのみ功德があるのか等の疑問を解決し、入信してからの勤行の仕方、折伏の實際等にいたるまで一般の人々の宗教信仰への目を開き、初信者への信心の指導書としての力を持つている點に『人間革命』の面目躍如たるものがあります。加えるに、その構成の裏づけとなつてゐるものは事實學會の歩んできた闘争の歴史であり、初代会長より受けつがれたところの學會精神の發露であります。

暗い戦争を背景に學會への壓迫もその力をまし、宗内の統一も亂れがちで學會の内外ともに多事多難であつた當時は、また現在もこれから先の永い將來においてもふたたびやつてこないとは斷言できません、事實現在も種々の形で魔がきそつております。事にあたつて動搖をかくし切れなかつた人々の中にあつて、嚴然と牧田先生を守つた嚴さんの姿こそ私どもの學ぶべき道であるといえましよう。

牧田先生の貧しい人々にたいする慈悲と老體をかえり見ぬ折伏活動に敬服し、嚴さんの父親を思うような先生への情愛に泣き、森田君や福島君の若さと、ほのかな愛情にほほえみつつ、登場人物が次々に人間革命されて行く姿に、自分の信心がふるい起されてくるのを感じます。

最後の嚴さんが法難の功德によつて發迹顯本された姿は大聖人様が龍の口において發迹顯本された御姿にも似て、深い感動と感激をおぼえます。

一般の人々に眞實の佛法をしらしめる上にも、また初心者の信心確立の上にも全學會員必讀の書であります。(C)

永遠の幸福

善惡につけ御本尊を忘るな

土屋 實



世の中には不思議なことが、ずいぶんあるものだ。くるうことな

いつてはいるが、一人として眞の「生命の實體」を説き切つたものはないのである。即ち無始無終三世にわたる永遠の生命という不思議の實體を説き願わしたのは佛法以外になく、説き切つた方は日蓮大聖人様ただ御一人のみである。

「ひだるしとをわば餓鬼道をしへよ、さむしといわば、八寒地獄ををしえよ、をそろしといわばたかにあえるきし、ねこにあえるねずみを他人とをもうことなかれ」云云。(聖人御難事抄) また

字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り與え給う」(觀心本尊抄)とのおおせである。即ちこの御本尊様をおがめば、かならず佛になれるとおおせである。

われわれも御本尊様を眞劍におがむところに、かならず佛の境涯をつかむことができるのだという確信が生れる。そうならなければ、毎日實際に生きていて心配にならない。

く年ごとにやつてくる春夏秋冬。同じ生命體でありながら、ちがう人間と犬や猫。これらはあたりまえなことであるが、實に不思議なことであり、要は因果關係がわからぬ故である。このように、われわれの能力では判断しえぬ事柄が數多く存在する。ことに生命に關することはそうである。

「此の娑婆世界にして、きじとなりし時は、たかにつかまれ、ねずみとなりし時は、ねこにくらわれき或はめこのかたきに身を失ひし事、大地微塵より多し法華經の御ために一度たり失うことなし」(種御振舞御書)實に厳しき、三世の生命を御示し下された御書である。

戸田先生がよくおつしやることに、「佛さまで病氣されている佛様もないし、貧乏な佛さまがあるわけはない」と申されている。權教の佛にしても、迹門の佛にしても、みな立派なものである。このあらゆる佛の功德がこの御本尊さまにそなわつていらつしやるのだから、われわれが今どんなに貧乏しても大丈夫である。體を悪くしても大丈夫である。かならず佛のようになるのだという確信が生れるであらう。

末法の佛さまは日蓮大聖人さまである。大聖人さまのごとき首を斬られんとするときも、「これほどの悦びをば、わらへかし」とおつしやられ、また佐渡へ流されて、無人島にも等しい當時の佐渡で、嚴寒のさ中、暖を取るべきすべもなくお暮しになられている中で弟子にいろいろと教えられ、開目抄、觀心本尊抄という大聖人さまの究極の大法門をおあらわしになられている。なんの御心配もなく……これこそ佛様でなくてはよくなしえぬことであり、佛さまの

境涯の一端がうがえるような氣がする。子供二人をかかえて主人と死別した一夫人が、自分は二度の病魔を御本尊様を拜み切り、護祓符をいただき、乗りきつた結果、一萬圓の收入で生活が安定したという體験を聞いたことがある。

たとえていうならば、生命は生まれたときに發生し、死んだときに消滅するのであらうか。また現世だけではなしとしたり、死んだらその生命はどこへ行つてゐるのであらうか。

「能く能く秘藏して深く此の理を證し三世の諸佛の御本意に相叶い二聖、二天、十羅刹の擁護を蒙むり滞り無く、乃至内よりは勸發し外よりは引導し内外相應し因縁和合して自在神通の慈悲の力を施し廣く衆生を利益すること滞り有る可からず」(三世諸佛總勸文教相慶立)と述べられている。即ち大御本尊様を受持し、修行學に純心に修行しつづけたときの死後の生命の狀態であると拜するのである。

「佛さまで病氣されている佛様もないし、貧乏な佛さまがあるわけはない」と申されている。權教の佛にしても、迹門の佛にしても、みな立派なものである。このあらゆる佛の功德がこの御本尊さまにそなわつていらつしやるのだから、われわれが今どんなに貧乏しても大丈夫である。體を悪くしても大丈夫である。かならず佛のようになるのだという確信が生れるであらう。

末法の佛さまは日蓮大聖人さまである。大聖人さまのごとき首を斬られんとするときも、「これほどの悦びをば、わらへかし」とおつしやられ、また佐渡へ流されて、無人島にも等しい當時の佐渡で、嚴寒のさ中、暖を取るべきすべもなくお暮しになられている中で弟子にいろいろと教えられ、開目抄、觀心本尊抄という大聖人さまの究極の大法門をおあらわしになられている。なんの御心配もなく……これこそ佛様でなくてはよくなしえぬことであり、佛さまの

境涯の一端がうがえるような氣がする。われわれも御本尊様を眞劍におがむところに、かならず佛の境涯をつかむことができるのだという確信が生れる。そうならなければ、毎日實際に生きていて心配にならない。

同じ人間でありながら、男女の差、貧富の差、健康なものと病弱なもの等々、同じものは一人としてなく、皆それぞれにちがつた特長を持ち、そこに一つの個性を發揮して活動しているのである。

「佛さまで病氣されている佛様もないし、貧乏な佛さまがあるわけはない」と申されている。權教の佛にしても、迹門の佛にしても、みな立派なものである。このあらゆる佛の功德がこの御本尊さまにそなわつていらつしやるのだから、われわれが今どんなに貧乏しても大丈夫である。體を悪くしても大丈夫である。かならず佛のようになるのだという確信が生れるであらう。

末法の佛さまは日蓮大聖人さまである。大聖人さまのごとき首を斬られんとするときも、「これほどの悦びをば、わらへかし」とおつしやられ、また佐渡へ流されて、無人島にも等しい當時の佐渡で、嚴寒のさ中、暖を取るべきすべもなくお暮しになられている中で弟子にいろいろと教えられ、開目抄、觀心本尊抄という大聖人さまの究極の大法門をおあらわしになられている。なんの御心配もなく……これこそ佛様でなくてはよくなしえぬことであり、佛さまの

境涯の一端がうがえるような氣がする。われわれも御本尊様を眞劍におがむところに、かならず佛の境涯をつかむことができるのだという確信が生れる。そうならなければ、毎日實際に生きていて心配にならない。

境涯の一端がうがえるような氣がする。われわれも御本尊様を眞劍におがむところに、かならず佛の境涯をつかむことができるのだという確信が生れる。そうならなければ、毎日實際に生きていて心配にならない。

こうした生命の不可思議については、古來より、幾多の學者、聖人、賢人が出現して、いろいろと

果關係について、大聖人様は信心微弱のわれわれに、

「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五

福運のある祖國に

——『明治天皇と日露大戦争』をみて——

黒柳明

『旅順開城約なりて 敵の將軍ステッセル 乃木大將と會見の處はいずこ水師營』

明治三十七年十二月五日未明、金湯城地の堅塁、二〇三高地にたいする最後の肉弾による總攻撃が開始された。血はほとばしり、肉は飛び散り、たちまちの内に壘々たる屍の山がさげすかれた。豫想もしなかつた新兵器機關砲の前には先祖ゆずりの大和魂も役だたず、電気鐵線網は攻撃の前進をはばんだ。しかし乃木希典大將のひきいる第三軍、第一師團、第七師團、歩兵第一旅團の將兵は、もはや、一歩も後へ退くことを許されなかつた。八月以降、前後二回にわたる總攻撃は完全に失敗し、空しく死傷者の數をますのみ、五ヶ月をへても露軍の守りは微動だにもしなかつた。しかしあらゆる事情が二〇三高地の早急の陥落を迫つていた。屍が山をなし、血の海をなした。

つた——死を恐れぬ鬼神のよう
に。『天皇陛下萬歲！』死にのぞ
んで將兵の口よりほとばしる叫び
こえが、機關砲のひびきをもかき
けすかのようであつた。しかし、
翌三十八年一月一日、さしにも難
攻不落をほこつた二〇三高地も陥
落し、同五日には水師營におい
て、乃木・ステッセル兩將軍の會
見が行われた。文字通り、わずか
高さ二〇三米のこの丘にたおれた
日本兵は、乃木司令官の次子、保
典中尉をはじめ五萬五千の多きに
のぼつた。

朝鮮海峡にて敵艦隊の來航を待
ちたるわが聯合艦隊は、西方哨戒
の任にあたりたる假裝巡洋艦・信
濃丸より二〇三區に敵艦隊出現の
しらせをうけた。
時、正に明治三十八年五月二十
七日午前三時三十分であつた。敵

艦隊、朝鮮海峡を通過するや、あ
るいは北海方面に迂航するや、議
論は百出して結論の出ぬまま時を
待つた大本營においても、一往、
この報に接して安堵の胸をなで
おろしたのである。東郷司令長官の
ひきいる聯合艦隊はただちに出動
し、各隊それぞれ豫定の作戰配備
についた。同日午後二時ごろ、わ
が主力艦隊は筑前沖の島附近にお
いて、朝鮮海峡東水道を通過し、
一路ウラジオストクに向わんと
する露國のバルチック艦隊と遭遇
した。ロゼストウエンスキー中將
を司令長官とし、三十八隻よりな
る大艦隊は、新兵器機關砲と速射
砲を裝備し、その堂々たる威容は
戦わずして敵をのんでゐるかのよ
うであつた。

戦闘は午後二時八分、我彼の旗
艦、三笠とグニャーシ・スウォー
ロフの距離七千米をもつて、敵の
發砲によつて開始された。
「皇國ノ興廢コノ一戦ニアリ、各
員一層奮勵努力セヨ」
Z旗をマスト高くかかげた旗艦
三笠を先頭に、わが艦隊は『取艦
一杯！』戰術上もつとも危険であ
る敵前二直角回轉により、T字作
戰で有利の陣地をしめ、その後は
快速を利用して常に敵の先頭を壓
しつゝ戦つた。激戦およそ四十分

福運あつた明治時代

この戦いのため連日猛訓練に勤ん
できた聯合艦隊と、半年にわたる
長航路を経て後のバルチック艦隊
の將兵の志氣は、そのまま實戰に
現われ、露艦は次々と猛火に包ま
れて列外に落ち沈没していった。
そして二十七・八日の兩日の海戦
で、そのほとんどが撃沈または捕
獲された。

福運あつた明治時代

以上が、新東寶映畫『明治天皇
と日露大戦争』のクライマックス
の二つのシーンである。天皇のた
めに、祖國日本のため、危険をか
えりみず、死を覚悟で戦う將兵の
心理状態は、われわれ昭和生れの
者には良のみこめないものがある
。しかし、この二つの戦闘にさ
いして、明治天皇のとられた決斷
力の強さと人をみぬく力の偉大さ
には、非常に感服せられるものが
ある。

福運あつた明治時代

すなわち二〇三高地攻略にさい
して、あまりにも期間がのびたの
で、閣僚の中には國民の餘論とし
て、『乃木大將を更迭すべし』と
の意見が強く、最後の斷を天皇に
願つたところ、『更迭まかりなら
ぬ、乃木にすべてをまかせよ』と
の聖斷をあたえ、その後、間もな
く二〇三高地に日章旗がひるがえ

福運あつた明治時代

つた。
また日本海々戦にさいしては、
前述したごとく、バルチック艦隊
が朝鮮海峡を通過するか、あるい
は北海に迂回するか分らぬため、
聯合艦隊を二分して敵に備えるべ
しとの意見が強く閣僚の中におこ
つたが、またもや『東郷にすべて
をまかせよ』との御聖斷により、
結果的に大勝利を博したのであ
る。

福運あつた明治時代

廣島に大本營を移し、戦場の將
兵と苦しみを分けあい、出征する
兵士を一人一人いたわり、開戦に
さいして、あくまで平和的解決の
道をもとめ、國民に戦争の苦を味
わせまいとした。この天皇あれば
こそ、あのような大勝利をえたの
であらう。しかし、映畫は最後に
かく結んだ。『この戦いにより、
今まで一島國であつた日本は、世
界の列強國に肩をならべるようにな
つた。今後とも、われわれが協
力して國の發展のためにつくそう
ではないか』と。

福運あつた明治時代

日本の國自體の福運の綱も、明
治・大正・昭和の初期とつづいて、
今や完全にきれてしまつたのであ
る。明治神宮に明治大帝いますれ
ば、靖國神社に國のために散つた

幾多の英雄の魂、やどるならば、アメリカ空軍に爆撃され、炎上するわけがない。「諸天善神、この悪國を去る」との御言葉の通り、もぬけのカラである證據ではないか。

*** **

われわれが護持している御本尊様は、天皇でさえも拜まなければならなくなるといふことは、三大秘法抄に明らかであり、また紫宸殿の御本尊が御本山大石寺に御安置してあることもよくわかる。過去の軍人が生命をとじて天皇に

仕えた幾百、何千倍もの真心をもつて、御本尊様にお仕えしなければならぬのである。

折伏こそ日本を救う

去る春季總會においても、會長先生の『時になつた信心は日蓮正宗一つしかない。そして時になつた信仰の仕方は折伏である。折伏は慈悲をもつてやれ』との御言葉のごとく御本尊様に體當りをしての題目をあげて、折伏に邁進しなくてはならぬのである。總會にのぞんで本部旗につづいて會長先生を始め大幹部が入場するのを見たときの感激、さらに支部旗、部隊旗が見えたときの新たなる感激、ああ、われれ末法に生を受けて

折伏の大師匠戸田會長先生をいただく創價學會員になれし嬉しさよ、だれしも感激また感激また感激で頬を涙でぬらさない者はなかつたであろう。もうすでにあれから一ヶ月を經ている。この一ヶ月間、はたして、あゝのときの感激、あゝのときの決意を實行に移したで

候補講義の中から

—— 楽しい折伏、楽しい教學 ——

正木 郁恵



あろうか。よくおたがいに反省して、今月こそは悔いのない闘争をしようではないか。そして、かつてのごとく、祖國日本を福運のある國にできるのは、われわれ學會員の力による、折伏のみなのである。(以上)

淡いブルーの天空の下を太陽に輝き出された若緑のかぐわしい匂いが、さわやかに風につれて流れてきます。

希望にみちあふれた初夏の今日このころ……

春のはじめに始まつた第九期の候補講義は、大阪の闘争を中間に、はさんで終了し、一ヶ月の準備期間に入り、ました。私は三世諸佛總勘文抄と御消息文を講義させていたいでいます。

總勘文抄に思う

この間、總勘文抄の『苦莊周と云うもの有り夢に胡蝶と成つて一百年を經たり苦は多く樂は少く汗水と成つて驚きぬれば胡蝶にも成

らず百年を經ず苦も無く、樂も無く皆虚事なり皆妄想なり、乃至此の釋は即身成佛の證據なり夢に蝶と成る時も莊周は異ならず寤に蝶と成らずと思ふ時も別の莊周無し、我が身を生死の凡夫なりと思

う時は夢に蝶と成るが如く解目解思なり、我が身は本覺の如來なりと思ふ時は本の莊周なるが如し即身成佛なり、乃至誰の人か虚夢の生死を信受して疑いを常住涅槃の佛性に生ぜんや、乃至然るに此の金剛不壞の身を以て生滅無常の身なりと思ふ解思は譬えば莊周が夢

の蝶の如しと釋し給へるなり』という御文の講義をいたしました。貧乏や業病などの生死の世界に煩悶している状態を、夢をみて苦

しんでいる状態にたとえ、はつと一瞬、眼がさめて、今まで苦しんでいたことが虚事となつて我にかえつたとき即身成佛・本覺の如來なりと莊周の夢の譬えをもつて凡夫即佛であるとおおせられるところですが、拜讀すればするほど、わけがわからなくなつてきて、思わず『不思議ですね、まつたく不思議ですね！ 生活も住む場所も同じでありながら、夢からさめると、苦しまなくてもよいものを苦しんでいたみたいの本心にかえる——即身成佛できるなんて、すごいですね』ともらしてしまいました。

現在候補講義が行われている三重秘傳抄にも、佛が十界五具を説いた目的は、凡夫の劣心に佛界を具足していることを説かんだためであると書かれています。

われに佛の生命あり

戸田先生が御經文のお講義に秘妙方便を窮子のたとえをもつてお話しになられますが、みじめな窮子が長者である父親にやとわれ二十年にしてはじめて、みんなの

前で「これは私の子供です。今日かぎり財産全部はこの子のものです」といつたとき、「無上寶聚・不求自得」と隨喜した……財産をもちつた窮子は、もう立派な長者である。雇人であつたときも長者になつたときも同じ人間である。貧乏人が長者になるから妙だ。われわれは一介の凡夫でどう考えても佛さまではない。ところが、大聖人様はわれわれは佛であるとおおせられている。もともと佛なんだから成佛するのはあたりまえなんだよとおつしやつたことを思い出します。また「われわれの心中に南無妙法蓮華經という佛界がある。その佛界を見ることがなく死んでしまふのはあわれである。わが生命を尊しと思ふならば、わが生命の中にある佛の生命にあいあわねばならない。わが生命の中にある如來こそ御本尊様である。この佛さまにあつてこそ生命がとうとうと思ひ、難遭の思ひと恭敬の念がわいてくるのだ」とおのべになられております。

生命の不思議と信心

大白蓮華の五十八號に、會長先生をお圍みしての「生命の不思議をめぐつて」という研究座談會がつていますが、さらに讀みか

えし、御書やこの座談會の生命論を、本當にすごいんだなあ、信ずる以外にない」と確信を深めたのである。

思案の焦點を末法の御本佛・日蓮大聖人様の御振舞いにあわせるならば、一切衆生救済のために大御本尊様を御圖顯あそばされるまでの敷えきれぬ大小難を身にうけられ、首の座にすわられながら「これほどの喜びをばわらへかし……さて夜あけなばいかにかに頸切るべくはいそぎ切るべし夜明けばみぐるしかりなん」とおそばで死の覺悟をもつて「只今なり」と泣く四條金吾殿や胸丸をきて太刀をとつた數百人の兵どもに堂々

とお呼びになられ、いついかなるところでも、安心しきつて、しかも御慈悲にあふれた御境涯を御書を通して一分なりとも拜されるのです。

先生と共にある喜び

また會長先生をおそば近くに拜すると、湊先生の小説にえがかれた夜叉が白濱ではじめて蓮長に會いしてより再びめぐりあえたときのように、自分の汚れたゴタゴタした感情が氷解してあとかたもなくなり、何も考えられずに、ただ大らかなひろびろした暖かなものに、安心して包まれたような感じがいたします。



ある日の戸田先生（本部の池にて）

廣宣流布の大使命に立たれる不幸な民衆の依所となられる會長先生の弟子の一人として、御指導とおり御本尊様を信心して歡喜しているときの自分の境涯は、苦しみにあえいだ昨日と、生活も何もかも同じであるのに、その中で本當に楽しく生甲斐を感じていることや、なやみがあつて眞劍に御本尊様を拜んでいるときの状態などを思い浮かべて、この難解な御文を類推してみるのです。

約二年前、華陽會の卒業式の夜、會員にお菓子を下さりながら「今度、五階建ての大客殿を建立しようと思う。そしてネールや周恩来やマッカーサーを呼ぼうしやないか。それが本當にできるんだよ。さあ何でも聞きたいことがあつたらいつてごらん」と申されました。先生のお言葉はかならず實現するんだと信じながら、不思議でたまらず、「先生、そういう名士たちが日蓮正宗の大客殿にすることが何だか不思議なのです」というと「わからないかい。御本尊様は民衆救済の指導原理なんだよ。各國の指導者たちがこないわけがないじゃないか。かならずくるんだよ」とおおせられました。現在、會長先生の御意圖の一端が富士の裾野に槌音高くひびいてい

若さについて

現實の生活というものは、夢が満たされるといふよりはくつがえされる場合が多い。女子部をみて、ほんとうに歡喜に燃えて涙らつとしてくる人が少ない。若さを忘れ、老人みたいな消極的な生活におち入り、悩みに負けている姿が多くみかけられます。その原因を探ると、自

ます。

無限大に廣い先生の御境涯の中に、ウロウロして考えこんでは不思議がつている自分を見いだしては、そのときの先生の御姿を胸にうかべ、喜びと力強い確信が湧きあがつてくるのです。

教學は信を深める爲

いずれにしても、大幹部の幸福で立派な姿の中から、佛法は理解するものでも學問するものでもなく、それらを信を深めるものとして御本尊様を拜み、力一杯闘争できる生活の中で自分の命に感ずるものなのだとしみじみ思います。楽しく折伏し、楽しく教學を學んでいこうとおおせられた會長先生におこたえて、候補講義を眞剣に受講された人たちが、講義が進むにつれて少なくなつていくの

身の年齢を忘れ、自分のおかれている立場を忘失しています。まだ若いのもあり、未熟であるという点にじつくりと腰をすえて、今こそ修業の時代であることを自覚して進んでゆくべきでしょう。未完成であればそのまゝに自分を出しきつて、求めてゆこうという心掛けが大事です。（石田青年部參謀の女子部）

をみると、力のおよばぬ自分にムチをうたれるような氣がします。

會長先生を師匠とおおぎえて、御本尊様とともに生ききつていく精神を、みずからもおこし、人ももおこさせて、喜びも悲しみも、御本尊様とともにまじりまし、どのようなことも絶対に御本尊さまを信じて闘つて、うち進んでいきたいと思ひます。

そして大聖人さまの御書のとおり、かならずやわが身に幸福をかちえたいと思ひます。池田先生が「生ききるといふことは闘争をいふのだ」と書いておられます。ともどもに手をつなぎあつて、まず一丈の堀をできるかぎりの自分の全力をかたむけて御本尊様の御前でとびこえてみましょう。

（以上）

或る日の先生(二)

——私の教學ノートから——



小林 宏

編集部からの希望がありました。本誌六十三号につづいて、ふたたび『或る日の先生』をまとめてみました。

時にあう喜び

去る五月三日の本部總會においても、會長先生は時に叶う信心こそ大切だと強調された。そこで、先生が、以前に話された中から想いおこしてみようと思う。

「時にめぐりあつて、その時に叶うということは生れてきた甲斐のあるものです。私自身のことからいえば過日亡くなられた世界の大物理學者アインシュタイン先生に今から三十數年前、慶應大學の講堂で牧口先生とともに、相對性原理の何ものなるやの講演を聞いたことがあります。私も物理・化學というようなものによつて身を立て、いた時代でありましたので、相對性原理の何ものたるや、

その奥まではわかりませぬまでも、その教えを受けたということでは長い間の誇りでありました。外國へ行かれてアインシュタイン先生に會われた方は相當おりましたよ

うが、日本の國に生れて、日本國內に往んで、アインシュタイン先生の講演を聞いたという誇りを持ちうる人はいくらもなからうと思つております。

また、次の私の喜びは年令二十一にして初代會長にめぐりあひ、四十四までその薫陶を受け、ともに牢獄までお供のできたということ、私にとつての誇りであります。

第三に、末法、大聖人様立宗七百年の時にめぐりあひ、廣宣流布の佛勸をうけているということ、前の二項にもました私の喜びであります。

今、創價學會の會員として初代の會長にめぐり合なかつた人は、どれほど、情なきを感ずるか

わからぬと思ひます。しかし、今度の廣宣流布にめぐりあわせ、そして、われ／＼の手で廣宣流布のできたその時に、私どもが初代と會えなかつた人たちを思い、また大聖人様とお會いできなかつたことを悲しむと同じような悲しみを、この廣宣流布に参加できずに闘わなかつた人々が、皆いただくのではないのでしょうか。廣宣流布という、人のためのように聞えるが、それはことごとくわが身のためなのです。

ふりかえつてみますれば、昭和十八年七月六日、私は初代の會長と、ともに『神札を拜んで相ならん』、神様なんか拜んでも日本の國は勝てないぞ、という學會の持論が問題となつて、牢へ入りました。そのとき投獄されたのは幹部一同、幹部のみが十九人、その他を入れて二十數餘人でありました。私は、その法難に連座できなかった人は、いかにお氣の毒かと思つてあります。しかるに、そのもつとも幸せであるべき法難に連座しながら、その難を恐れて退轉した者は數えきれず、難をたえしのんで出てまいりましたのは私一人であります。

實に牢から出てきてみますれば、當時、六百萬圓からあつた財

産は木の葉のごとく散りはて、残つてゐるのは二百何十萬圓という借金でありました。それは人が見ますれば、法難に連座して、何が戸田に幸せがあつたのだというでありました。しかるに、どうでありましたか。歸つてきて商賣はなし、資本はなし、昭和二十年の七月三日に二年間獨房において歸つてきたのであります。獨房におりましたときに『よし、今度出たらやつてやる』と、齒がみして歸つてきたのであります。

だが、食わぬわけにもいけません。今日は牢獄から出て四十九日である。四十九日という日は佛法上から見て良い日である。何かあるぞ、と。案に違わず一つの事業が誕生したのです。今日の事業の基礎はその時すでに定まりました。二年くらい入つてきたつて、今から考えれば、うーんと得してあります。商賣の上で、また佛教上の思索の上で、御本尊様に對する信心の強さといひ、私が人生のうち、もつとも得したのは、この二年の牢獄の生活でありました。

“哲學”とは？

“哲學”といふものは、西洋の哲學でいうデカルトやカント等のような面倒なものではない。『私

は大學を出ないからわからない』という人もいるが、哲學するといふことは考えることである。一番やさしい哲學は、水戸光圀の漫遊記があるが、その中に田舎でおばあさんに水をくれといつて米俵に腰をかけたら、おばあさんがこれは水戸様に納める米だといつて終つた。光圀は頭を下げてあやまつたといふ話がある。聞けば、こつけない話だけれど、おばあさんには、自分の作つた米を領主様にさしあげること、このことが哲學である。『誰が何といつても、これだけはどうしようもない』これが哲學である。この考え方が本當に人生に役立つか否かを系統づけて研究したのが人生哲學であり、その最高の方法が價值論である。大聖人様はいかにすれば人類が幸せになるかを考えられた。デカルトやカントの哲學をやつたから等と比較してもダメだ。最高の幸福をあたる御本尊様を示された大聖人様の哲學に、われ／＼が従いきつたときに、われ／＼が絶対幸福になれる最高の哲學があるのだ。

私は若いころに『哲學とは藝術なり』といふきつた。論理の組みあわせで、わけのわからぬものだ。しかし、今の私の哲學は『御本尊を拜むこと』以外にない。こ

れを除いて本當の哲學はいずこにあるだろうか。

「死」の問題

信心していながらも、時々「死」にたいする恐怖を覚えることがありますが、どういふものなのでしょうか、とおたずねしたときのこと。「死の恐怖」を感じるということは君ら（青年）にとつて良いことだよ。「死」について考えもしないのはバカだ。終戦後、柏原君と神宮外苑に行つたときに

深山の人が集つていた。そのときに私が「百年後には、これらの人々は全部いなくなる」といつたら、ぞく／＼と「死の恐怖」を感じたといつた。また、あるとき、青山墓地を通つたときに、「すべて過去に生きていた人々だ」と思つたら變な氣になつたことがあるが、信心が強固になると自然に死にたいする恐怖というものはなくなるものだ」と。

また、死刑について廢止論、存續論と古來から二通りの意見があるが、私たちの立場からはどのように見るべきでしょうか。

「殺さなくても、よいではないか。ムダだね。たとえば、あの三鷹事件の竹内被告など死刑に處したところで、民衆のいましめにな

らない。無期徒刑でよい。「立法の基礎」が慈悲の上に立つてゐるか、それとも、あんなことしたから殺してしまへという政策上のものかどつちかが問題となる。それでは佛法の上からはどうか、佛法には「死刑」といふものはない。裁くといふことは小乘經にはない。あくまでも慈悲であるが、法華經においては裁ききつてゐる。譬喩品には、反對すればセムシになるとか阿鼻に墮すとか、徹底して説かれてゐる。ただ大聖人様の御意見には死刑はない。また、われ／＼の立場としても、死刑はいらない。しかし、殺すことはありうるかもしれない。」

自殺の罪については、いかがでしょうか。

「たとえば乃木大將のように陛下のお供として自殺してもその他の心中などで自殺しても「法器」をこわした罪は佛法上同じである。」

宗教の本質

「宗教の本質」といつたら、どのものをあげるべきでしょうか。

「一、信すること。二、規定された特定の對象を有する。三、信したことにたいする行動をとる。簡潔にいえば右の三條件であらう。われ／＼人間の一切の行動

は、すべて「信ずる」ということに基づいて「幸福」を求める方向に向つてゐる。觀念的宗教ではないが、しかし、たとえばキリスト教では人生の目的は幸福の追求に非ずして、神の國、天國に行くことであると説くも、彼らの理想とする神の國に行くといふことは、結局、幸福を求めているのである。」

大聖人様の佛法は今後、時代とともに進展するのでしょうか。

「大聖人様の佛法は完成されてゐて不動であり、今後とも變らない。もしも變るものがあるとすれば、それは「説明法」であらう。たとえば、昔は原子とか分子とかいふ語がなかつたので、地水火風空の五大といふような表現を用いてゐた。あるいは「鬼」といつたような語は、現代語になおせばバイキンである。そして大聖人の佛法には大宇宙即妙法蓮華經、我即妙法蓮華經の大哲理が建立されてお

り、このことから他のあらゆることを演繹するので。一切法はこれ佛法であり、他のすべての學問、すべての現象は全部この説明にすぎない。」

貧乏と社会政策

佛法によらなくとも、社会政策

等によつて貧乏人をなくすことはできると思つていますか。「いかに社会機構を變えてみても、貧乏をこの世の中からなくすことはできない。アルゼンチンやソ連の機構ですら、金持ちと貧乏人がいる。貧乏とか金持ちとかいふが、その基準をどこに置くかが問題。貧富といふのは比較の問題だから、アメリカにも貧乏人があり日本に金持ちがいるようなものだ。ただ佛教といふものは、精神的にも、また財物的にもみななければいけない。どんなに社会機構が變つても、人生の悩みは絶対に救えない。御本尊を拜まなければ、過去世からの宿習である貧乏は打開できない。もちろん、怠け者を作らない程度に社会機構の改善は必要である。」

戸田先生の和歌

最後に戸田先生のよまれた私の好きな古い和歌から、二三かかげてみました。

暇も我が身のつらさも喜べど君等をいとひて一人なやみぬ
我やみぬ悩むは運命のことなら
で聖の予言誰ぞ答えん
御佛の予言に嬉しく我立ちて首途に競う魔の風かな

妙法の旅路に集う我が友に宿世

の法座の縁感ずる
旗もてる縁も深し靈山の御聲を
偲びて一人誓ひぬ
國亡び佛土は興らん近き日にふる
い立てかし老も若きも
久遠より地湧の菩薩と悟れかし
妙法の功德の強きなさにけに
信ぜかし宇宙の實と御佛を必らず
守らん君も子なれば
地獄まで折伏の行に我往かん鬼
におそる、我ならなくに
友どちの集いも堅き學會は折伏
行の王者なりけり
いざ往かん月氏の果まで妙法を
擴むる旅に心勇みて
春の花散の紅葉も何かせん東亞
の山に風吹くには
いとまなき我が友どちの折伏に
御佛の慈悲は雨とそ、がむ
御佛の深き御慈悲を思いなば憂
えずはげめ信仰の道
行くならば貴き御法身につけて
ころんの由も我は恐れじ
若き芽ののびゆく姿ながめつ、
妙法流布の旅はたのしくぞある
君等こそ佛の軍の旗本ぞはげめ
つとめよ聖の訓に
旗もちて先がけせよと教えしを
事ある秋に夢な忘れそ

(以上)

末世の悪比丘

——信心をもたない乞食——

山本雅治



法義そつちのけの 邪宗の坊主

法華初心成佛抄（御書全集五
六頁）に、

『人に吉と思はれ人の心に随つて
貴しと思はれん僧を法華經のか
たき世間の悪智識なりと思ふべ
し、此の人を經文には獅師の目を
細めにして鹿をねらひ猫の爪を隠
して風をねらふが如くにして在家
の俗男・俗女の檀那をへつらい
つわり・たばらかすべしと説き給
へり』

澤庵——といつても、潰けもの
のタクアンのことではない。人名
である。といえはハハアンとうな
づく人もあることだろう。歴史小
説や講談などによく登場してくる
徳川時代の坊さん・澤庵禪師のこ
とだ。この人のことをこの間『大
世界』という宗教雑誌で読んで、
邪宗の坊主にしては末法には珍し
い坊主だなあと思つたのである。

彼は寛永四年、當時全國にしか
れていた、いわゆる「法度（ほつ
と）」に抵抗して、をむいたため、

その結果、奥州出羽に流され、土
岐山城守のおあずけとなつた。そ
のときのことだ。彼はかの地で思
いもよらぬ好遇を受けるが、しか
し彼は「出家は檀那についてい
もの、どこだつて同じだ。世態は
ないから物はいらぬ」といいてん
ぜんとしていたという。また彼の
身を案じてよせられた品物も、わ
がものとはせず、「周圍に貧しい
人たちがたくさんいるから」とい
つて、みんなくられてやつたとい
う。

と末世の悪比丘（悪い坊主）の
實態を申しのべられているが、こ
の御文に澤庵を照合してみると、
腹の底は禪僧のことだからどうか
知らないが、表面の所作だけをみ
るならば、浮世ばなれならぬ、末
法はなれした坊主のように思われ

邪宗の坊主を 放逐せよ！

邪宗の坊主ほど日本再建の今
日、無用の者はない。彼らは何
のために法事や葬式にお經を讀
むのかということ深く考えた
ことがあろうか。

先祖代々、各宗によつて葬式
や法事のとき、お經を讀んでき

た。彼らも坊主になつたのだか
ら葬式や法事に師匠ゆずりの經
を讀む。そして御布施と稱す
る労働代金をもらう。それで本
人は不思議ないとしても、よく
よく考えてみると、こちらでは
不思議でならない。

藝者と變らぬ

邪宗の坊主

お經を讀むことは何のためな
のか。葬式や法事になくてなら
ない儀式の一つで、家族知友が
それによつて涙するだけの效能
とするならば、酒宴の席上、藝
者なるものがでてきて、三味線
とかいうものを彈いて客の興を
たすけるのと、陰陽異なりとい
えども、その效能は同じであ
る。そうなるに邪宗の坊主と※

る。それにひきかえ、現今の邪宗
坊主はどうだろう。まさにこの御
そのまゝだ。

そうあらねば末法とはいえない
かもしれないが……大衆の宗教に
たいする無智に乗じて、口では立
派なことをいうものの、腹の中は
まつたくその逆だ。私利私慾のた
めには人にへつらうことも平氣で
する。自宗の法義などそつちのけ
にして、關心を一身にかおうとす
る。實にみにくい姿だ。

何でもやの

真言の坊主

もう大分月がたちすぎた嫌いは
あるが、邪宗坊主の實體を眼前に
まざまざとみせつけられたことが
ある。二月の末ごろだつたと思
う。嚴冬の身をきるような冷たい
風が吹きすさぶ日だつた。この日
は午後から友人のお葬式があり、
私は故人とは親密な間柄だつたの
でその席に座を列ねた。そして告
別式が終つてからも、火葬場まで
同道させてもらつた。

さて、この火葬場へきて、初め
て気がついたことであるが、ここ
には專屬のような形で、羽田から
通つてるとかいう一人の坊主が
いて白木の箱がつくたびに葬者の
宗旨に應じて念佛を唱えたり、般

若心經を讀誦したり、あるいは法
華經を讀んだりしているのではあ
る。無智な一般の人たちはこの坊
主の所作・振舞いを當然のように
思つて迎えているが、私たち學會
員には異様なものにつり、義憤
をおぼえずにはいられない。

そこで、かの坊主に宗派別の讀
經の内わけをきいてみた。彼は何
らためらう様子もなく、淨土宗の
人にはアミダ經、天台宗と真言宗
の人には般若心經、日蓮宗と禪宗
の人には法華經の壽量品自我偈を
讀誦している、と平然として答え
る。

私は無意味とは思つたが、二、
三の質問をこころみだ。「真言宗
では大日經・金剛頂經・蘇悉地經の
三經を依經として立宗したのに、
その本家本元の三部經を讀誦しな
いで、なぜ般若心經などを讀誦す
るんですか？」またあなたの方の
宗祖弘法大師は法華經を『第三の
戲論』『無明の邊境』といつて誹
謗し、とつても嫌つていたのに、あ
なたは自宗の宗義に反して、どう
して法華經を讀誦するんですか？

信念のない

よるず店

かの坊主は口ごもつた。それで
も「それぞれ、みんな信念が違

無用の長物

戸田城聖

(本誌3号の
巻頭言より)

※藝者は同じようなものがあるが、藝者は女一人食うだけで、大きな寺のような建物をもつていない。坊主は大きな寺をもつて大イバリで労働代金を過分に請求する。一つの牧場で小羊が食う草と大象の食う草ほどの相違で大變な無用の長物である。

邪宗の坊主どもに、さも指導者のような顔をさせ、藝者のような職業をさせている民衆は、バカだと思えない。共産黨の烈々たる闘士も、黄金の代表のような金融業者も、軍國主義の大親分も、一度死に直面すると、また死んでしまうと、坊主が大イバリとなる。どういうわけだろう。習慣といつてすませられないもの

がある。なぜなら、坊主の大先祖は釋迦であり佛であらせられる。佛も釋迦も世の苦難を救う大救世主であり、一大哲學者であり、大實踐家である。何のために、釋尊は經を讀まれたか。釋尊の教をそのままつがれた、天台大師でも章安大師でも傳教大師でも、みな經を讀んでおられる。經を讀むことには意味があるらしい。

何のために

經文を讀むか

さて今の坊主が經を何のために死者のために讀むのか。もし死んで、唯物論者のいうように、この世にその人がいないなら坊主の必要はない。死者がこの世にいとするとするなら、どんなところに、どんなにしているのか。また、その生命にどんな經文をどんなにして讀んだらよいのか。このような問題を、みずから深くほりさげて解決して、その上に確信をもつて經を讀む坊主がいく人いるだろうか。

しかも、釋迦が自分の經文は自分の死後二千年したならば、どんなに讀んでも效能がないと確言しているのに、その空の經

文を空々しくこれを知つて讀む者があろうか。知らないとするば、なおバカだ。このバカにだまされるヤツはなおバカだ。

宗教の正邪に

目を開こう

どんな意味から考えても、歌にもならず、役にも立たぬ經文をしらしら讀んで「讀み賃」を取つて食つている邪宗の坊主は悪人でもありサキ漢でもあり非生産的な存在である。今日の日本に、こんな種類の人間を養う餘力はない故に、吾人は叫ぶ、『現代の邪宗の坊主はまず放逐せよ、さもなくば重労働を課せ』と。

また、このような、わけのわからない存在にたいして、疑問も持たないし、不思議にも思わないで、ただ親ゆずりと放任しておく一般大衆の無智・鈍感・封建性にたいしても、われわれはあきれざるをえないのである。余の言葉によつて猛り狂う邪宗の坊主あらば、來つて法談せよ。汝らにみずからの道と與えん。(以上)

ますからね……と愚にもつかないことをいつて、ちよつと間をおき「富士山へ登るには吉田口からも、あるいは富士宮口、御殿場口からも登れると同様に、佛教各宗派はそれぞれ異つていても、行きつくところはみんな同じですから……」と、まつたく佛教を知らない者が口にするような言葉を、ボツリとこぼすや、他にお客がきたのをよい口實に、そそくさと立ち去つて行つた。

法門の勝劣、宗旨の相違などをまつたく無視して、自宗に生きるブライドさえも持つていないのである。たくましい商魂だ。側できいていた同僚の青年部員が「まるで、よろず屋だ。百貨店だよ」といつたが、まさにそのものズバリである。しかも、佛教なら何でもいゝという暴言を吐くにいたつては何をかいわんやである。

『唯一乗の法のみあつて二もなく亦三もなし』
釋迦がもし生きていたら、さぞかし「私の教をオシヤカにした」と嘆き悲しむことだろう。世は未なり、これが邪宗坊主の赤裸裸な姿なのだ。

趣味で經を讀む

禪宗の坊主

それからこの間、米澤市在住の學會員からこんな話をきいた。それは同市に禪宗の寺院があり、この住職A氏を米澤の學會員が折伏したときのことである。A氏は駒澤大學を出たとかで、現在、高校の教員を兼職しているらしいが「南無妙法蓮華經はドラマである。釋尊は自分の説いたものを文字として残してないから經文というものはない。」

經文は釋尊滅後五百年ごろから出たものだ。法華經は途中から創作したもので、オリジナルシナリオみたいなものだ」といい放つたそうである。

『惡世の比丘は乃至未だ得ざるを得たりと謂い、我慢の心充滿せん』の經文を想起させる言動だ。そこで「あなたは、その經文をなぜ讀誦するのか」ときいたところか「お經は趣味であつて、形式的なものだ。宗教そのものが、精神修養なのだから……また法事というものも、親戚一同がこういう時でなくては顔を合わすときがないからやるのだ」と答えたという。

ここにいたつては、もうメチャクチャである。濁世末法の坊主としての資格は充分だ。一方「入阿鼻獄」も太鼓判を押せる。



マニ教

世界宗教史の一頁に残る

消え去つた過去の宗教

衆を救う力なく、すでに過去の存在となつてしまつた幾多の宗教がある。こゝで、その内の一、二を紹介してみよう。

東洋の情勢

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。奢れる者は久しからず。たゞ春の夜の夢のごとし。猛き者も遂には亡びぬ。ひとえに風の前の塵におなじ」

平氏一族の興亡を水芭蕉の跡に残した敘事詩的作品『平家物語』の序文の一節である。

「盛者必滅、榮枯盛衰」は世の常なれど、惱める者をして六道輪廻の道を歩ましめる邪宗教についても例外ではない。かつては全世界にその響を唱えながら、有爲變轉の世のならない、今ではわずかに遺跡等でその昔をしのぶのみで、民

衆を救う力なく、すでに過去の存在となつてしまつた幾多の宗教がある。こゝで、その内の一、二を紹介してみよう。

東洋の情勢

西暦一八四年、勃興した黄巾の亂以來、漢室の統制力まつたく衰え、群雄割據の様相をていつた。赤壁の戦いで劉備、孫權が力をあわせて曹操をうちやぶつてから、蜀の成都を都として劉備、魏の洛陽に曹操、呉の健康に孫權がそれ／＼よつて天下は三分した。そして、やがて五丈原の戦いで諸葛孔明の死により、蜀の滅亡、そして普の統一にと場面は移つてゆくのである。

そのころの日本

——ちようと、そのころ、日本では——連日連夜、陸路と海路によつて、甲冑に身を固めた兵士たちが、西へ西と流れて行つた。新羅征伐の勅命が降つたのである。神

功皇后おんみずから新羅攻略の先頭に立つていた。そして、やがて、平定後、新羅・百濟との交易が始まり、わが國に佛教が渡来する端緒となるのである。

ペルシャとローマ

——そして、このマニ教誕生の國、ペルシャ（今のイランのこゝ）において——西暦前一二七〇年ころよりローマ帝國とペルシャとの間には、宿命的闘争がつゞけられていた。そのころは、いまだペルシャという名前ではなく、バルティア王朝といわれていた。

そして、ゾロゲセス一世の時代（西暦五一〜七七）に全盛期を迎え、やがてホルムズの戦い、クテシオンの戦いで、過去五世紀もの長い間、王座にあつたバルティア王朝は、アルタバヌス王をもつて終止符をうち、ササン朝のペルシャ帝國が新たに生れた。このような時代を背景に話しを進められてゆく。

ペルシャの三宗教

ペルシャ人の初めた宗教には、西紀前七・八世紀にその創立時代が假定されているゾロスター教、西紀三世紀におこつたマニ教、およびもつとも新しい十九世紀に説き初められたバハイ教の三つがある。これらの外に、起源地を異にしてはいるけれども、ペルシャにおいて獨立の宗教と形づくられたものにスファイズム、ミトラ教の二宗教がある。ここにのべんとするマニ教は、アリアン民族の間におこつた前述の二宗教、ゾロスター教を母とし、ミトラ教を父として、その間に生れた宗教であつて、東は支那印度より、西はスペインにおよぶ地方に傳播された過去の宗教である。

マニ教の始祖

マニ教の始祖マーニーは、西紀二百二十五年ころ生れ、傳説によると、十二・三のころ默示を受けたように傳えられている。しかし、彼の新しい宗教觀を初めて公けにしたのは、シャブル一世の戴冠式の日、西紀二百四十二年三月二十日であつた。その後、シャブルはほとんど十年間、マーニーの説くところに耳をかたむけ

ていた。しかし、王はゾロスター教の收僧にいましめられてマーニーを遠ざけるようになってしまつた。かくて、マーニーは東國を去り、長遠の傳道旅行にでかけた。中央アジアからウイグル地方を根據地として四隣に傳道した。後にシャブルの死に先だち、マーニーはふたたびペルシャに歸り、傳道に従事したけれども成らず、ついにゾロスター教の祭司に捕われて獄に投ぜられ、二百七十六年七月、ハリツケに處せられた。

西アジアの道德教

西紀二・三世紀の西アジアは、物質的にも、また精神的にも、ほとんどした状態にあつた。すなわち五・六百年の生命を保つたバルティア朝は倒れ、ササン朝もまだ全主權をにぎるにたつていなかった。古きゾロスター教も、新しきキリスト教も、ともに衆生をひきいて平和にみちびきうるだけの勢力はなかつた。ミトラ教はすでに歐州大陸において遵奉されるようになつていた。その時古き神話を加味した純然たる二元教をもつて現實の矛盾を解決しようとしたマーニーは、簡單なる禮拜と嚴格なる道德教をもつて新宗教を宣言

した。しかし、その簡単にし
て、しかも便宜なる解決は賢愚の
區別なく一時一般の要求になつ
た。しかし、豫言者、故郷に用い
られずして、マニーは迫害に倒
れたとはいえ、マニ教は久しく信
徒の間に保持せられ、マホメット
教興隆後といえども、なお密かに
信仰を維持しているものが、たく
さんいた。

**** マニ教の傳播 ****

しかし、マニ教のもつとも隆盛
をきわめたのは、起源地のペルシ
ヤよりもむしろ中央アジアであつ
た。しかし、その地を根據地と
して、支那・印度におよぼした影
響も少くなかつた。しかし、モ
ンゴル族の南下により、その根
據地は攪亂されたけれども、西紀
十五世紀にいたつても、なお印度
の一部に信徒の存在していたこと
が認められている。西紀四世紀ご
ろには、西方に向つたマニ教はロ
ーマ帝國に普及し、知識階級のキ
リスト教徒より多くの信徒をうる
よになつた。同紀末にはローマ
帝がマニ教を禁ずる法律を制定し
たけれども、一方において學者間
に支持せられ、その勢いはなか
く衰えそよになかつた。しか
し、その後ますます禁を厳にした

ので、勃興時代と異つてキリスト
教化したマニ教と變じ、ようやく
十三世紀ごろまで、その餘命を保
つた。

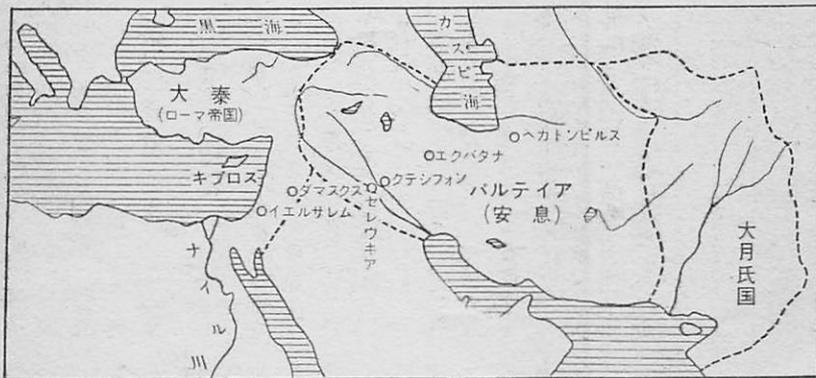
**** マニ教の教義 ****

マニ教は自然界と人間界とを結
びつけた空想的哲理を『明』『暗』
の二元で説明しようというのであ
る。その教理は、光そのものがす
でに善を表現し、また暗が悪であ
るかのように説き、物質的觀念と
倫理的觀念との差別を明らかにし
ていなかつたようである。マニー
がこれら明暗二元を認めるよう
になつたのは、現實におけるすべ
ての矛盾がこれらの二元に起因す
るのであるから、矛盾を解決する
には、もつとも肝要なる根本義で
あると信じたからである。それに
ともない、次のような世界観を有
している。天地創造に先だち『明
神』は愛信・忠實・崇高・賢明・温順
・知識・了解・祕譯・洞察の十徳を具
備して明界に王となり、天の光と
して現世に臨んでいる。『暗』を
表顯する惡魔は獨立に暗坑にあつ
たが、『明』の視・味・嗅・觸・聽の
五明に類する五類魔をまとうてい
たのである。天地はこれらの五明
神および五類魔の和合により創造
されたが、これを『初祭』と

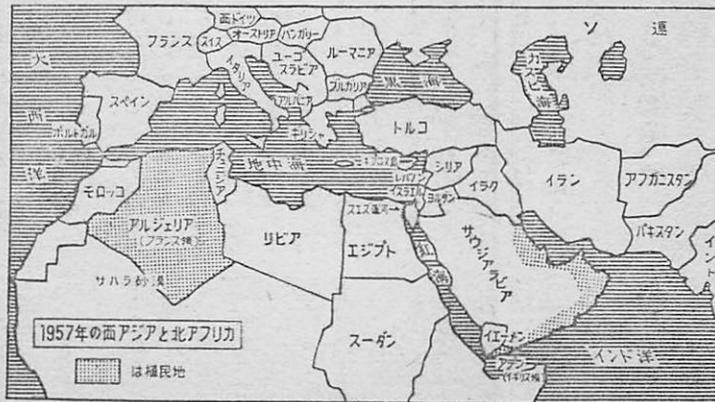
區別している。しかるに『暗』は
暗黒を從えて眞つ先に明神に挑戦
した。かくして『明』の地上にお
ける從屬である『清淨風』・『妙
風』・『明力』・『妙水』・『妙火』
と、これらにたいする地上の『暗』
の從屬『霧』・『暑熱』・『熱風』
『暗黒』・『濕氣』とが相対抗し

て、たえず一致しないようになつ
た。これが現實において、各方面
に矛盾のきた起源である。『明』
はまずこゝに一原人をつくり、彼
を武装して『暗』に挑戦せしめ
た。けれども、功はなくついに自
ら起ちて惡魔を取り彼を助けた。
しかし、彼の具備していた『明』

の幾部分はずで『暗』のとりこ
となり、こゝに明暗二元の混同が
始まつたのである。しかし、現
實はその混同したもの、繼續であ
るから、とうてい矛盾をまぬかる
ことができない。もちろん人はお
の／＼『明』の異なる量を所有し
ている。しかし、男性は女性よ



上圖は西紀二、三世紀ごろの中近東諸國



右圖は現在のの中近東諸國

今や中近東は世界の注目の的であり一日として新聞記事の出ない日はない。
將來、これらアジアの最西部の諸國に三大祕法の南無妙法蓮華經が廣宣流布
することを考えたとき、この地に過去はどんな宗教が弘まつたか探るのも意
義ありと信ずるものである。

りも多量を所有しながら、ますます悪化されるようになってきた。故に『明神』は地上にある『明』の分子を救うために説教者を送り、豫言者を送りつけていたのである。しかしマーニーは最後の偉大なる豫言者であり、『明神』の使節であるから、彼および彼に匹敵するものによりてのみ、地上の『明』が救助されるのである。その救われたる明の分子は、巧妙なる桶によつて、まだ悪魔の攻撃を受けなかつた太陽と月とに送られ、さらに浄められて、眞の明界に送りとゞけられる。しかし、現世にて救われなかつた分子は、死後一層嚴重なる淨潔を經なければ、眞の明界に送りとゞけられないといふのである。以上を『中際』としてゐる。かくして、地上の總ての『明』の分子が救われるころ現世の最後がきて、すべてのものが焼きつくされ『明暗二元』がふたゞび獨立をとるといふのでこれを『後際』としてある。

**** 小乗戒より劣る三封 ****

マニ教は『暗』より自由となるために努力することを教えると同時に、内在する『明』の分子をそだて強め、浄めることをも教へてゐる。故にマニ教はすべてに先だ

つて、肉的快乐を嚴禁してゐる。しかして、その三封とは一に口の封—獸肉や酒のごとき不潔なるものを口にせず、不淨な話しをいわない、二に手の封『暗』に屬するいかなる物をも運ばない、三に性の封—結婚を許さないのである。信徒は斷食を勵行し祈禱の時間を嚴定してゐる。斷食の日数が一年の四分の一にも達することがあり、また一日に定められてる四度の祈禱の前に齋戒沐浴することも教へてゐる。また彼らが祈るときは、太陽、月または北方『明神』の座と信ずる方向に向いて禮拜するけれども、明神にたいし、明界にたいし、またその天使にたいして祈るのであつて物理的に考える太陽等を禮拜するものではない。

**** 正信徒と平信徒 ****

かくて、時を經るうちに、信徒の内には嚴重なる禮拜の形式とすべての苦行にたえ、ないものができてきて、ついには正信徒と平信徒の二種に分けられるようになった。前者はすべての苦行にたえ禮拜をおこなうもの意味し後者は寛大にみのがされるものである。その結果として、平信徒の數のみ増加して、正信徒の數次第に減ずるやうな有様となつた。マ

ニ教の初期において、すでに、その變動が起つたといふことは、同教の短命を暗示してゐるよう思われた。そして、ついには正信徒のみがマニ教の典義を心へてゐるやうになり、平信徒のために祈つてやるといふやうな職業化するやうになつてしまつた。したがつて、平信徒は正信徒を尊敬し、『明』の元素を多量に含有すると彼らが信じていた野菜を供給するやうになつた。かくして彼らの間には、後に一・師、二・監督三・收僧、四・正信徒、五・平信徒の五階級ができるやうになつた。

**** 明暗の二元論 ****

マニ教は既成の諸宗教を考慮して説かれたものであつて、いづれも順應するやうにくわだてたものであるといふことが容易に知られてゐる。マーニーは幼少の時より接してゐたゾロスター教が、不徹底なる二元教であるのに満足せず、明暗二元のまつたく融合しないものを立て、新宗教を宣言したのである。彼はゾロスター教の聖典『アヴェスタ』を基礎として、祈禱書をあらわしたことも疑いない。かく成立したマニ教が、あるいは東、あるいは西に傳播される間に、中央アジア、支那にきたもの

は佛教の影響をうけ、シリアを経てローマに入つたものは、ますますキリスト教化されるやうになつたのである。

**** マーニーの書物 ****

書物としては、マーニー自身の記したといわれる物もあるが、すべて斷片的であつて、その幾部分が今日に傳へられてゐるのみである。しかし、それらはいずれもマーニーが發明した文字で記せられてゐる。すなわちアジアにおける初期における初期のキリスト教を批評した『秘密の卷』マニ教の教理を摘要してゐる『箴言の卷』心にひそむ『明』『暗』二元の働きにつきのべてゐる『獎勵の卷』等が知られてゐる。

**** 亡びた支那のマニ教 ****

最後に、この教えが比較的傳播された支那における状況を見よう。傳來したのは四世紀の中ごろと見られる。しかしてその後とんと發展し、開元二十年(西紀七三二年)『末尼本是邪見云云』と勅して、これを批判するやうになつた。また當時ウイグル地方はこ

年(西紀七六八年)には、ウイグルのマニ教のために寺をおき、漸次その數をましていつた。元和、長慶年間(八〇〇年初期)には、同信徒の傳來するもの、ますます増加し、その弊害もいちじるしくなつたので、ついに令を發して佛教と、もにこれを禁じた。かくして、マニ教徒はいい結んで、各地に叛亂するやうになり、そのもつとも著名なのは、漢の末の貞明六年(西紀九二〇年)河南省におけるマニ教徒の亂である。

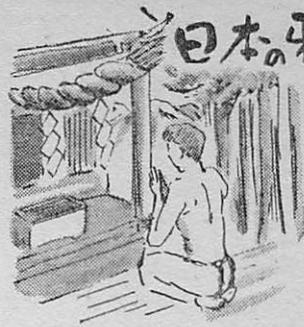
彼らは敗れて漸次衰微するやうになつたのである。その後、西域より再興を願つて來たもの、もはや、その時をえず、目的をはたすことができなかつた。かくて、支那におけるマニ教も、ついに滅亡していつたのである。

**** むすびと破折 ****

かくのごとく、社會の一時の状態に順應するためにおこつたマニ教は、初期、二三世紀の間に、あるいは東、あるいは西に廣がつて、その勢力は見のがすことのできないものがあつたけれども、永續せず、ついに今日、世界宗教史の一頁をとゞめる過去の宗教となりおわつたのである。(以上)

その四、みたけ教

(御嶽教)



御嶽教の実態

つては、まったくのデタラメで、このことを渡邊管長は次のようにいつている。

『終戦後、時代にあてはめて、表カンパンが必要になつて七五三の教えをつくつたが、これは道徳だ。あたりまえなことしかいつておらず教義とはいえない。また新しくつくる豫定だが、先

ながいことと思う』と。

『御嶽教というのは？』
『明治時代にできた新興宗教です』

『教義というものは？』
『ありません、教義がないのと開祖教祖がないのが、わが御嶽教の特徴です』

おどろくなかれ、これが御嶽教九代管長渡邊照吉との一問一答である。常識で判断しても、教義のない宗教というものがあるだろうか……

神道十三派にぞくするこの宗教は、御嶽大神を本尊としているが、この本尊の説明ははなはだアマイである。まして教義にいた

ごく少数である。

以上のことについて、その筋の權威者は『したがつて、純然たる宗教として認めることはムリであり、宗教法人を取りけさなくてはならぬ』といつている。

このようなデタラメな宗教を、われわれがいろいろな資料により一應組みたてて暴露する次第である。

一、歴史

現在の御嶽教は下山應助(栃木の産)が明治初期に作り上げた。明治以前(注)は、山岳宗教といつて、山に不思議な靈力がひそんでいてと思ひ、一般の人たちにはくせんと信仰され、系統は邪義である眞言宗の系統で、組織も講として何種類もあつた。

下山應助という男は、先祖代々講中の信者であつたが、その結果、罰によつて破産し、京に出てふたたび財産をおこした。これを魔の通力と知らず、御嶽大神の功德とあやまつて信じこんだのが、

そもその始まりである。そして當時できた宗教法人法にあわせて、各講を集めて一つの宗教團體を作ろうという單純な目的で運動を始めたのである。渡邊管長の説明によると、

『一派を作るという單純な目的で、法律にあわせるために、御嶽山のふもとで、登山する人たちを相手に今でいう署名運動をやつたんです。初代管長には自分には資格がないからといつて、神道十三派の一派である大成教を興した平後省齋になつてもらつた』

といつている。何しろ法律にあわせるために大ザツパに作りあげたインチキ團體であるが、明治十年(注) 明治以前の

山岳宗教

佛教傳來によつて影響をうけ、三十四代舒明天皇の時、役小角という男が御嶽山に登り、寶龜五年石川望足が登山して社殿を建てたといわれ、邪師弘法も登山して修行の道場とした。しかし山に靈力がある等という低級思想が廣まるわけがなく、すたれていく一方であつた。

その後、天明二年覺明、寛政四年普寛という眞言密教の邪師

五年五月十七日、初代管長平山省齋として教部省(今の文部省)に認可されたのだから驚かざるをえない。

初代管長平山省齋より現在の九代管長渡邊照吉にいたるまでの間について、渡邊管長は『何の資料もなく、いつ何代の管長がかわつたかわからない、しかし九代管長として私がいるのは事實だ』とアマイなことをいつている。

二、本尊

主神と稱する物は國常立命・大己貴命・少彦名命の三神で、これを一つにまとめて御嶽大神と稱し、御嶽山に沈められた神である等といつている。この御嶽大神を位牌が登山し、今の登山口を作つた。この二名の邪師は兩部神道といつて神佛調和の邪説を立てたのであるが、以後、覺明講、普寛講、一心講、一山講という各種の講ができはじめ、江戸時代の國學者たちの神道支持により、神を重要視するようになり、明治初期に下山應助が、各講を集めて御嶽教とし、神佛混合の邪説から、邪宗教・教派神道となつた。

狀の物にして分靈と稱し、値段は教師用五百圓、信者用二百五十圓である。また本尊雜亂をあげれば、先達である覺明普寛の二靈神なるものを拜み、天神地祇八百萬神を配祀神として拜み、さらに御嶽山大神・薬師如來・不動明王・辨財天・三笠山大神、弘法大師・長崎稻荷等々、その他、數かぎりなく何でもござれと雜亂している。

御嶽教でドン底に

蒲田支部 船木時也

私は昭和二年に御嶽教に入信し、本山の御嶽山に登山して熱心に信心をし、その修行としては般若心經をあげたり、ノリトをあげるなどで、定まつた本尊と云うのはなく、信者が何かと質問しても、それについて、教義というものもない、盲目そのものの信仰生活をしていた。

その翌年、長兄は腸結核で死

その値段は火災盜難除紙製十圓より檜製木札三十圓と各種類があり、特別用木札は五百圓で、選挙ともなれば、當選用も臨時發行して五百圓よりおぼしめしとなる。また個々の願ひ、團體の願ひの札も各種類を發行し、その他、お守り札十圓、お姿三百圓と金もうけに必死である。しかも信者は、しらずしらずのうちに行者や教師の生活費をみついでいかなくはない。

また、このお札は年一度焼却して、新しいお札を買わなければい

亡し、次の年には次男の左足が骨髄骨膜炎となり、その看病で嫁も療養の身となり、生活は下落した。

その結果、生活はドン底になり、これにもまして、おどろいたことには、私の信仰上の兄弟子が狂い死にし、もうミタケ教のいう神に、スツカリ疑問を生じてしまったときに折伏され、正宗入信らしいは明るい幸福にまつまれている。

けない仕組になつてゐる。もし神札に人を幸福にする力があるとすれば、一年ごとにかえる必要もなく、孫子の代までも大切に守るべきであり、焼いたりすれば大罰を受けるはずである。それを焼けということは、神札に人を幸福にする力がないということであり、新しい神札を買ふということである。

また御嶽山の頂上に本堂があるが、その登山口より頂上にいたるまで、途中數十ヶ所のお堂あり祠あり、その前にはかならず賽銭箱があつて、頂上についたときには財布も大分軽くなるということである。驛前の土産物屋にも大小さまざまな本尊を賣つており、百八十圓出せば良い物(?)が買えることになつてゐる。

また各教會にも賽銭箱が置いてあり、札賣り等については、M女教會長(牛乳屋)は、『家業の牛乳屋は夫、私はこれ(御嶽教)で生活を立てています』と宗教が職業であることを認めてゐる。

三、教義

教義については、渡邊管長が『御嶽のひかり』という機關紙

で、『幸い(?)わが御嶽教は理屈や理論よりも、先にまず行をもつて教義の第一とする』といつてゐる。純然たる教義等の哲學的裏づけがなく、日蓮大聖人さまが、亡國宗教と強く破折された、眞言密教の修行である加持祈禱を第一と立ててゐる。そして、教義らしいものをあげれば『敬神・尊皇・愛國の大義を發揚する』ということと戦前唯一の教義としていた。終戦後、米軍當局より危険思想のことで廢止され、申し開きのためと信者獲得をかねて作つたのが七五三の教である。信者はこの七五三の教を箆々々々服膺して實行しなくてはならない。もちろんできるわけがないが、教師たちは信者にたいし、ばくぜんとした教義を示しては、精神修養と稱して行をさせるのである。そのほでは『感謝せよ』『奉仕せよ』ということになるのは天理教と同じである。

ノリトと一しよに般若心經を使つてゐるので、『神道でありながら、なぜ佛教の經典を使うのか?』と質問すると、管長『昔は佛教の系統だつたら、古い人たちが多く使つてい

ます』
『それでは佛教と神道の關係がデータラメである』と追求すると某教會長は、『佛教も神道も儒教も、説くところは同じで、ちようど東京の言葉と大阪の言葉のように、言葉のナマリと同じようなものです。だから般若心經を使うのです』
と臆面もなく答えるが、御嶽教管長・渡邊照吉みずから、『教義とはいへぬ、また新しく作る』といわざるをえないのが御嶽教の教義の實態である。

四、修行と種類

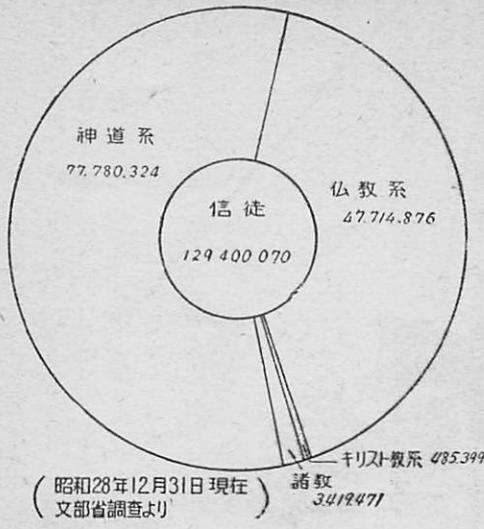
一般信者は精神修養を目的とし、教師・行者は宣傳ミセモノ用として修行してゐる。

(1) 水行・斷食又は洞穴に入つて座禪をくみ、精神を統一し、身を清める等といつてゐるが、瀧にうたれて出る病人もあるといふことである。

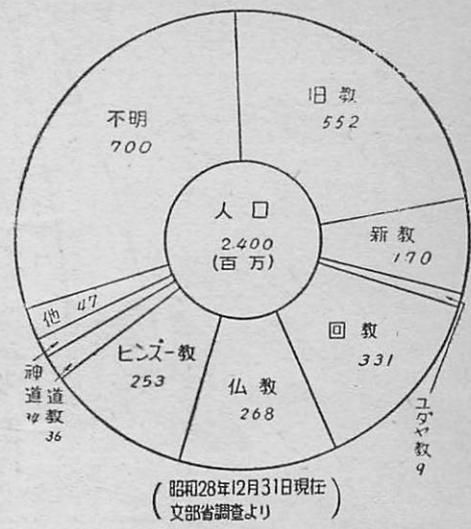
(2) マッサージと祈禱病人にたいして治療と稱してマッサージを行い、九字をきつてうかがいをたて、その病人にあう神なるものをさがして病氣をなおす等といつては金もうけをしてゐる。

(3) 釜鳴り釜の上にセイロをお

日本の宗教実態



世界の宗教実態



き、米を入れ、中央に穴をあけておくと、蒸気の勢いと、空気の壓力の關係で、ゴーツと鳴る現象で、一般家庭でもときどき見うけることで、何も不思議な現象ではない。行者や教師たちは、その鳴り方によつて信者の悩みを解決する神をさがしてくるといつているが、そのような神があるわけがない。

某行者の話によると、音の出そうな瞬間をとらえて、氣合(空気の震動をあたえる)をかけるのがコツだそうである。

(4)火渡り火の上を歩くのであるが、コツは薪の火が下火となり、懐状になると、足早に歩くことで、早く歩かねば火傷する。

(5)焚火の行い御幣を火の中に出してると、暖い空気が上昇し、御幣の紙が上の方にヒラヒラしてもえないという、ごくあたりまえなこと、それを神秘的なものとしている。

その他の修行もあるが、あまりにも幼稚なので除くが、くえなくなつた教師や行者たちが、淺草等の盛り場で釜鳴り等をやつては細々と生活をしているのを見かける

が、くえなくなるのは當然のこと、かかる幼稚きわまりない、また人を不幸に落しいる魔の通力を修行した教師たちが、結婚式、安産祈願・七五三の祈・葬儀・上棟祭・新築落成式・病氣平癒の祈禱等をやるのでは、知らぬ信者こそあわれなことであり、かわいそうなことである。

その教師についても、管長以下十五級にわかれ、教師任命代金といつては賽銭の上前をはねられ、義納金といつては大教正六百圓といふように、神札の賣りあげをピハンハネされ、大教會は六千圓を負擔し、手数料といつては證明書一枚百圓二百圓ととられる。こうなれば、各教會にあつても月並祭等と信者を集めたりして、金もうけに懸命であり、ただ信者のみがやせ細る一方である。

以上のような内容を持つ御嶽教は、二十世紀文化の發達した今日において、現在衰微の一途をたど

をとするが、この修行と日常生活とは全然關係がなく、修行者信者は精神統一どころではなく、生命力が弱くなり、生活闘争ができなくなるのが普通である。

以上のような修行で教師の資格をとると、暖い空気が上昇し、御幣の紙が上の方にヒラヒラしてもえないという、ごくあたりまえなこと、それを神秘的なものとしている。

その教師についても、管長以下十五級にわかれ、教師任命代金といつては賽銭の上前をはねられ、義納金といつては大教正六百圓といふように、神札の賣りあげをピハンハネされ、大教會は六千圓を負擔し、手数料といつては證明書一枚百圓二百圓ととられる。こうなれば、各教會にあつても月並祭等と信者を集めたりして、金もうけに懸命であり、ただ信者のみがやせ細る一方である。

また管長以下幹部たちが、今後の發展の前後策として、いろいろな策をろうしているが、土台がガタガタであるが故に、もはや、どうすることもできないであろう。

また管長以下幹部たちが、今後の發展の前後策として、いろいろな策をろうしているが、土台がガタガタであるが故に、もはや、どうすることもできないであろう。

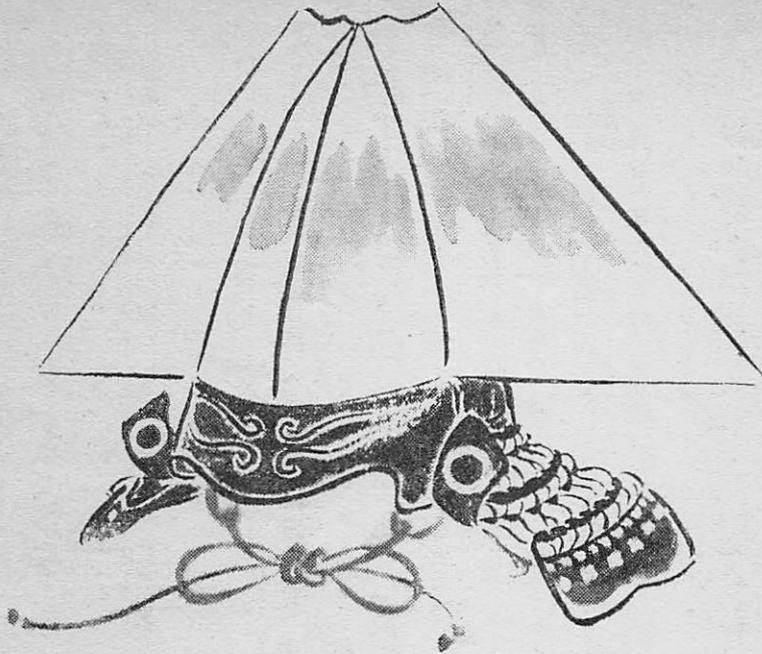
また管長以下幹部たちが、今後の發展の前後策として、いろいろな策をろうしているが、土台がガタガタであるが故に、もはや、どうすることもできないであろう。

あとがき

代表者	設立	信徒数
御嶽教系		677,104
御嶽教	昭和15年	379,038
智覚山民主教教團	昭和22年	151,766
神徳教團	昭和25年	29,530
みたま教	昭和24年	22,626
天常教	昭和23年	21,521
日月教	昭和21年	

(昭和30年12月31日現在 文部省調査より)

(以上、星野豊)



源

小説

日蓮大聖人

——文永法難の巻——(一)

湊 邦 三

山口将吉郎畫

(一)

日蓮は網代笠のひさしをあげて苦屋の方へ歩いて行く。

(なにか、騒ぎが起きてゐるらしいが……)

怒濤が寄せてきたら磯の藻屑と一緒に一捲りもなく攫はれてしまひさうな妙の浦の苦屋にも、漁のことや魚のことや船のことや、掬ひ網、揚げ笊、もがき、釣糸……道具のことなどで絶えず騒ぎが起きてゐたことを、薬王麿の子供の頃によく見てゐる。

しかし、今、日蓮の耳へ入ってくる喚聲、叫聲、眼に映つてゐる人の動きには逼迫したものが感じられて、騒ぎの渦にゐない者は笑つて見てゐられる……そのやうな出来ごとではないらしい。

(たしか、あの邊は、わが家であつたはず……)

鶯の峯の削り取つたやうな形の裾や、その裾をえん／＼と縫つてゐる渚などは昔のままの姿であつたが、苦屋の形や位置などは少しばかり變つてゐる感じ……日蓮が探りながらも懐しげに瞳を光らせ、網代笠を脱つて近付いて行く

と、右往左往してゐた人たちは、端から二軒目の苦屋へ入つたらしく姿が見えなくなつてをり、板塼の破れの見えてゐる……その苦屋は、今は母の梅菊が獨り棲んでゐるわが家に相違なかつた。

(なにごとか、母さまに起つてゐるのであらうか……)

日蓮が胸が踊るやうな懐しさと強い不安を覺えて足を早めた時、

『五郎の奴、なにをしとるのぢやろ！ 誰か、行つて見い！』

苦屋の内に呷鳴り聲が轟いて、逞しい若者が飛出し、日蓮の姿は眼に入らなかつたらしく、北へ向つて砂地を一散に駆けて行き、その後から、皺だらけの

老人が飛出してきて、若者の背へ向つて呷鳴つた。

『氣付け草ぞ！ よいか！ 氣付け草いへば、權太が知つとる！ 大急ぎで貰うてこいよ！』

春四、五月頃に、鈴のやうな白い花をつける蘭の一種に、君影草といふのがある。その根を陰干しにしたものを煎じて服ませると、氣を失つた者が意識を取戻すので、この邊の者は氣付け草といつてゐる。

日蓮が見てゐて、その老人が、年寄つて菱びて小さくなつてゐる隣家の源五郎と氣が付いたのと、老人が苦屋へ入らうとして、日蓮に氣が付いたのと、苦

屋の内から、女の叫聲が聞えてきたのが同時であつた。

『梅菊さまア！ しつかりして！』

途端に、わッ!! と女の泣聲が起つたが、一人や二人ではなかつた。

『あッ!』

源五郎の菱びて皺だらけの顔で、灰色の眼が裂けさうに腫かれた。

『蓮長さま！ いや、違ふ！ 日蓮……日蓮さまぢやないか！』

源五郎は黄色い齒莖を剥きだし大口を開けて叫び、駆寄らうとした瞬間、



心の内に躊躇が起つて立止つた。

そこに網代笠を抱へて立つてゐる僧が、伊豆國へ流されたとか、幕府に赦されて鎌倉に歸つてゐるとか、さまざま噂の傳つてゐる日蓮と思へなくなつたらしいのだ。

「おお！ 源五郎さん、お達者でしたか」

日蓮が苦屋の内に起つた女の叫聲や泣聲に耳を刺され、母の梅菊が重い病氣に罹つてゐることが判つて顔色を變へながら、源五郎に挨拶すると、

「やつぱり、日蓮さまか！」

源五郎は駈寄り飛付いて、萎びて骨ばかりになつてゐる手で、日蓮の法衣を掴んだ。

「早う！ 早う！ 梅菊さま、死にかけておゐでになる！ 早う！」

源五郎は死物狂ひで法衣を引張り、日蓮の背を押して苦屋へ入れながら叫んだ。

「さわ！ さわ！ 蓮長さま……ぢやない、日蓮さまが戻つて見えたぞ！」

「エッ!!」

魂消るやうな聲は、源五郎の女房さわであらう。

日蓮が昔のまゝのわが家へ入つて行くと、妙の浦の漁夫たちが戸口を入つたところの物置き場にも露路にも集つてゐて、女房たちは部屋へ上つてをり、女房たちに圍まれて、顔を仰向けに寝入つた形であるのは、母の梅菊……その枕頭に、源五郎の女房さわがゐて、梅菊の肩へ手をかけて烈しく揺つた。

「梅菊さま！ 梅菊さま！ 日蓮さまぢや！ 日蓮さまが戻つて見えただよ！」

さわは必死に梅菊の耳へ口を付けて叫んだが、この時、髪の毛の白い梅菊は事切れてゐて、糸の断れた人形のやうガク／＼動くだけで、閉ぢられてゐる臉も

開かなかつた。

(二)

日蓮は露路へ入つて、母の姿を見た瞬間、太い眉毛を額へ跳ね、切れの深い兩眼を大きく睜いた。

太い眉毛の根にも眼の内にも、驚愕の色があり／＼と浮んだが、彼は取亂しも狼狽もしないで、網代笠を置くと、上櫃へ腰を下し、源五郎に手傳はれて草鞋をぬいだ。

そして人々に會釋して部屋へ上つて行くと、息を引取つたばかりの母の顔をしげ／＼と見て枕頭へ膝をつき、額へ掌をやり、枯木のやうに瘠せてゐる手を取つて脈を見た。

隣家の源五郎は鐵だらけの顔をつきだし、固唾を呑んで背後に立つてをり、さわをはじめ漁夫の女房たちは、日蓮が薄墨色の法衣をまとひ小袈裟をかけてゐる姿に、恐しいまでの尊さ遅しさを感じて身體を凍め息を呑みひつそりと押黙つてゐるから、碶を洗つてゐる波の音が高くなつてきた。

「どこかに、硯と筆と紙があるはず……」

日蓮が女房たちを振りかへつてさういふと、さわが叫んだ。

「書物をされるのかね！」

「さうです」

「硯と墨は、そこにある！ 誰か、水を……水を汲んできておくれ！」

苦屋の内に息苦しく漂つてゐた沈黙が破れて、漁夫の一人が水を汲みに裏へ駈けて行くと、さわが硯と墨と紙を探しだした。

若い頃から癡意にしてきてゐるから、彼女は隣家のことに詳しい。



日蓮は戀しき慕しき懐しき……無量の感慨を籠めた視線を、刻々に死相を浮べてくる母の顔へ注いでゐたが、

「妙とは蘇生の義ぞ！」

切れの深い兩眼に火のやうな信念を燃上らせて咳くと、數珠を揉んで題目を唱へだした。

『南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……』

彼は題目を三度唱へて、そこに紙をひるげ、さわの手から筆をとつて墨を合ませた。

……此經則爲 閻浮提人 病之良藥 若人有病 得門是經 病即消滅 不死……

日蓮の筆が躍つて鮮かな文字になり、見る／＼内に認められたのは、法華經の内の第七藥王品にある二十八文字……この經は、則ちこれ、閻浮提(世界中)の人の病の良藥なり、もし人病あらんに、この經を聞くことを得ば、病は即ち消滅して、不老不死ならん……といふ意味の文字である。

日蓮は書き終ると、人々に向つていつた。

「火がありませうか、火が……それに、母に服ませます、水を汲んでいただけませんか」

漁夫が二、三人、裏へ駈込んで、源五郎の悴の五郎が氣付け草を持つて歸つたら、直ぐに煎じるつもりで焚いてゐたかまどの下から燃えてゐる薪と、かなまりへ水を汲んでくると、日蓮は低聲で題目を唱へながら、經文を認めた紙を焼いて灰にして、かなまりの水へ入れて和へ、それを母の口へそそいで、數珠を揉み、藥王品を誦唱しはじめた。

『……是故宿王華 以此藥王菩薩 本事品囉果於汝……』

日蓮の聲が朗々と苦屋の内に響渡り、漁夫たちは露路に立つて固唾を呑んでをり、女房たちは部屋の間で肩を寄合ひ、息を殺して眺めてゐる。

『……此經則爲 閻浮提人 病之良藥……』

日蓮の薬王品を誦唱する聲が次第に強くなつて、苦屋の柱が、板壁が、天井が烈しく震ひだした感じ……磯を洗つてゐる波の音も押返されてもしたやう、漁夫や女房たちの耳へ微かにしか入つてこなかつた。

『ひやッ！ 手が動いとる！ 手が……』

源五郎の女房さわが妙な叫聲と一緒に飛出して行つた時、梅菊の顔から死相が消えて、兩眼が瞳かれてゐた。

その時、日蓮が經文の誦唱をやめて、聲高々と題目を唱へはじめると、梅菊の顔が、その方へ向つて動き、幽ながら題目を唱へる聲が咽喉から洩れてきた。

『南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……』

日蓮は題目を唱へ終ると、静かに母を見ながら兩手をついた。

『母さま、お氣付きになりましたか。日蓮、鎌倉から戻つてまゐりました』

漁夫たちの顔にも、女房たちの顔にも息詰るやうな色が浮んでゐて、日蓮と梅菊へ視線がそそがれてゐる。

梅菊は眼を腫いたものの意識は朦朧としてゐるらしく空虚であつたが、日蓮の切れの深い兩眼に生命を吸ひあげられてゐるやう、少しづつ、瞳に光を増してきた。

『おお！』

それは力のない聲であつたが、梅菊の細い咽喉から聲が出て、日蓮へ向つて枯木のやうな手を伸した時、彼女の皺深い顔が輝いてゐた。

『日蓮どの……よう、御無事で……』

『母さま！ お懐しうございます！』

日蓮が母の手を取つて、兩眼にいつばい涙を溜めてさういふと、皺だらけの頬へ涙を溢れさせてゐた源五郎の女房さわがわッ!! と聲を揚げて泣きだし、それに誘はれて、女房たちは啜泣きをはじめ、露路に群つてゐる漁夫たちも頬に涙を光らせて顔を背ける者、兩手で顔を蔽ふ者、赤銅色の逞しい腕で眼を擦る者、鼻汗を吸る者などがあつた。

(三)

『へえ、さうかね』

『そんなに賢かつたかな』

『賢いにもなんにも話にならん』

『どうして、話にならんぢや』

『まるで違ふとつたものな。することがよ』

老人の源五郎と茂四郎を圍んで、妙の浦の漁夫たちが磯に腰を下して話してゐる。

鎌倉から歸つてきた日蓮と蘇生した梅菊とを残して苦屋を出ると、女房たちはそれ／＼に家へ歸つて行つたが、男たちは潮風に吹かれながら、日蓮の噂をしてゐる。

『磯で遊ぶ時にもよ。わしらは蟹を捕つてきて、糸で縛つて引張つて歩いたり、それに飽きると爪を挽いだりして遊ぶのに、薬王鷹さんは木片で砂へ字を書いてゐるのよ』

漁夫の茂七はさういつて、皆を見廻した。

『誰が、字を教へたのぢやろ』

『そりや、父親の太夫さんよ。薬王鷹さん、難しい字をよう覚えとつての。獨りて書いて遊んどるのぢや』

源五郎とならんで磯に腰を下してゐる老人の茂四郎は、若い頃、暴風雨に遭つて難船して、行方が知れなくなつた。

それを女房のおせいが必死に待つてゐる内に、二年たち、梅菊が出産前の身體を大切にしておせいに炊事の手傳ひをしてもらつてゐるところへ、茂四郎が生きて歸り、日蓮が生れた年の夏に、おせいに生ませた子が茂七なのだから、彼は今年四十三、日蓮が薬王鷹と呼ばれてゐた頃の遊び友達なのだつた。

『清澄寺の住職で、今でも達者ぢやろ。道善法印さまがな。その砂文字を見つけられて、學問させたい、寺へ寄越せ〜いうてな。何年も〜勧めに見えたものよ』

源五郎が消えかけてゐる古さの記憶を蘇がへらせて、羨びた顔の眼を懐しげに光らせてさういふと、茂四郎が相槌を打つた。

『薬王鷹さん、いよ〜清澄寺へ登られることになつてな。太夫さんが伴れて行かれるのを、わしら、その先で見送つたが、こんなに小さかつたぞ』

『へえ、さうかね。そんなに小さかつたのかね。わしははじめて日蓮さんを見たのぢやが、大きな坊さまぢやないか』

若い漁夫は信じられないやうな表情になつて、茂四郎を見てゐる。

『そりや、あの時は、薬王鷹さん、十一か十二かぢや。小さいはずよ』

源五郎は蘇生した梅菊に萬一のことがあつてはと苦屋の方を注意深く見ながら話してゐる。

『ぢやが、それから後、修業して戻られる度に、大きく立派になつてゐられる

ので、眼を圓うしたもののぢや。けれど、今日は聲をかけたものの、あんまり立派なもんぢやから、わしや人違ひしたと思ふた』

『なあ、源五郎よ。太夫さんを活して置きたかつたの。太夫さんを……』

七年前に、題目を唱へながら瞑目した太夫を想つて、茂四郎は落凹んでゐる眼に涙を浮べてゐる。

『うん、それよ』

源五郎も大きく首肯いて瘖せて尖つてゐる肩を落した。

『太夫さん、滅多に顔色を動かさんぢやつたが、梅菊さまが息を引取られたのを、日蓮さまが一邊に生返らせるのを見られたら、わが子ながら偉うなつたいふて大喜びされたぢやらう』

『ぢやが、大丈夫かな』

權太の家へ氣付け草をもらひに行つた源五郎の悴五郎が不安げに苦屋の方を見ていつた。

『梅菊さま、息を引取つても、日蓮さまに逢ひたうて、一時は喚び返されて正氣になられても、直ぐにいけなくなるのぢやないかな』

『それが心配ぢやから、わしはここにゐるのよ。あのまゝ一晩でも持ててくれたらええが……』

源五郎が力なくいつた時、日蓮の題目を唱へる聲が苦屋から聞えてきた。

『南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……』

漁夫たちは一齊に苦屋の方へ顔を向け、靜かに耳を澄した。

妙の浦を洗つてゐる波音を縫つて、日蓮の聲は磨いた玉を見るやう朗々と響いてきたが、病氣して寝込むまでは、朝夕に苦屋の内から聞えてゐた梅菊の題目を唱へる弱々しい聲は、いつまでも聞えてこなかつた。

『源五郎よ。今日、一日、持てばええがの』

茂四郎が聲をかけると、源五郎はただ首肯して見せただけであつた。

(四)

『さわさん、まだ寝んでおめでですか』

翌朝、源五郎の女房さわは、梅菊に呼ばれてゐるやうな夢を見て眼を覺すと、大駭を立てて眠つてゐる源五郎を烈しく揺つた。

『おッ！ 起きて……起きておくれ！』

源五郎は駭は止めたが、眼は開けないで、五月蠅さうに身體を揺つて寝返りを打つと、さわへ背を向けてしまつた。

彼は梅菊の身を心配して、昨夜は更けても、日蓮が題目を唱へつづけてゐる聲の洩れてゐる……隣家の氣配を窺つて歩き廻つてゐたのだつた。

『おまへ！ 眼を、眼を……覺しておくれ！ あたし、梅菊さまが、息を引取りながら呼んでゐられる夢を見たんだから……』

『な、なに！ 息を引取られる！』

源五郎が俄破ッ！ と起上ると、苦屋の戸をほとく叩く音がして、梅菊の聲が耳へ入つてきた。

『さわさん、起きておいでだつたら、お願ひします』

『梅菊さまの聲だ！』

竦んだ形で、さわと顔を見合せてゐた源五郎が露路へ飛下りて戸を開けると、眞紅の太陽と薔薇色に染つてゐる水平線と青磁色の海を背にして、梅菊が戸口に立つてゐた。

『源五郎さん、お早うございます』

『……』

源五郎は梅菊へ向つて頭を下げたが、聲は咽喉へ引つかかつて出てこない。もう半月あまりも臥つてゐて、さわが運んで行く粥も僅にしか食べないで、昨日は容態が急變して、一時は息を引取つた梅菊が優しい笑顔を見せて立つてゐるのが信じられない。

『わたくし、お墓参りに行きますから、留守をお願ひします』

その時、源五郎の背後へ恐る／＼きてゐたさわが叫んで飛びだした。

『梅菊さま！ ほ、ほんたうに、治つたのかね！』

『ほ、ほ、ほ……』

梅菊の晴れやかな笑聲を聞いて、源五郎とさわがぎよとん！ となつてゐる。

『さわさん、不思議でせう。いいえ、他人が不思議に思はず、昨夜から、俄に元氣が出てきて、わたくし、不思議でならないのです。日蓮どのを案内して、お墓参りをしてきます』

梅菊が笑顔で會釋して踵をかへしたので、源五郎とさわが茫然となつたまゝ、戸口を出て行くと、

『伯父さま、伯母さま、お早うございます』

薬王麿の頭が偲ばれるやうな聲が飛んできて、日蓮が草履の足で砂地を踏んで近付いてきたが、太い骨組、豊かな肉つき、逞しい身體を薄墨色の法衣で包んで、小袈裟をかけ、數珠を手にしてゐる姿に、四邊を拂ふ威風があつて、源五郎夫婦は思はず掌を合せた。

『昔に變らない御親切を、母さまと一緒に有難く思つてをります。今朝は、父上のお墓へお参りしてまゐります』

『……』

源五郎夫婦は茫然となつてゐて、まだ口がきけない。

法華經の行者日蓮の必死の祈りが、梅菊を蘇生させたことは目撃してゐるのだが、一晩持てればよいがと心配してゐた彼女が、今朝は墓参りに行けるほどの元氣を回復してゐることが信じられないでゐるのだつた。

「さわ！ あれを見い！ 太夫さんと梅菊さまを見るやうぢや！」

源五郎が叫んで指さして、さわが伸上つた。

烏帽子岩に近い渚に、日蓮と梅菊が太陽に向つて合掌して立つてをり、今朝も吹雪のやうに碎けて渚を洗つてゐる波音を縫つて、日蓮が法華經を誦讀してゐる聲が朗々と響いてきてゐる。

その二人の姿が、七年前までは、早起きすれば必ず見られた太夫と梅菊の姿に酷似に感じられるのだつた。

「源五郎よ！ 梅菊さま、まだ持つてゐるかね」
しばらくして、囁かれた聲が背後でして、源五郎が振りかへると、茂四郎が眼をしよぼくさせて立つてゐた。

「茂四郎、梅菊さまは墓参りぢや」
「えッ！」



『あれを見い!』

源五郎の菱びた指が烏帽子岩の先をさしてゐる。朝の陽射しに薔薇色に染つてゐる……その砂地を、髪の毛の白い梅菊に寄添はれて、日蓮が潮風に法衣を吹かれて歩いてゐる。(以下次號)

編集後記

○七十二號につづいて本號も發行が遅れみなさまに多大な御迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申しあげます。七十四號は例月どおり七月始に完成するようにいたしますので、宜しく御寛恕下されんことを御願ひ致します

○戸田先生の方便品書講義は今回で終りましたが、又さらにわかりやすくして掲載して行きたいと思ひます。

○辻先生の『歴史に残る者の死』は二回にわたつて休載になりましたが、來號より想を新たにされた名筆をふるわれることになつております。

○時機を得て富士門流の清信を師子吼された石田主幹の『富士の裾野』は更に高き格調の麗筆となつて來月號で完結いたします。

○男子青年部の大行進を顧る池田參謀室長の『學會の息吹・男子青年部の歩み』は今後ずつと續けられますが、來月號からは尚一層の生命力の充滿した雄筆が期待できるはずであります。

○湊先生の『小説・日蓮大聖人』は伊豆流

難の巻が近く單行本『第五卷、過潮逆潮』として發刊の豫定であります。御悲母の命を四年延べられた大聖人様は、われら凡夫の幸福のため、小松原の受難、十一通御書による國諫等の御本佛開顯の御振舞いをなさる段階に入つて愈々興味津々。

次號(七十四號)豫告

- 巻頭言……………戸田 城聖
- 種種御振舞御書拜讀③……………一般講義より
- 富士の裾野(下)……………石田 次男
- 歴史に残る者の死⑥……………辻 武壽
- 學會の息吹・男子青年部の歩み④……………池田 大作
- 正しい信心のために……………小平 芳平
- 生活と價值論……………研究座談會
- 質問會の系統的記録……………質問會から
- 世界の宗教(第十八話)……………黒柳 明
- 日本の邪宗教(その五)……………
- 實踐の教學……………編集委員
- 小説・日蓮大聖人……………湊 邦三
- 文永法難の卷(三)……………
- その他、多数

大白蓮華歌壇



北條小枝子選

第二部隊 金澤 忠夫

御書講義身に當るふし浮べつゝ、いつしか深く眠り入りたり

卅二部隊 川上 靈吾

疲れたる足引ずりて折伏に險しき坂を登りはじめぬ

京都支部 佐々木美風

手ずさびに摘みてもどりし一皿の芹を佛に供へまつらむ

蒲田支部 川端勝太郎

涌き出る泉の如き本尊の慈悲にこたえん折伏の行

城東支部 外川 清治

身延潭をまかり出るとのたまひし興師の心胸にしみ入る

福 島 横山 富男

かゝる身の奇しき縁も久遠なる師のみ言葉に涙するわれ

本郷支部 三浦 大助

草木の露しげき世におほらけき光にあへる此身尊し

京都支部 石本 愛子

友の指す岸邊をみれば美しく小雨けふりてさつき花咲く

蒲田支部 小出 通子

おほらけき佛の慈悲の深くして同志嬉しくこゝに集へり

仙臺支部 若生 善策
さくら咲く蔵王の麓しづけかり五月の空に出湯けふりて

足立支部 阿部孝太郎
總會に萬餘の同志身をよせて心一つに師の聲をきく

大宮支部 豊田 聿子
總會に急ぐ車窓にツツキりと銀の靈峯仰ぎみるかな
會場をゆるがす拍手手拍子に心は一つ廣布の集い

目黒班 仁宮 良夫
身を清め口をすゝぎてみ佛に難のり越えし感謝さゝぐる

“天長節を祝しまつる”
蒲田支部 吉田 戊

妙法の輝く空に限りなき國のみいづを祈る朝かな
題詠の部『石』
杉並支部 井上みどり

着々と工事場の石たゝまれて大法城のきづかれてゆく
蒲田支部 柿沼 高雄

亡き父をしきりに戀ふる夕暮に石ころ一つ道にけりゆく
小岩支部 小室 しげ

突き立てる石切山の岩角に今年も咲けり藤の花房
梅田支部 北野 久子

久々に歸り來りしふるさとの踏むもなつかし門の石橋

廣宣流布への實弾！ 定價 一部十二圓 五週六十圓 無料

聖教新聞

○聖教新聞を讀まずして功德を語るなかれ
○末端指導は聖教新聞で
○信心によつて得た感激の體驗談の數々
○學會の生命であり學會の動きは全部わかる
○讀者のみならず一刻も早くお届けする
○ため東京及び地方都市に販賣店を
○設置しました。もよりの販賣店を御利用下さい。
◆新宿區信濃町六
三二ノ新聖教新聞社

萬代不易の大哲學書
牧口常三郎著 遺弟戸田城聖補訂 價值論

○カント以來の價值の内容眞善美に誤りありと断定し
○西洋哲學を破折された牧口先生の世界的の大哲學
○戸田先生は遺弟として先生の價值論を補訂し世界の
○學會にこれを送つてその流布を期されて、價值的
○學會員は一日も早く價值論の奧義を體得し、價值的
○な生活をして行こう

邪宗はなぜ人を不幸にするか

戸田城聖監修 創價學會教學部編 折伏教典

○牧口先生以來養成された教學はこの一書に結實した
○宗教にかんするあらゆる問題が解明されている
○本書によつて一日も早く折伏の奧義をつかまれたい

定價 二五〇圓 三二圓

戸田城聖監修 日蓮大聖人御書十大部講義

- 第一卷 立正安國論 定價 二〇〇圓
 - 第二卷 開目抄 (上) 定價 二五〇圓
 - 第三卷 開目抄 (下) 定價 二〇〇圓
 - 第四卷 觀心本尊抄 定價 三〇〇圓
- 如來滅後五百歲始

戸田城聖校閱 創價學會教學部篇

『身延派・國柱會・佛立宗 創價學會批判』の妄説を破す

崩壞に怯える邪宗日蓮宗の事實無根の悪口誹謗を悉く粉碎す

邪宗破折用のポケット型 單行本 定價 一〇〇圓

創價學會 日蓮宗身延派 法論對決勝利の記録

小樽問答誌

はかなきものは邪宗の教學である！ 邪宗を震撼させ身延の崩壞を早めた問題の法論の真相は？

本文二三〇頁・寫眞多數・頒價二〇〇圓 發行所・創價學會内 小樽問答誌刊行會

濱邦三著 題簽 堀日亨 第一卷・磯風山風 挿畫 木村莊八 第二卷・朝陽夕陽 山口將吉郎 第三卷・天竺地天

小説 日蓮大聖人 第四卷

鈴木・松虫

—全七卷完結— 製・箱入・美裝・B六版・本文三七四頁 會員頒價三〇〇圓 下四〇圓
○末法の御本佛の御ふるまいは、いかにあらせられたか
○日蓮正宗・第五十九世御法主・堀日亨上人に師事され
○正確な史料に基づいて書かれた清冽無比で興味津々たる
○本書は巷間に溢れる流傳俗説を一掃するものである

指導法を生かした問題集の解説

戸田城聖監修 小平芳平著 教學基礎問題解説

○内容の概要 一、教學の基礎となる約百五十問題について御書を引いて解説されている
二、附録には御書によく出てくる單語三百が平易に解釋されている

この一書によつて基礎教學を完成しよう 頒價 二〇〇圓

大白蓮華 第七十三號

昭和三十三年五月二十五日印刷 昭和三十三年六月一日發行 頒價 八十圓

編輯兼 東京都市新宿區信濃町三二ノ六
發行人 理事長 小泉隆
印刷所 東京都澁谷區田每町九
印刷所 東京都澁谷區田每町九
發行所 東京都新宿區信濃町三二ノ六
宗敎法人 創價學會
振替口座東京 一三三三番

昭和三十年五月十八日第三種郵便物認可
昭和三十一年六月二十五日印刷(毎月一)
昭和三十一年六月二十六日發行(同發行)
日國裁特別承認第三〇五九號

大白蓮 第一卷 第七十三號 (六月號)

